附錄

詩篇

（新テキスト）

註釈はヴルガタ訳の詩篇参照。

第一篇

義人の幸福と悪人の不幸

一 幸福なるかな、不敬なる者の勧告に従わず、罪人の道に立入らず、不遜なる者の集会に坐することなき人。 二 かかる人は却つて主の御律法を喜び、昼も夜も御律法に思を潜む。 三 またかかる人は、水流の辺に植わりし樹の、時節来りて実を結び、その葉も萎れざる如く、為す所みな栄ゆるなり。 四 不敬なる者は然らず、実に然らずして、風の吹き散らす籾殻の如し。 五 されば不敬なる者は審判に、罪人は義人の集いに堪えざるべし。 六 其は主、義人の道には配慮し給えど、不敬なる者の道は滅ぶべければなり。

第二篇

メシアの勝利

一 いかなれば諸国は騒ぎ、いかなれば民等空しきことを企つや。 二 地の諸王起り立ち、諸侯また共に謀りて、主に敵し、その受膏者に敵す。 三 我等いざ彼等の桎梏を打砕き、その罠をわが身より取り捨てん。」と。 四 天に住み給う者笑い、主彼等を嘲り給う。 五 か

六　くて後、憤りて彼等に語り、激しく怒りて彼等を怖じ惑わしめ給う。六「されど我、わが
七　聖なる山シオンの上に、わが王を立てたり。」七我主の詔命を普く告げ知らせん、主は我
八　に曰えり、「汝はわが子なり、我今日汝を生めり。八我に求めよ、さらば我汝に遺産とし
九　て諸々の国民を、汝の領地として地の果を与えん。九汝鉄の杖もて彼等を治め、陶器
一〇　師の器の如くに之を打砕かん。」と。一〇されば今、王等よ、曉れかし、地の司等よ、教
一一　を受けよ。一一畏懼もて主に仕え、之に向いて歓喜の声を挙げ、戦きつつ、恭順の意を表
一二　せ。一二然らずば彼怒り給うべく、その御忿怒忽ちにして燃ゆるや、汝等道より亡び失せ
　　ん。凡て彼の御許に遁れ隠るる者は幸福なるかな。

第三篇

主に対する信頼

一　一ダヴィドの詩。彼がその子アブサロムを避けて逃げし時の作。
二　二主よ、我を悩ます者の如何に多きぞや、我に逆いて起つ者多し。三我に就きて「彼に
四　は天主の救拯なし。」と云う者多かり。四されど主よ、汝はわが楯、わが栄誉、わが頭

を抬ぐる者にて在す。五我声を挙げて主に呼ばはりしに、彼聖なる山より我に聽き給え
り。六我は臥して眠りぬ、主我を支え給うに由り、我また目ざめたり。七幾千の民、囲
繞り立ちて我を攻むとも、我は怖れじ。八主よ、起ち給え。わが天主よ、我を救い給え。
実に汝はすべて我に仇する者の頬を撃ち、罪人の歯を砕き給えり。九救拯は主の御許に
あり、御民の上に御祝福あれ。

第四篇

主による平安

一琴に合せて歌隊長に歌わしめたるダヴィドの詩。
二わが呼ばわる時、我に応え給え、わが義の天主よ、患難の時に我を扶け起し給う者よ、
我を憐み、わが祈祷を聽き容れ給え。三人々よ、汝等いつまで心鈍きや。何とて空虚を
好み、虚偽を求むや。四知れ、主はその聖者を奇しき者となし給う。我の呼ばわる時、
主我に応え給わん。五汝等震い慄きて、罪を犯すなかれ。己が臥床にて、心の中に顧み
思い、默すべし。六義の犠牲を捧げ、主に待望め。七「誰か我等に幸を示さんや。」と云

八　う者多し。主よ、御顔の光を我等の上に注ぎ給え。
九　小麦と葡萄酒との豊かなる、時にも優る歓喜を、汝はわが心に与え給えり。
我臥すや、忽ちにして安眠す。是、主よ、汝ただ独り、我を安らかならしめ給う者なればなり。

第五篇

人々の不義に対し天主に祈る

一　笛に合せて、歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドの詩。
二　主よ、わが言に御耳を貸し、わが呻吟に御意を留め給え。
三　わが王、わが天主よ、わが祈祷の声に御耳を傾け給え。
四　即ち我は汝に願い奉る、主よ。
五　汝は朝まだきにわが声を聴き給う、我朝まだきに汝に祈願をこめて待望む。
六　不義を喜ぶ神に非ざれば、悪しき者は汝の許に留まらず、不敬なる者は汝の御前に立たず。
七　汝は不義を行う者を憎み、すべて虚偽を言う者を亡ぼし給う。血を流したる人と欺く人とは、主の憎み給う所なり。
八　されど我は汝の御仁慈の豊かなるによりて、汝の家に入らん、汝を畏れ、汝の聖殿に向いて平伏さん、
九　主よ。我には敵あれば、我を導きて汝の義の中を歩

ましめ、わが前に汝の道を坦かならしめ給え。一〇蓋し、彼等の口には誠実なく、その心は人を陥れんことを図り、その咽喉は開ける墓、その舌は諂いの具なり。一一天主よ、彼等を懲らし給え、彼等は自らの策謀によりて滅び去れかし。彼等は汝に叛きたれば、その罪悪の多きに由りて、之を逐い出し給え。一二されど汝の御許に遁れ来る者は皆楽しみて、絶えせず喜び歌うべし。汝彼等を護り給いて、汝の御名を愛する者汝によりて楽しまん。一三蓋は主よ、汝義人を祝し、御好意を楯の如くにして、之を囲み給うべければなり。

第六篇

主に御憐憫を乞う

一 琴に合せ、一オクターヴ低く、歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドの詩。

二 主よ、憤りて我を責め給うなかれ、激しく怒りて我を懲らし給うなかれ。三 我弱けれ

三 ば、主よ、我を憐み給え。わが骨震い慄けば、主よ、我を癒し給え。四 わが魂も亦いたく怖じ惑えり、さるを、主よ、何時までぞ……。五 主よ、帰り来て、わが魂を救い給え、

六　汝の御憐憫によりて我を健かならしめ給え。六夫れ、死しては汝を思い出す者なし、冥
七　府にありては誰か汝を讃め称えんや。七我は呻き疲れ、夜な夜な泣きてわが衾を濡らし
八九　涙をわが臥床に注ぐ。八わが眼悲嘆に霞みたり、そはわが諸々の敵故に老ゆ。九不義を
一〇　なす者よ、悉く我を去れ、主わが泣く声を聴き給いたればなり。一〇主わが願いを聴き給
一一　えり、主わが祈祷を承け給えり。一一わが敵は皆赤面していたく狼狽し、速かに退きて恥
　　じ入るべし。

不義者に対し天主の正義に訴う

第七篇

一　一ダヴィドがベンヤミン族の人クスの言ゆえに、主に向かいて歌いし悲しみの歌。
二　二主わが天主よ、我御許に遁れ行く、すべて我を責むる者より、我を救い、我を助け出
三　し給え。三然らずば、助くる者のなきままに、何者か獅子の如く、わが魂を捉えて、引
四五　裂かん。四主わが天主よ、我もしかかる事をなし、わが手にもし不義あり、五我もし宰
六　なきに我に仇なす者をさえ救いながら、わが友に禍を来したることありとせば、六敵わ

七　が魂を追い捕え、わが生命を地に蹂躙り、
わが誉を塵に埋めよかし。
七　主よ、御忿怒も
て起ち給え、立ち上り給いて、我を虐ぐる
者の猛り狂うに抵り、汝の布令出し給える審
八　判の時に、わが為に起ち給え。八諸国の民の
群を汝の周囲に集わしめ、汝その上に高く
九　坐し給え。九主は万の民の審判者に在す、主
よ、わが義しきに従い、我に罪なきに従い
一〇　て、我に正義を帰し給え。一〇義の天主よ、汝は心と腎とを探り給えば、不敬なる者の悪
一一　意を絶やし、義しき者を固うし給え。一一我には天主こそ楯なれ、彼は心の直き者を救い
一二　給う。一二天主は義しき審判者にして、日毎に威嚇し給う神にて在す。一三彼等もし立帰ら
一四　ずば、彼その御剣を研ぎ、御弓を引き絞りて狙いを定め、一四彼等の為に死の飛道具を用
一五　意し、その矢を火矢となし給わん。一五見よ、かの者は不義を孕し、悪意を妊み、欺瞞を
一六　一七　産めり。一六彼堀を掘りて深くしたれど、その作りし坑に陥れり。一七その悪意は己が頭に
一八　還り、その暴虐は己が脳天に戻らん。一八されど我は主を、その義の故に讃め称え、いと
高き主の御名を謳歌わん。

第八篇

感嘆すべき主の御業

一　「葡萄酒搾り」の歌の調に合せて、歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドの詩。

二　主よ、我等の主よ、汝の御名は全地に普くして、如何に妙なるかな、汝その御稜威を

三　天に拡げ、三讃美を幼兒と乳兒との口より出さしめて汝に逆う者に備え給えり、是、敵

四　と仇とを阻み止めんが為なり。四我汝の御指の業なる天と、汝の据え給える月と星とを

五　観るに、五人そも何者なれば、汝之を記憶に留め給い、人の子また何者なれば汝之を御

六　心にかけ給うや。六ただ僅かに之を天使より卑き者に作り、之に栄と誉とを冠らしめ、

七　七之に御手作を治むる権能を与え、万物をその足の下に服せしめ給えり。八羊も牛も

八　悉く、また野の獣も、九空の鳥も海の魚も、海路を通うすべての物も、皆然り。一〇主

九　よ、我等の主よ、汝の御名は全地に普くして、如何に妙なるかな。

一〇

第九篇　上

天主裁き給えかし

一「ムト・ラベン」の歌の調に合せて、歌隊長に歌わしめたるダヴィドの詩。

二主よ、我心を尽して汝を頌え、汝の奇しき御業を悉く物語らん。

三我、汝によりて喜び躍り、汝の御名を讃め歌わん、至高き者よ。

四そはわが敵退き仆れて、汝の御面前より亡び去りたればなり。

五是即ち、汝わが義とわが訴訟とを引受け、義しき審判者として、御座に坐し給いしによるなり。

六汝は諸国の民を責め、不敬なる者を亡ぼし、その名を永久に抹し給えり。

七敵は敗れて永遠の滅亡に逐い込まれたり、汝諸邑を毀ち給いて、その記憶も失せぬ。

八されど主は永久に坐し、審判んとて御座を堅うし給えり。

九しかして御自ら、正義もて世を裁き、公平もて民に、判決を下し給わん。

一〇主は虐げらるる者の避難所、患難の時の折よき避難所なり。

一一されば汝の御名を知る者は、汝を恃みとせん、其は主よ、汝を求むる者は汝之を棄て給わざればなり。

一二シオンに住み給う主に向かいて歌い、諸々の民の間にその御業を告げよ。

一三其は血の復讐をなし給う主

一四 彼等を御心に留め、貧しき者の叫びを忘れ給わざればなり。一四我を憐み給え、主よ。我
一五 が敵より受くる苦患を顧し給え、我を死の門より救い上げ給う者よ。一五これ、我が娘な
るシオンの諸門にて、あらん限り汝の讃美を宣べ、御祐助ゆえに喜び躍らんがためな
一六 り。一六諸国の民は己が作りし坑に陥り、己が隠し置きたる罠にその足を捕られたり。
一七 一八 一七主は現れて審判を行い給えり、罪人は己が手の作の網にかかれり。一八罪人等は冥府に
一九 退け、天主を忘れたるすべての国民も亦然せよ。一九実に貧しき者いつまでも忘れらるる
二〇 にあらず、また惨しき者の信頼も永久に空なることはあらじ。二〇主よ、起ち給え、人間
二一 をして勝たしめず、諸国の民をして汝の御眼前に審判を受けしめ給え。二一主よ、彼等に
恐怖を生ぜしめ、諸国の民にその人たる身の程を知らしめ給え。

第九篇　下　（第十篇）

一 一何なれば主よ、遥かに立ちて、患難の時に自己を隠し給うや、二その間に、不敬なる者
二 高ぶりて、憐なる者苦しめられ、前者が廻らしたる奸計にかかるものを。三実に罪人己
三 が欲望を誇り、掠奪する者罵りて主を嘲る。四不敬なる者は心高ぶりて云う、「彼は罰

五　することをせじ、天主なる者なし。」と。その思う所すべてかくの如し。
六　つの時にも栄ゆ、汝の審判はその心を離るること遠し、彼はその諸々の敵を侮る。
七　その心の中に云う、「我は動かじ、代々より代々に至るまで、我の不幸になることあらじ。」と。
八　その口には呪詛と虚偽と欺瞞と満ち、その舌の下には苦しめと悩ましとあり。
九　彼は村の近処に坐して窺い、闇討して罪なき者を殺す、その眼は貧しき者を狙う。
一〇　獅子が洞に在る如く、隠処にありて窺い、憐なる者を捕えんと待伏せし、憐なる者を捕えてその網に引き入る。
一一　彼は屈みて地に蹲まる、その暴力にあいて貧しき者仆る。
一二　彼その心の中に云う、「天主は忘れたり、面を背けて、更に見ることなし。」と。
一三　起ち給え、主なる天主よ、汝の御手を挙げ給え、貧しき者を忘れ給うなかれ。
一四　不敬なる者、天主を蔑みてその心の中に、「彼罰することをせじ。」と云うや。
一五　汝は欝し給う、苦労と悲愁とを見守りて、之を御手に引受け給う。貧しき者は汝に身を委ぬ、汝は孤児の扶助者にて在す。
一六　罪人と心根悪しき者との腕を挫き給え、汝彼の悪意を罰し給わんに、そは残ることあらじ。主は世々の世々まで王にて在す、諸国

一七　の民はその地より失せたり。一七主よ、汝は憐なる者の望を聴き給えり、彼等の心を強く
一八　し、御耳を貸し給えり、一八これ、汝が孤児と虐げられたる者との権利を擁護り給い、最
早地の人間の恐怖を起さしむることなきに至らんためなり。

第十篇（第十一篇）

義人は安し

一　一歌隊長に歌わしめたるダヴィドの作。
二　我は主の御許に遁る。如何なれば汝等わが魂に云うや、「鳥の如く山に飛び去れ。二蓋
三　は見よ、罪人等弓引絞り、弦に矢を番え、暗所にありて心直き者に射かけんとすればな
四　り。三基礎の崩るる時には、義人も何をか為し得ん。」と。四主はその聖殿に在す。主—
五　その御座は天にあり。その御眼は眺め、その御瞼は人の子等を査べ給う。五主は義しき
六　者と不敬なる者とを査べ給う。不義を好む者はその御心にこれを憎み、六罪人等の上に
七　炭火と硫黄とを降らし給わん、熱風は彼等の酒杯の分なり。七夫れ、主は義しく在して
義を好み給う、直き者はその御面を仰ぎ見ん。

第十一篇（第十二篇）

高ぶる仇に対して

一一オクターヴ低く、歌隊長に歌わしめたるダヴィドの詩。

二主よ、救い給え、蓋し敬虔なる者は減じ、人の子等の中より信実失せ行くなり。三人々各々その近き者に瞞り語り、欺く唇と二心もて語る。四主願わくはすべて欺く唇と大言壮語する舌とを絶やし給え。五「我等の舌もて我等は強し。我等の唇は我等の為にあり。誰か我等の主たらん。」と云う者等をも然なし給え。六「下なる者苦しみ、貧しき者呻くが故に、今我起たん、」と主曰う。「我、望む者に救拯を齎さん。」七主の御言は誠と実ある言なり、錬りきたえて土より分ち、七度淨めし銀なり。八主よ、汝は我等を恙なからしめ給わん、永久にかかる輩より我等を護り給わん。九人の中にて最陋しき者の驕り傲る時、不敬なる者徘徊り歩くなり。

篇十二篇（第十三篇）

悩める義人の嘆き

一 歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドの詩。

二 主よ、何時までぞ。汝全く我を忘れんとし給うや。何時まで
し給うや。三 何時までか我日毎わが魂の慟哭と、わが心の悲哀とに輾転ばん。何時まで
かわが敵わがし上にありて傲り高ぶらん。四 主よ、わが天主よ、顧みて我に聴き給え。わ
が眼を明らかならしめ、我を死の中に眠らしめず、五 わが敵をして「我彼に勝てり。」と
云わしめ給わざれ。これわが仇我の仆れしを喜ばざらんためなり。六 そは我汝の御憐憫
に倚頼みたればなり。わが心をして汝の御祐助に由り喜ばしめ給え、我をして善きもの
を我に賜える主を讃め歌わしめ給え。

第十三篇（第十四篇）

不信なる者に

一 歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドの作。

二 愚なる者はその心の中に云う、「天主なし。」と。彼等は腐敗せり、憎むべき事を行えり
善をなす者なし。 三 主天より人の子等を望み見て、曉る者天主を求むる者の有無を糾し
給うに、 三 皆おしなべて迷いたり、拗けたり、善をなす者なし、一人だになし。 四 不義
をなす者皆正気に帰らんとせざるか。彼等はパンを食う如く、わが民を食い尽す。彼等
は主に呼わらざりしなり。 五 されど後には彼等恐怖に震い慄かん、そは天主義しき者の
族と共に在せばなり。 六 汝等は憐なる者の企てを破らんと欲す、されど主は彼の避雖所
にて在す。 七 願わくはイスラエルの救済、シオンより出で来らんことを。主御民の運命
を飜し給わん時、ヤコブは喜び躍るべし、イスラエルは楽しむべし。

第十四篇（第十五篇）

主の家に入るに足る者

一 ダヴィドの詩。
二 主よ、汝の幕屋に宿るべきは誰ぞ。汝の聖なる山に住うべきは誰ぞ。 三 汚れなく歩み、
義しきをなし、その心に思う所直く、 三 その舌もて誹らざる者、その隣人に悪をなさず、

四　またその近所の人に侮辱を加えざる者、直からざる者を蔑めど、主を畏るる人を敬う者、誓約をなして己損を蒙るとも之を変更ず、

五　その金銭を高利目的に貸し与えず、また賄賂を受けて罪なき人を害わざる者、これなり。かくなす者は永久に、動揺なかるべし。

第十五篇（第十六篇）

天主に身を献げたる人

一　ダヴィドのミクタム。

二　願わくは我を守り給え、天主よ、我御許に避難るれば。

三　我主に申す、「汝はわが主なり、汝の外我に善きものなし。」と。

四　彼はいかに奇しく、御国に在る聖者等に、わがすべての愛情を注がしめ給いしぞ。

五　他の神に従う者の嘆きは弥増すなり。我は彼等の供物の血を潅がじ、また彼等の名をわが唇に唱えじ。

六　主こそわが嗣産として、またわが酒杯に、受くべき分なれ。汝こそわが領地を守り給う者なれ。

七　準繩はわが為佳き所に当れり、わが嗣産はいたく我を喜ばしむ。

八　我主を頌え奉る、そは彼我に諭告を賜い、夜もわが心我を警むればなり。

九　我は常に主をわが眼前に置く、彼わが右に在せば、我

は動揺ぐことなからん。九是故にわが心楽しみ、わが魂喜び躍る。剰えわが肉も安らかに憩わん。一〇そは汝わが魂を冥府に遺棄き給わず、汝の聖者に腐敗を見しめ給わざるべければなり。一一汝は我に生命の径、御許にある溢るる歓喜、汝の右なる恒久の快楽を示し給わん。

第十六篇（第十七篇）

敵の手より救われんことを祈る

一ダヴィドの祈祷。

二主よ、義しき訴訟を聴き、わが叫喚に御意を留め、わが欺かざる唇より出る祈祷に御耳を貸し給え。

三わが宣告は御眼前より出でよ、汝の御眼は直きを欟し給う。

四汝わが心を探り、夜に我を訪れ、火もて我を験し給うとも、わが内心に不義を見出し給わじ。わが口は人の如く罪を犯したることなし。

五わが歩みは固く汝の径に立ち、わが足は蹣跚くことなかりき。

六天主よ、汝我に応え給えば、我汝に呼わり奉る、我に御耳を傾けて、わが言を聴き給え。

七汝の妙なる御憐

八　憫を示し給え、汝の右に遁れ隠るる者を仇より救い給う者よ。
九　瞳の如く我を護り、御翼のかげに我を隠し、
一〇　我に暴力を加うる罪人より免れしめ給え。わが敵猛り狂いて我を
一一　囲み、一〇その情なき心を閉し、その口もて誇らしく語る。一一今やその歩み我を囲み、
一二　彼等我を地に打倒さんと目を注ぐ、一二恰も大口あきて獲物を啖わんとする獅子の如く、
一三　また物蔭に潜み窺う若獅子の如し。一三主よ、起ち給え、彼に馳せ向い、之を打倒し給え。
一四　わが魂を御剣もて罪人より、一四御手もて人々より、救い出し給え、主よ、己が受くべき
一五　ものをこの生にて受け、汝が宝もてその腹を充し給える人々より。彼等の子等も飽き足りて、己に剰れるものをその子等に遺すなり。一五されど我は義にありて、汝の御面を仰ぎ見ん、目覚めては汝を眺めて飽き足らん。

第十七篇（第十八篇）

敵の手より救われたる感謝

一　一歌隊長に歌わしめたる、主の僕ダヴィドの詩。彼が主に向かいてこの歌の言を誦えしは、主が彼を諸々の敵の力とサウロの手とより救い給いし時のことなり。二即ち曰く、

三　主よ、わが力よ、我汝を愛し奉る。
四　わが難を避くべき懸崖、わが楯、わが救済の角、わが砦よ。
五　わが敵より救われん。
六　死の波涛我を取囲み、滅亡の湍流我を恐れしめ、
七　冥府の縄我を囲繞り、死の罠我を捉えたり。
八　我患難の裡に主を呼び、わが天主に向かいて叫びけるに、彼その御殿よりわが声を聴き給えり、即ちわが叫喚御耳に入りしなり。
九　時に地は震い慄き、山々の基揺らぎ動きたり、そは彼忿怒に燃え立ち給いければなり。
一〇　その鼻孔よりは煙立上り、その口よりは焼き尽す火上り、炭之によりて燃え出せり。
一一　彼天を傾けて下り給い、御足の下には黒雲ありき。
一二　かくて智天使に乗りて飛び、風の翼に
一三　翔り、闇を纏いて覆となし、暗き水、濃き雲を幕となし給えり。
一四　その御眼前の光輝故に、炭火燃え上りぬ。
一五　主天より雷鳴を轟かし給えり、至高者御声を発し、御矢
一六　を放ちて彼等を打ち散らし、雷光を繁くして彼等を打ち倒し給えり。
一七　時に海の底現れ、世界の基礎露出したり、主の御叱咤によりてなり。
一八　彼高処より御手をさし伸べ、我を捉えて大水より引き出し、わが最強き敵と、我を憎み、

一九 且我に優りて力ある者等とより、我を救い出し給えり。一九彼等はわが禍の日に我を襲い
二〇 しが、主はわが為に砦となり、二〇我を広き野に連れ出し、我に救済を施し給いぬ、是、
二一 我を愛し給うによりてなり。二一主はわが義しきに応じて我に報い、わが手の浄きに循い
二二 て我に酬い給えり、二二そは我主の道を守り、罪を犯してわが天主を離れしことなく、
二三 二四 二三そのすべての御誡命を眼前に置き、その御掟を棄てしことなければなり。二四却つて我
二五 は御前に完くして、過失を避けたり。二五されば主は、わが義しきに応じ、その御眼
二六 前にわが手の浄きに循いて、我に酬い給いしなれ。二六汝は御自らを、直き者には直く、
二七 完き者には完く見せ、二七浄き者には浄く見せ給えども、狡猾なる者には己が深慮のほど
二八 二九 を示し給う。二八蓋は汝賤しき民を救い給えども、高ぶる眼を打落し給えばなり。二九実に
三〇 主よ、汝はわが光を輝かし給う、わが天主よ、汝はわが暗黒を照らし給う。三〇寔に汝に
三一 よりてこそ、我敵軍に馳せ向い、わが天主によりてこそ、我石垣を躍り越すなれ。三一天主
三二 の道は完し、主の御言は火に験されたり。彼は御許に遁れ来る者の楯にぞ在す。三二抑々
三三 主を他にして誰か天主たらん、また我等の天主を外にして何か巌たらん。三三天主こそ我

三四 に力を帯せしめ、わが道を全からしめ給う者、三四 わが足を鹿の足の如く速からしめ、我
三五 を高処に立たしめ給う者、三五 わが手に戦う事を、わが腕に青銅の弓ひく事を習わせ給う
三六 者なれ。三六 汝救いの御楯を我に賜えり、汝の右手我を支え、汝の心配我を大ならしめ
三七 三八 たり。三七 汝わが歩む道を広くし給いければ、わが足よろめかざりき。三八 我わが敵を追い
三九 てこれに追いつき、彼等を滅ぼすまでは帰らざりき。三九 我は彼等を粉砕してまた起つを
四〇 得ざらしめぬ、彼等はわが足下に仆れたり。四〇 かく汝我に力を帯せしめ、我に抵抗いし
四一 者をわが下に屈ましめ、四一 わが敵をして、背を向けて逃げ走らしめ、我を憎む者を打散
四二 らし給えり。四二 彼等は主に叫びぬ——されど彼等を救う者なく、かれも彼等に、応え給
四三 わざりき。四三 我は風の前の塵の如くに彼等を散らし、巷の泥の如くに彼等を蹂躙りたり。
四四 四四 汝は我を民の争いより救い出し、我を立てて異邦人の頭となし給えり。わが知らざり
四五 四六 し民我に臣事へ、四五 言を聞くや否や忽ち我に従いぬ。異邦人は我に媚びたり、四六 異邦人
四七 は色蒼白めたり、震えつつその城を出でたり。四七 活きませ、主よ。讃むべきかな、わが
四八 巌、崇め称うべきかな、わが救主なる天主。四八 わが為に仇を返し、諸民を我に服せしめ

四九 給いし天主、四九わが敵より我を解き放ち、我に抵抗う者の上に我を挙げ給いし者よ、汝
五〇 は暴ぶる人より我を救い出し給えり。五〇されば主よ、我異邦人の間にて汝を頌え、汝の
五一 御名に讃歌唱わん。五一汝はその王に大なる勝利を賜い、その油を注がれしダヴィドと、
その裔とに限なく御憐憫を垂れ給う者なり。

第十八篇（第十九篇）

被造物界に現れたる主の栄光

一 一歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドの詩。
二 二諸天は天主の栄光を物語り、蒼穹はその御手の業を告ぐ。三昼は昼に言を送り、夜は
四五 夜に知識を伝う。四その声の聞えざる、言もなく話もなし。五その響は全地に及び、そ
六 の言は世界の果にまで至る。彼は彼処に日の為帷幕を設け給えり。六日は閨を出る新郎
七 の如く現れ、道を走る巨人の如く雀躍す。七その出るや天のこの涯よりし、その運り行
八 くや天のかの涯に及ぶ。その熱は何物も免れざるなり。八主の法は完全にして、霊魂を
九 爽かならしめ、主の規定は確実にして、教養なき者をも賢からしむ。九主の諭告は直く

一〇 して、心を喜ばしめ、主の誡命は淨くして、眼を明らかならしむ。一〇主を畏るる念は純
一一 くして、永久に存し、主の審判は真にして、悉く義し。一一そは黄金よりも、多くの純金
一二 よりも慕うべく、蜜よりも、生蜜の滴りよりも甘し。一二たとい汝の僕之に意を用い、之
一三 を守るに甚だ勉むとも、一三誰か己の過失を知るを得んや。我を隠れし科より淨め給え。
一四 一四また汝の僕を傲慢より守りて、そのわが衷に跋扈することなからしめ給え。さらば我
一五 は玷なきものとなりて、大いなる科を免るるに至らん。一五願わくはわが口の言、わが心
の思念の、御前に嘉納せられんことを、わが巖、わが贖主なる主よ。

第十九篇（第二十篇）

出陣する王の為の祈

一 一歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドの詩。
二 二願わくは、主患難の日に当りて汝に聴き、ヤコブの天主の御名汝を護り、三聖所より
三 汝に救援を遣り、シオンより汝を支え、四汝のすべての供物を御心に憶え、汝の燔祭を
四 嘉納し、五汝の心の望む所を汝に賜い、汝の図る所を悉く成らしめ給わんことを。
五

六　我等汝の勝利を悦び、我等の天主の御名によりて旗を挙げん、希わくは主汝の願をすべて叶え給え。七　今や我知る、主その油を注がれし者に勝利を賜いしなり、その聖なる天より、御右手の勝たざるなき御力もて、彼に応え給いしなり。八　或者は戦車により、或者は馬によりて強し、されど我等は我等の天主なる主の御名によりて強し。九　彼等は崩折れ倒れたり、されど我等は起ちてしかして立てるままなり。一〇　主よ、王に勝利を与え給え、また我等の汝を呼びまつる日には、応え給え。

第二十篇（第二十一篇）

王の勝利に対する感謝の歌

一　歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドの詩。二　主よ、王は汝の御力によりて楽しみ、汝の御祐助によりていかに甚く喜び躍るぞ。三　汝は彼にその心の望を許与し、その唇の願を拒み給わざりき。四　即ち汝は幸あらしむる祝福もて彼を迎え、純金の冠をその頭に置き給えり。五　彼汝より生命を請求めしに汝之に世々の世々に至るまでの、長き齢を与え給いぬ。六　汝の御祐助によりて彼の栄光

七 は大なり、汝は稜威と美とを彼に加え給えり。
八 実に汝は世々に至るまで彼に祝福を賜い、之を御眼前に於る歓喜もて楽しませ給えるなり。八これ、王は主に依頼む故に、至
九 高者の恩恵によりて、揺ぐことなかるべければなり。九願わくは汝の御手、汝のすべて
一〇 の敵の上に下り、汝の御右手汝を憎む者を見出さんことを。一〇汝の御面の現るる時、彼
等を火の竈の中にある如くなし給え。希わくは主御忿怒によりて彼等を絶やし、火彼等
一一 を焼き尽さんことを。一一その裔を地より、その胤を人の子等の中より亡し給え。一二彼等
一三 たとい汝に向かいて悪事をたくらみ、陰謀をめぐらすとも、勝つことあらじ。一三蓋は汝
彼等をして、背を向けて逃げ走らしめ、その面目がけて御弓を引絞り給うべければなり。
一四 一四主よ、御力もて起ち上り給え、我等汝の剛きさを讴い頌えんかな。

第二十一篇

メシアの受難

一 一歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドの詩。
二 二わが天主よ、わが天主よ、何ぞ我を捨て給いしや。汝は遠く離れて、嘆願を、わが叫

三 ぶ言を聞き給わず、
四 御意を留め給わず。
五 されどイスラエルの稱うるものよ、汝は聖所に住み給う。
六 我等の父祖は汝に希望を繫けたり、希望を繫けたるに、果して汝彼等を救い給えり。
七 汝に向かいて呼わりしに、救われたり。汝に希望を繫けたるに、恥辱を受けざりき。
八 されど我は蛆虫にして人に非ず、人々の侮る所にして民に蔑まれたる者なり。
九 我を見る者みな我を嘲笑い、唇を反し、頭を振る、
一〇 彼主に依頼む、主彼を助けよかし、彼を愛せば、救えよかし。」
一〇 されど汝は我を胎内より出し給えり、我をわが母の懷にありて晏如ならしめ給えり。
一一 我は生れしより汝に委ねられたり、我わが母の胎内にありしより、汝はわが天主にて在す。
一二 我悩みをれば、汝我を遠く離れて立ち給わざれ。援くる者なければ、汝近く在し給え。
一三 多くの若牛我を囲み、バサンの牡牛我を取巻き、
一四 我に向かいてその口を開き、猛り吼ゆる獅子の如し。
一五 我は水の如く流し出され、わが骨は悉く外れ、わが心臓は蝋の如くなりて、わが腹の中に融けたり。
一六 わが咽喉は土器の破片の如くに乾き、わが舌はわが顎に付く、汝は我を死の塵に臥させ給えり。
一七 実

に多くの犬ども我を囲み、悪を行う者の群我を取巻く。彼等はわが手わが足を貫けり、
一八 我わが骨を悉く数うるを得。されど彼等は我を打目戍り、我を見て悦び、一九 互にわが
衣服を分ち、わが下衣を籤引にす。二〇 されど主よ、汝は遠く立ち給うなかれ、わが援助
者よ、急ぎ来て我を救い給え。二一 わが魂を剣より、わが生命を犬の手より、助け出し給
え、二二 我を獅子の口より、憐なる我を野牛の角より、救い出し給え。二三 我汝の御名をわ
が兄弟に伝え、集会の只中にて汝を讃めん。二四 汝等主を畏るる者よ、彼を讃めよ。ヤ
コブのすべての裔よ、彼を頌えよ、イスラエルのすべての裔よ、彼を畏れよ。二五 実に彼
は惨しき者の惨しきを軽んじ厭い給わず、之に御面を隠し給わず、その彼に叫ぶ時には
之に応え給えり。」二六 大いなる会の中にてわが讃むるは、汝より来るなり、我は彼を畏
るる者の眼前にて、わが誓願を還さん。二七 貧しき者食して飽き、主を求むる者之を讃め
ん、「汝等の心世々に生きよかし。」二八 地の果悉く思い出でて主に立帰り、諸国の族皆
その御眼前に平伏さん。二九 其は国は主の有にして、主諸国の民を治め給えばなり。三〇 地
に眠る者皆彼のみを拝み、塵に下る者すべてその御前に屈まん。かくてわが魂彼の為に

三一　活き、三　わが裔彼に事え奉り、主のことを語り伝えて、代々三後世に及ぼさん、彼等は
また後に生るる民に主の義を告げん、「主はかくなし給えり。」と。

第二十二篇　（第二十三篇）

わが牧者なる天主

一　ダヴィドの詩。
一　主我を牧い給う、我に缺くるものぞなき。　二　彼綠の牧野に我を臥させ、わが憩うべき水
の辺に我を連れ行き、三　わが魂を回復せしめ、その御名の為に我を正しき径によりて導
き給う。　四　我たとい暗き谷に歩み入るとも、禍を恐れじ、汝我と共に在せばなり。汝の
鞭と汝の杖、これこそ我を慰むれ。　五　汝わが仇の見る所にて、わが為に食卓を備え、わ
が頭に油を注ぎ給う、わが酒杯は充ち溢れたり。　六　わが生くる日の限り、御仁慈と御恩
恵と我に添わん、かくて我時久しく主の家に住まん。

第二十三篇（第二十四篇）

聖所詣での歌

一 ダヴィドの詩。
二 地と之に充てる物、世界と之に住める物は、主の有なり。
三 蓋は彼之を海の上に据え、之を河の上に固め給いたればなり。
四 主の山に登るべきは誰ぞ、その聖所に立つべきは誰ぞ。
五 手は汚れなく、心は淨く、空しき事に意思を向けず、またその近き者に偽り誓わぬ人ぞ、それなる。
六 かかる人は主より祝福を、その救主なる天主より報酬を受けん。
七 これこそ彼を求むる者、ヤコブの天主の御面を求むる者の族なれ。
八 門よ、汝等の頭を挙げよ、古の扉よ、揚がれ、栄光の王の入り給わんために。
九 門よ、汝等の頭を挙げよ、古の扉よ揚がれ、栄光の王の入り給わんために。
一〇 「その栄光の王は誰なるぞ。」「万軍の主——これこそ栄光の王に在ずなれ。」

なやみより救われん事を願う

第二十四篇（第二十五篇）

一 ダヴィドの作。

二 主よ、わが天主よ、我わが魂を汝に挙ぐ。
三 我汝に依頼む、我の滅ぼさるることなからしめ給え、わが敵の我に就きて喜ぶことなからしめ給え。
四 実に汝を恃みとする者は、皆恥辱を蒙らじ、恥辱を受くべきは、浅慮にも信義を破る者にこそ。
五 主よ、汝の道を我に示し、汝の小径を我に教え給え。
六 汝はわが救主なる天主にて在せば、我を汝の真理に拠りて導き、且教え給え。我は常に汝に待望む。
七 主よ、世々の昔よりの汝の御憐憫と汝の御仁慈とを思い出で給え。
八 わが若き日の罪とわが科とを憶い給うなかれ、主よ、汝の御仁慈ゆえに、汝の御憐憫に従いて我を憶い給え。
九 主は仁慈深く、また直く在す、この故に罪人に道を教え、
一〇 遜る者を正義に導き、遜る者に己が道を教え給う。
一一 凡て主の径はその契約と誠命とを守る者には恩恵なり、信実なり。
一二 主よ、汝は御名の為に、わが罪を赦し給わん、実に是は大いなり。
一三 主を畏るる人は誰ぞ、彼之に選ぶ

一三 べき道を教え給う。一四その人は幸福の中に住い、その裔は地を獲べし。一五主は之を畏る
一四 る者に親しみ、彼等にその契約を明示し給う。一五わが眼は常に主に向かう、そは彼わが
一六 足を罠より引放し給うべければなり。一六我を眷顧み、我を憐み給え、実に我は孤独にし
一七 一八 て憐なる者なり。一七わが心の苦悩を軽うし、わが心痛より我を脱れしめ給え。一八わが惨
一九 状とわが心労とを鬱して、わが愆を悉く赦し給え。一九わが敵を見給え、彼等は実に多く
二〇 して、激しき憎悪もて我を憎むなり。二〇わが魂を護り、我を救い給え、これ我が御許に
二一 逃げ隠れしによりて、恥辱を蒙らざらんためなり。二一願わくは、無辜と誠実と我を衛れ
二二 かし。主よ、我汝に待ち望めばなり。二二天主よ、すべての苦悩よりイスラエルを救い出
し給え。

第二十五篇（第二十六篇）

罪なき故に天主の審判を恃む

一 ダヴィドの作。
主よ、我を義しく裁き給え、そは我罪なき道を歩み、主を恃みて、揺がざりければなり。

二 主よ、我を査べ、我を糺し、わが腎と心とを探り給え。三 蓋は汝の仁慈わが目の前にあり、我汝の真理によりて歩めばなり。四 我は不義の輩と共に坐せず、虚偽の徒と共に集わず。五 悪を行う者の集会を憎み、不敬なる者と共に座を占めず。六 主よ、我は罪なきによりてわが手を洗い、汝の祭壇をめぐる、七 そは広く讃美を伝え、汝の諸々の奇しき御業を物語らんためなり。八 主よ、我は汝の家の住居と、汝の栄光の幕屋のある所とを好む。九 わが魂を罪ある者と共に、わが生命を血を流す人と共に、取去り給うなかれ、一〇 彼等の手には罪悪あり、その右手には贈物満てり。一一 されど我はわが罪なき道を歩む、我を贖い、我を憐み給え。一二 わが足は平坦なる道に立つ、我集会の中にて主を讃め奉らん。

第二十六篇

（第二十七篇）

天主に対する不動の信頼

一 ダヴィドの作。主はわが光わが救いなり、我誰をか恐れん。主はわが生命の防塞なり、我誰にか怖ぢ惑

二　わん。　二わが肉を食まんとて、悪しき徒輩我を襲うとも、わが敵わが仇こそ自ら躓き倒
三　るるなれ。　三たとい陣立てして我を攻むとも、わが心臆せじ、たとい戦い起りて我を敵
四　とすとも、我安んじてあらん。　四ただ我一つの事を主に請い奉る。わが求むる所とは是
五　なり、わが生くる日の限り、我主の家に住いて、主の美しきを楽しみ、その聖殿を仰ぎ
五　見んことなり。　五蓋し彼は禍の日に我をその天幕に隠し、その幕屋の奥にかくまい、巖
六　の上にあげ給わん。　六さて今わが頭は、我を囲む敵の上にあげられたり、されば我その
七　幕屋の内にて、歓喜の犠牲を献げん、主に向かいて歌い奏でん。　七主よ、わが叫ぶ声を
八　聞し召して、我を憐み我に応え給え。　八わが心は汝に語る、わが面は汝を探し求む。主
九　よ、我は汝の御面を探し求め奉る。　九我に御面を隠し給うなかれ。怒りて汝の僕を斥け
一〇　給うなかれ。汝はわが援助なり、我を追い我を棄て給うなかれ、わが救主なる天主よ。
一一　一〇たといわが父わが母の、我を棄つることありとも、なお主は我を迎え給わん。　一一主よ
一二　汝の道を我に教え、わが仇ゆえに我を平坦なる径に導き給え。　一二わが敵の望むがままに
一三　我を付し給うなかれ、其は偽証する者、暴行を図る者、我に起ち逆いたればなり。　一三我

一四　は信ず、我生ける者の地に於いて、主の善きものを見ん。一四主を待望め、雄々しかれ、汝の心を強うして、主を待望め。

第二十七篇（第二十八篇）

懇願

一　ダヴィドの作。

二　主よ、我汝に向かいて呼わり奉る、わが巖よ、我に聾となり給うなかれ。然らずして、汝もし我に応え給わずば、我墓穴に下る者の如くにならん。三汝に向かいてわが叫ぶ時、汝の聖なる御殿に向かいてわが手を擧ぐる時、わが懇願の声を聴き給え。三罪を犯す者と共に、また不義をなす者と共に、我を引き去り給うなかれ、彼等はその近き者に平和を語れども、心には悪しき念を抱けるなり。四その行為に応じ、その所行の悪意に応じて彼等に与え、その手の業に応じて彼等に賞ぎ、そのなせる所によりて之に報い給え。五彼等は主の行い給う所とその御手の業とを顧みざれば、彼是等の者を毀ちて、建て給うことなからん。六主は称えられさせ給え、其はわが懇願の声を聴き給いたればなり。

七 主よ、わが力、わが楯よ、わが心彼に依頼みたれば、我助けられたり。この故にわが心喜び躍る、我歌もて彼を讃め奉る。
八 主はその民には力なり、その受膏者には救済の砦なり。
九 汝の民を救い、汝の家督を祝し給え、彼等を牧い、之を永久までも抱き行き給え。

第二十八篇（第二十九篇）

天主の御稜威の讃美

一 ダヴィドの詩。
二 天主の子等よ、主に帰し奉れ、光栄と權能を主に帰し奉れ。
三 御名の栄誉をば主に帰し奉れ、聖き飾して主を拝めかし。
四 水の上に主の御声す。稜威の天主は轟きませり、主は大水の上に在す。
五 主の御声は力あり、主の御声は威厳あり、
六 主の御声は杉を砕く、主はリバノンの杉を砕き給う。
七 彼はリバノンを犢の如くに、サリオンを若き野牛の如くに、跳躍らせ給う。
八 主の御声は火焔を招び、
九 主の御声は荒野を震撼わせ給う。
主の御声は荒野を震撼わせ給う、主はカデスの荒野を震撼わせ給う。
十 主の御声は槲を捩じ切り、森を裸にす、その御殿にては

一〇 皆「光栄あれ！」と云う。一〇主は洪水の上に坐し給えり、主は永久に王として坐し給わ
一一 ん。一一主はその民に力を賜わん、主はその民を平和もて祝し給わん。

第二十九篇（第三十篇）

死より救われし感謝

一 ダヴィドの詩、奉殿紀念祭の歌。
二 主よ、我汝を讃め称えん、其は汝我を救い、わが敵の我に就きて喜ぶことなからしめ
三 給いければなり。三主よ、わが天主よ、我汝に向かいて呼わりしに、汝我を癒し給え
四 り。四主よ、汝はわが魂を冥府より導き出し、我を穴に下る者の中より救い給いぬ。
五 その聖者等よ、主に歌えかし、その聖き御名に感謝献げよ。六実に御忿怒は時の間な
六 れども、御仁慈は一生に亘る。夕には泣くことありとも、朝には歓喜あるなり。七わが
七 安かりし時我云えり、「我永久に揺ぐことあらじ。」と。八主よ、汝は御好意もて、我に
八 誉と力とを授け給いしが、汝の御面を隠し給える時、我怖じ惑いぬ。九主よ、我汝に呼
九 わり、わが天主の御憐憫を嘆願い奉る。一〇「わが血に、我が穴に下ることに、何の益か
一〇

あらん。塵は汝を讃め称えんや、又は汝の忠信を宣べ伝えんや。」二主よ、聴きて我を
一一 憐み給え。主よ、わが祐助者となり給え。一三汝はわが悲嘆を舞踊に転じ、わが粗衣を解
一二 きて、我に喜悦を帯せしめ給えり。一三これ、わが魂の汝に奏で歌い、默することのなか
一三 らん為なり。主わが天主よ、我永久に汝を讃め奉らん。

第三十篇（第三十一篇）

苦しむ者の祈り

一 歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドの詩。
二 主よ、我永久に滅びざらんとて、汝の御許に逃げ隠る。汝の義により我を救い給え。
三 御耳を我に傾け給え、疾く来りて、我を遁し給え。わが為に避難の巌、堅き城となり
四 て、我を救い給え。四実に汝はわが巌、わが城なり、されば汝の御名の為に我を率い、
五 我を導き給わん。五汝はわが避難所にて在せば、彼等が我に隠し設けたる網より我を引
六 き出し給わん。六我汝の御手にわが霊魂を委ね奉る、主よ、誠ある天主よ、汝我を救い
七 給わん。七汝は空しき偶像を崇むる者を憎み給う、されど我は汝を恃みとし、八汝の御

九　憐憫に喜び楽しまん。其は汝わが惨状を顧み、苦悩の時にわが魂を助け、我を敵の手
一〇　に付さずして、わが足を広き所に立たせ給いければなり。一〇主よ、我苦悩の中にあれば
一一　我を憐み給え。わが目、わが魂、わが身、悲嘆に衰う。一一実にわが生命は苦労の中に、
　　わが年齢は嘆息の中に尽く。わが力は患難によりて失せ、わが骨は萎え果てにけり。
一二　一二我はわがすべての敵には侮辱の対象、わが隣人には笑柄、わが知人には恐るべき者と
一三　せられたり。戸外にて我を見る者、我を避けて逃ぐ。一三我は死者の如く忘れられて心よ
一四　り消え失せ、砕けたる器の如くになれり。一四実に我は多くの人の叱声を聞きたり――到
一五　る所に恐怖あり。彼等は相集いて我を敵とし、わが生命を奪わんと図りぬ。一五されど主
一六　よ、我汝に依頼みて云う、「汝はわが天主なり。」と。一六わが運命は汝の御手にあり。
一七　我をわが敵の手より、また我を責むる者より、挽ぎ放ち給え。一七汝の僕に向かいて御顔
一八　を晴れやかならしめ、御憐憫もて我を救い給え。一八主よ、我汝を呼び奉りたれば、我を
　　して滅びに至らしめ給わざれ。不敬なる者こそ滅ぼされ、默して冥府に逐わるべきなれ。
一九　一九高ぶり蔑みて無礼にも義人を誹る、虚偽の唇は唖となれかし。二〇主よ、汝を畏るる者

の爲に蓄え、人々の眼前にて御許に自を寄する者に示し給う、汝の御仁慈は如何に大いなるかな。二一汝は彼等を御顏の陰に匿して人々の企図より免れしめ、彼等を天幕の中に庇いて舌の諍いを避けしめ給う。二二主は頌えられさせ給え、其は堅固なる城市の中にて我に奇しき御憐憫を示し給いたればなり。二三即ち我恐れ戦きて、「我は汝の御眼に見放されたり。」と云いしが、わが汝に呼はりし時、汝はわが懇願の声を聽き給えるなり。二四主を愛し奉れ、その諸々の聖者よ、主は忠実なる者を守り給えども、傲慢の行為ある者には強かに報復い給う。二五すべて主に待望む者よ、雄々しくして、汝等の心強かれ。

第三十一篇（第三十二篇）

罪赦されし人の幸福

一ダヴィドの教訓詩。

一幸福なるかな、その不義を赦され、その罪を蔽われし者。二幸福なるかな、主が愆を帰し給わず、その心に虚偽なき人。三わが默したりし間は、わが呻吟頻りにして、わが骨衰えにけり。四即ち、汝の御手昼も夜もわが上に重くして、わが力夏の暑熱による如く

五 尽き果てたり。五 我わが罪を汝に告白し、わが愆を隠さざりき。「我わが不義を主に告白し奉る。」と我云いしに、汝わが罪の責任を免し給えり。六 この故に敬虔なる者みな必要なる時汝に祈らん、大水襲い来るとも、彼等の許には到らざるべし。七 汝はわが避所なり、我を苦悩より禦ぎ守り、わが救霊の喜悦もて我を囲み給わん。八 我汝に教え、汝の歩むべき道を示し、わが目を汝に注ぎて諭さん。九 智恵なき馬や騾馬の如くなるなかれ、その暴るるは轡手綱もて引きとむべし、然せずば彼等汝に近づかず。一〇 不敬なる者の悲嘆は多かれども、主に待望む者は憐憫之を囲む。一一 義しき者よ、主によりて喜び楽しめ、すべて心の直き者よ、喜び躍れ。

第三十二篇（第三十三篇）

天主の全能に依り頼む

一 義しき者よ、主によりて喜び躍れ。讃美は直き者にこそ応わしけれ。二 小琴執りて主を頌えよ、十絃の琴を奏でて彼を謳えよ。三 新しき歌を彼に歌え、調べよく歌え、音も高らかに、四 蓋は主の御言は直く、その御業は悉く信実なればなり。五 彼は義と法とを愛

六　で給う、主の御恩恵は地に充満てり。　六天は主の御言によりて、その全ての群は御口の
七　氣息によりて成れり。　七彼は革袋に盛る如く海の水を集め、波涛を倉庫に納め給う。
八九　八全地は主を畏れ、世に住める者皆彼を崇むべし。　九蓋は彼言い給いしに、是等成り、
一〇　命じ給いしに、存したればなり。　一〇主は諸国の策謀を空しからしめ、民の思を徒労ならし
一一　しめ給う。　一一主の計画は永久に、御心の思は代々に存す。　一二幸福なるかな、主がその天
一三　主にて在す国人。　一三その世嗣にと選み給える民。　一四主は天より望見て、すべての人の子を
一四五　樹し、　一四その御住居のある所より、地に住むあらゆる者を眺め給う。　一五彼はすべて彼
一六　等の心を造り給いし者、その諸々の所作をみそなわし給う者なり。　一六王は軍兵多きによ
一七　りて勝つに非ず、武人は力大なるによりて助かるに非ず。　一七勝つ為には馬も頼むに足ら
一八　ず、己が力大なればとて助からず。　一八視よ、主の御眼は彼を畏るる者の上に、その御恩
一九　惠を望む者の上にあり。　一九是、彼等の霊魂を死より救い出し、飢饉の時にも彼等を養い
二〇　給わんとてなり。　二〇我等の魂は主を待望む。彼こそは我等の祐助者にして楯に在すなれ。
二一　二一されば我等の心彼によりて楽しみ、我等その聖なる御名を頼みとなす。　二二主よ、願わ

くは我等の汝に待望む如く、御憐憫我等の上にあらんことを。

第三十三篇（第三十四篇）

聖なる敬畏

一ダヴィドがアビメレクの前にて狂気をよそおい、彼に逐われて去りし時の作。
二我いつの時にも主を頌え奉らん、その讃美は恒に、わが口にあらん。三わが魂主を
誇りとし、謙遜なる者聴きて喜べかし。四我と共に、主を崇めよ、我等諸共にその御名
を讃めあげん。五我主を求めしに、彼等に応え、我をあらゆる恐怖より助け出し給えり。
六彼を仰ぎ見よ、さらば汝等晴れやかにならん、汝等の面の恥に赧むことなからん。
七見よ、憐なる者叫びしに、主聴き給いて、之をそのすべての苦悩より救い給えり。
八主の天使、主を畏るる者の周囲に陣を置きて、彼等を助く。九主のいかに慈しみ深く
ましますかを味い見よ。幸福なるかな、その御許に逃げ隠るる者。一〇主を畏れよ、その
聖者等。彼を畏るる者には足らざることなければなり。一一権勢ある者貧しくなりて飢え
たり、されど主を求むる者は佳き物に欠くることなからん。一二来れ、子等よ、我に聴け、

一三 我汝等に主を畏るることを教えん。一三生命を惜しみ、善きものを享けんとて齢の長から
一四 んことを望む人は誰ぞや。一四惡しきことには汝の舌を、虚偽の言には汝の唇を抑制め
一五 よ。一五惡を離れて善をなし、平和を求めて之を得んと努めよ。一六主の御眼は義人を眷顧
一七 み、その御耳は彼等の叫声を聴くなり。一七主の御顔は惡をなす者に背向けらる、彼等の
一八 記憶を地より滅ぼさんとて。一八義人叫びしに、主之を聴容れ、彼等をそのすべての苦悩
一九 二〇 より救い出し給えり。一九主は心痛める者に近く在し、気の挫けたる者を救い給う。二〇義
二一 人の禍は多し、されど主そのすべてより彼を助け出し、二一その骨を悉く守り給う。その
二二 一つだに砕かるることあらじ。二二惡意は不敬なる者を駆りて死に至らしむ、義人を憎む
二三 者は罰せらるべし。二三主はその僕等の魂を救い給う、すべてその御許に逃げ隱るる者は
罰せらるることなからん。

第三十四篇（第三十五篇）

迫害の時の祈願

一 一ダヴィドの作。

二　主よ、我と争う者と争い、我と戦う者と戦い給え。　三　小干、大楯を執りて、我を救助に起ち給え。　三　槍を揮い給いて、我に迫る者を禁ぎ止め、わが魂に云い給え、「我こそ汝の救済なれ。」と。　四　願わくはわが生命を狙う者恥辱を得て赤面し、我に悪しき事を図る者後に退りて羞わんことを。　五　彼等は主の天使の之を逐いたてん時、風の前なる籾殻の如くなれかし。　六　主の天使の彼等を追いかけん時、その道は暗くして滑れかし。　七　蓋は彼等故なく我に網を張り、謂なくわが生命の陥穴を掘りたればなり。　八　願わくは思わざるに滅亡彼等に来り、その張りし網彼等を捕え、その掘りし穴彼等を陥いれんことを。

九　されどわが魂は主によりて喜び、その御祐助ゆえに楽しまん。　一〇　わが能力の限りを尽して云わん、「主よ、誰か汝の如き者あらん、汝は苦しむ者を力ある者より、苦しむ者と貧しき者とを掠奪する者より、救い給うなり。」と。　一一　無法なる証人等立ち上りて、わが知らざる事を我に問えり。　一二　彼等はわが善に報ゆるに悪を以てし、わが霊魂を孤独になしたり。　一三　されど彼等の病みたりし時、我粗衣を纏い、断食してわが魂を苦しめ、わが裡に祈願を披瀝せり。　一四　恰も友の為、わが兄弟の為にする如く、我悲しみて歩み、

一五 さながら母を悼む者の如く、我悲嘆に身を屈めたり。一五さるを彼等は、わがよろめく時に喜び集い、相集まりて我に逆らい、思わざるに我を打ちたり。彼等は我を引裂きてやまず、一六我を攻め、我を嘲笑い、歯がみして我に向かえり。一七主よ、汝は何時まで默視し給うや。咆ゆる者よりわが魂を、獅子よりわが生命を救い給え。一八我大いなる集会の中にて、汝に感謝し、衆くの民の中にて汝を讃め奉らん。一九不法なるわが敵をして、我に就き喜ばしめ給うことなく、謂なく我を憎む者をして、眸せしめ給うことなかれ。二〇蓋は彼等平和の言を語らず、地の穏和なる人々に対して欺くことを図ればなり。二一また彼等は我に向かいて口を開き、「ああ、ああ、我等己が眼もて見たり。」と云うなり。二二主よ、汝は見給えり。默し給うなかれ、主よ、我を遠く離れ在すなかれ。二三起ち給え、醒めてわが弁護に当り給え、わが天主よわが主よ、わが訴訟の為に。二四主よ、汝の義に随いて我を裁き給え。わが天主よ、彼等をして、我に就き喜ばしめ給うなかれ。二五その心の中に、「ああ、是ぞ我等の望みし所。」と思わしめ給うなかれ。「我等彼を呑み尽せり。」と云わしめ給うなかれ。二六わが禍を悦ぶ者は、皆諸共に恥を得て赤面し、我に向

二七 かいて高ぶり立つ者は、狼狽と恥辱とを纏えかし。二七わが訴因を好しとする者をして喜び楽しましめ、恒に云わしめ給え、「その僕の救済を嘉し給う主は大いに祝せられさせ給え。」と。二八さらばわが舌汝の義を、絶えせず汝の讃美を、宣べ伝えん。

第三十五篇（第三十六篇）

罪人の悪意と主の御仁慈

一 歌隊長に歌わしめたる、主の僕ダヴィドの作。

二 一不敬なる者には、不義その心の中にて語る、その眼の前には天主を畏るる念あらざるなり。三実にかかる者は己が慾も発かるることなく、憎まるることなしと、その心の中に自惚る。四その口の言は不義と欺瞞、彼は善を知り且行うことを廃めたり。五臥床にありては、不義を企み、よからぬ道に踏み止まりて、悪を厭わず。六主よ、汝の憐憫は天にまで達し、汝の信実は雲にまで及ぶ。七汝の義は天主の山の如く、汝の審判は深き海の如し。主よ、汝は人をも畜をも護り給う。八天主よ、汝の御恩恵は如何に貴きぞ。人の子等は御翼の蔭に馳せ寄る。九彼等は汝の家の肥えたるに飽かさる、汝は彼等に汝

の歓楽の流を飲ましめ給う。一〇実に汝の御許には生命の泉あり、汝の光にこそ我等光を
見るなれ。一一汝を祀る者に汝の恩恵を、心の直き者に汝の公義を、絶えざらしめ給え。
一二高ぶる者の足をして我を踏ましめ給わず、罪ある者の手をして我を動かさしめ給わざ
れ。一三視よ、不義をなす者倒れたり、彼等投げ倒されてまた起つを得ず。

第三十六篇（第三十七篇）

天主のむくい

一ダヴィドの作。
一悪を行う者の故に赫怒るなかれ、また不義をなす者を羨むなかれ。二蓋は彼等草の如く
速かに枯れ、緑草の如く萎るべければなり。三主に頼りて善をなせ、さらば汝この地に
住みて、事なきを得ん。四主によりて喜べ、さらば彼汝の心の願い求むるものを汝に賜わん。
五汝の道を主に委ね、彼を恃みとせよ、さらば彼自ら行い、六汝の義を光の如く
現し、汝の権を真昼の陽の如く明らかにし給わん。七主によりて安息んじ、彼によりて
待望め。已が道を真幸く進む者ありとて、また悪事を企む者ありとて、怒るなかれ。

八 激昂をやめ、憤怒を棄てよ。汝悪を行わざらん為に、怒るなかれ。九 蓋は悪を行う者は滅ぼされ、主に待望む者は地を獲べければなり。一〇 即ち不敬なる者は少時にしてあらずなるべく、汝その所在に目を留むとも、彼最早あらざるべし。一一 されど柔和なる者は地を獲て、平和の豊かなるを悦ばん。一二 不敬なる者は義人に対して悪事を企て、切歯して之に向かう。一三 主は彼を嘲笑い給う、その日来るを見給えばなり。一四 不敬なる者、剣を抜き、弓を引絞る、そは憐なる者貧しき者を打倒し、直き道を歩む者を殺さんとてなり。一五 その剣は己が心臓を刺貫き、その弓は折らるべし。一六 義しき者の有てる少許のものは、不敬なる者の大いなる富に優る。一七 蓋は不敬なる者の腕は折られんも、義しき者は主之を支え給うべければなり。一八 主は善良なる者の生くる為に配慮し給う、彼等の嗣は永久にあらん。一九 彼等は災害の時にも滅びざるべく、飢饉の日にも飽かざるべし。二〇 されど不敬なる者は亡び、主の敵は牧野の美しさの如く枯れ行き、さながら煙の如く消え失せん。二一 悪しき者は借りて返さず、されど義しき者は憐みありて施す。二二 それ、彼の祝し給える者は地を獲べく、その呪い給える者は滅ぼさるべし。二三 人の歩みは主に

二四 よりて確実にせられ、その道は彼の嘉し給う所なり。二四その人たとい倒るとも、全く打
二五 ち伏すことなからん、主その手を支え給えばなり。二五我は曾て童にして今は翁なれども
二六 義しき者の棄てられ、その裔のパンを乞えるを見たることなし。二六彼はいつの時にも憐
二七 みありて貸し与う、さればその裔も祝せらるべし。二七悪を離れて善をなせ、これ汝が永
二八 久に住まるを得んためなり。二八蓋は主義を好み、その聖者等を棄て給わざればなり。悪
二九 人は滅ぼさるべく、その裔は絶やさるべし。二九義人は地を獲て、永久に其処に住まわん。
三〇 三〇義人の口は智慧を説き、その舌は直きことを語る。三一彼の心にはその天主の法あり、
三一 されば其の歩みよろめくことなし。三二悪しき者は義しき者を窺い、之を殺さんと努む。
三二 三三主は彼がその手中にあるを見棄て給わず、また彼が裁かれん時に之を罪し給わざるべ
三三 し。三四主に依頼みて、その道を守れ。さらば彼汝を挙げて、地を獲しめ給わん。汝は不
三四 敬なる者の絶やさるるを見て悦ばん。三五我は不敬なる者の高ぶりて、繁れる杉の如くは
三五 びこれるを見たり。三六されど我過ぎ行きしに、視よ、彼既にあらざりき、之を探ねたれ
三六 ども、見当らざりき。三七善人を見守り、義人を打眺めよ。実に穏かなる人には子孫あれ
三七

三八 三九 四〇

ど、三八罪人は皆根絶にせられ、不敬なる者の子孫は斷滅さるべし。三九義人の救済は主より来る、彼はその患難の時の避難所にて在す。四〇かく主は彼等を助け、彼等を救い給う、彼等を不敬なる者より解放ち、彼等を護り給う。そは彼等その御許に逃げ隠るればなり。

第三十七篇　（第三十八篇）

痛悔者の懇願

一記念の為のダヴィドの詩。

二主よ、憤りて我を責め給うなかれ、激しく怒りて我を懲らし給うなかれ。三寔に汝の矢は我に立ち、汝の御手はわが上に下れり。四汝の御憤りによりてわが肉に健かなる所なく、わが罪ゆえにわが骨に全き所なし。五実にわが愆はわが頭を越え、重荷の如くわれに甚だ重し。六わが愚かさの故に、わが打傷は悪しき臭して、腐れ行きたり。七我はいたく傾き屈み、終日悲しみ歩む。八蓋はわが腰到る所灼くるが如く、わが肉に健かなる所全くなければなり。九我は衰え、疲れ果てたり、わが心の呻つに由りて、我は呻く。一〇主よ、わが望はすべて御前にあり、わが呻吟は汝に隠れなし。一一わが胸轟き、わ

一二　が力我を去り、わが眼の光さえ我より失せゆく。一三わが友わが仲間はわが災厄より遠ざ
一三　かり、わが近親も遥かに立つ。一三わが生命を狙う者罠をかけ、我に悪しき事を企む者滅
一四　ぼさんと脅かし、何時も詭計をめぐらす。一四されど我は聾者の如く聞かず、また口を開
一五　かざる唖者の如し。一五かく我は聞かざる人の如く、また口に応答なき人の如くになれり。
一六一七　一六主よ、実にも我は汝に依頼み奉る、主よ、わが天主よ、汝聴き容れ給わん。一七即ち我
一八　は云う、「彼等をして我に就きて悦ばしめ給うなかれ、わが足の滑る時、彼等をして我
一九二〇　に向かいて誇らしめ給うなかれ。」と。一八実に我将に倒れんとす、わが苦しみは常にわ
二一　が前にあり。一九即ち我はわが愆を告白し奉る、わが罪ゆえに我は悩めり。二〇しかも故な
二二　く我に仇する者は力強く、不当に我を憎む者は多し。二一また悪もて善に報ゆる者は、我
二三　が善に従うとて、我を悩ます。二二主よ、我を見棄て給わざれ、わが天主よ、我より遠ざ
　　かり給わざれ。二三疾く来りて我を助け給え、主よ、わが救済よ。

第三十八篇（第三十九篇）

人生の苦惱を主に訴う

一　歌隊長イディトウンに歌わしめたる、ダヴィドの詩。

二　我は云いけり、我舌もて罪を犯さざらん為に、わが道を慎しまん。不敬なる者のわが前にある間、わが口に轡をかけん、と。三　善き事無きに由りて我は默して啞となりぬ。されどわが苦しみまたも起れり。四　わが心わが内に熱し、思いめぐらす間に火と燃えたれば、我舌もて云えり、五　主よ、わが終と、わが日数の幾許なりやを、我に知らしめ給え、これ、我が己のいかに脆きかを知るを得んためなり。六　視よ、汝はわが日数を束の間ならしめ給えり、さればわが一生は御前にはなきに等し。いずれの人も存うるはただ一呼吸の間に過ぎず。七　人はただ影の如く移ろい行き、ただ徒労に騒ぎ、積み蓄えてしかもそれを受けん者の誰なるかを知らず。八　されば今、主よ、我何をか待つ。わが信頼は汝にあり。九　我をわが諸々の不義より解放ち給え、我を愚なる者の誹るに任せ給わざれ。一〇　我は默して、わが口を開かず、蓋しそをなし給えるは汝なればなり。一一　汝の鞭打

を我より免じ給え、御手の激しきによりて我力尽きたり。一三汝は愆を懲らして人を矯正し、その貴ぶ物を、蠹の喰い破る如くに、消失せしめ給う。いずれの人もただ一呼吸に過ぎず。一三主よ、願わくはわが祈祷を聴き、わが叫声に御耳を傾け給え。わが涙を默視し給うなかれ。実に我は御許に客たり、わがすべての父祖の如く旅人なり。一四わが逝きて在らずなるその前に、汝御眼を我より背向け、我をして気息を吐かしめ給え。

第三十九篇（第四十篇）

救われし感謝

一 歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドの詩。
二 我主に待望み、また待望みしに、彼我に御躬を傾けて、わが叫喚を聴き容れ給えり。
三 しかして我を滅亡の坑より、汚なき泥の中より引出し、わが足を巌の上に立たしめ、わが歩みを確乎ならしめ給えり。四 また彼は新しき歌を、我等の天主に献ぐる歌を、わが口に授け給えり。多くの人之を見て畏れ、且主に待望むに至らん。五 幸福なるかな、主に希望を置き、偶像を崇むる者と偽物に迷い行く者とに倣わざる人。六 主よ、わが天

主よ、汝は奇しき御業を数多なし給えり。我等の為に慮ること汝の如き者は絶てあらず。我之を述べ語らんと欲すれども、多くして数うることを得ず。七汝は犠牲と献物とを欲み給わずして、わが耳を開き給えり。燔祭と罪祭とは汝之を求め給わざりき。八その時我云えらく、「視給え、我来る、わがこと録されて書巻にあり。九わが天主よ、我は御旨を行うことを悦ぶ。汝の法はわが胸の中にあり。」と。一〇我は大いなる集会の中にて義を告げたり、視よ、我唇をふさがざりき、主よ、汝知り給う。一一我は汝の義をわが心の中に秘めおかず、汝の信実汝の御祐助を述べたり。汝の御恩恵と汝の信実とを大いなる集会に隠さざりき。一二主よ、汝御憐憫を我に断ち給うなかれ、願わくは汝の御恩恵と汝の信実と、常に我を護らんことを。一三蓋は数知れぬ禍我を囲み、わが愆ち我を捉えしによりて、我見ることを得ざればなり。そはわが頭髪よりも多く、わが気力我より失せたり。一四主よ、我を救い給うこと、御意に適えかし。主よ、我を助けに疾く来り給え。一五願わくはわが生命を奪わんとて之を狙う者、皆恥しめられて赤面せんことを、わが禍を悦ぶ者、後に退りて恥辱を蒙らんことを、一六また我に向かいて、「善哉、

一七 善哉！」と云う者、恥じ惑いて茫然たらんことを。一七汝を求むる者は皆汝によりて喜び
一八 楽しみ、汝の御祐助を望む者は「主は祝せられさせ給え。」と恒に云えかし。一八さて我
は憐にして貧し、されど主我を御心にかけ給う。汝はわが祐助者、わが救助者に在す。
わが天主よ、ためらい給うなかれ。

第四十篇

至福

一 歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドの詩。
二 幸福なるかな、乏しき者貧しき者のことを思う人。主は禍の日に彼を救い給わん。
三 主は彼を守り、その生命を保ち、地上にて之を幸福ならしめ給わん、その敵の意に彼
を委ね給わじ。四 主は苦悩の床にある彼に援助を与え、その病める時に彼の衰弱を全く
除き給わん。五 我は云う、「主よ、我を憐み給え、我汝に罪を犯したれば、我を癒し給
え。」六 と。わが敵はわがことを悪しざまに云う、「彼死してその名滅びんは何時ぞや。」
七 と。また来り訪う者空しき事を語り、その心に不義を集め、外に出でては之を云い

出ず。八我を憎む者皆我に仇せんと呟き、我に悪しき事を謀る。九「悪しき疫彼を侵せり、彼臥して再起つことなからん。」と。一〇わが頼みとせる友にして、わがパンを食したる者さえも、我に背きて踵を挙げたり。一一されど主よ、汝は我を憐み、我を扶け起し給え、これ我の彼等に報ゆるを得んためなり。一二わが敵が我ゆえに喜び躍らざるべきこと、我是によりて、汝の我を嘉し給うを知らん。一三また汝は我を健かに保ち、永久に我を汝の御眼前に置き給わん。一四主イスラエルの天主は、世々より世々に至るまで頌えられさせ給え、然あれかし、然あれかし。

第四十一篇

（第四十二篇）

天主を慕いて

一歌隊長に歌わしめたる、コレの子等の教訓。

二鹿が水の流を慕うが如く、天主よ、わが霊魂も汝を慕うなり。三わが霊魂は天主を、活ける天主を、望みて渇く。我何時行きて天主の御面を仰ぎ見んや。四人々日毎我に向かいて、「汝の天主は何処にありや」と云う間は、晝も夜もわが涙われに糧となれり。

五　されば我、曽て祭の集会に、歓喜讃美の声の中を、群衆わけて歩み、彼等の前を天主の家に到りしが、今その状を思い出でてわが衷なる心魂を披瀝するなり。六　わが魂よ、汝何とて打沈み、わが衷にて騒ぎ立つや。天主に待望め、其は我またも彼を頌え奉るべければなり、わが面の救拯に在す。七　わが天主を。わが衷にてわが魂はかくも打沈めり。されば我ヨルダンの地と、ミサルの山なるヘルモンとより、汝を偲び奉る。八　汝の瀧の轟音に淵は淵を呼ぶ、汝の大波小波はわが上を越えたり。九　豈は主御恩恵を豊かに賜えかし、夜は我彼に向かいて歌い、わが生命の天主を讃め奉らん。一〇　我天主に云う、わが巌よ、何とて汝我を忘れ給うや、何とて我は敵に虐げられて悲しみ歩くや。一一　わが仇の我を蔑む間、その日毎我に「汝の天主は何処にありや。」と云う間、わが骨も砕かるる思あり。一二　わが魂よ、汝何とて打沈み、わが衷にて騒ぎ立つや。天主に待望め、其は我またも彼を頌え奉るべければなり、わが顔の救拯に在すわが天主を。

第四十二篇（第四十三篇）

聖なる幕屋を偲ぶ

一　天主よ、我を正しく裁き、聖ならぬ国民に対してわが訴訟を行い給え。欺く不義の人
二　より我を救い給え。其は天主よ、汝はわが力なればなり。何とて汝我を棄て給いしや、
三　何とて我は敵に虐げられて、悲しみ歩くや。汝の光と汝の信実とを示し給え、そは我
四　を導き、我を汝の聖なる山、汝の幕屋に到らしめよかし。さらば我入りて天主の祭壇
五　に、わが楽しみ喜びの天主の御許に行き、小琴執りて汝を讃め奉らん、天主よ、わが天
主よ。わが魂よ、汝何とて打沈み、わが衷にて騒ぎ立つや。天主に待望め、其は我ま
たも彼を頌え奉るべければなり、わが顔の救拯に在すわが天主を。

第四十三篇（第四十四篇）

天主の昔の御慈愛を偲びて御憐憫を乞う

一　歌隊長に歌わしめたる、コレの子等の教訓詩。
二　天主よ、我等この耳に聞けり、我等の父祖我等に語れり、彼等の日に、昔日に、汝の

なし給いし御業を。
三 汝は御手もて、異邦人を追い出して彼等を植え、諸国の民を滅ぼして、彼等を拡がらしめ給いぬ。
四 実に彼等はその剣によりて地を占めしにあらず、その腕彼等を救いしにあらず、ただ汝の御右手、汝の御腕、汝の御顔の清輝によれり、そは汝彼等を愛し給いたればなり。
五 わが天主よ、ヤコブに勝利を賜いし者よ、汝こそわが王なれ。
六 我等は汝によりて我等の仇を撃ち退け、汝の御名によりて、我等に逆い立ちし者を蹂躙れり。
七 実にわが頼りしはわが弓にあらず、我を救いしはわが剣にあらず、
八 ただ汝こそ我等を我等の仇より救い、我等を憎む者を滅ぼし給いしなれ。
九 我等はいつの時にも天主を誇とし、絶えせず汝の御名を頌え奉れり。
一〇 されど汝は今、我等を斥け、辱しめ給えり、しかして天主よ、汝我等の軍と共に出で征き給わず。
一一 汝我等を敵に屈せしめ給いければ、我等を憎む者己がために我等より掠め取れり。
一二 汝は我等を屠られんとする羊の如く付し、我等を異邦人の間に散らし、
一三 汝の民を無代にも等しく売り、その売買によりて多くの利を得給わざりき。
一四 汝は我等を隣人の讒りの的、周囲にある者等の笑柄、弄り物となし、
一五 また異邦人の間には話の種となし給えり。民等我等

一六　のことには頭を振る。一六わが恥辱は始終わが前にあり、羞赧はわが面を蔽う。一七そは
一八　誹り嶌る者の声によりて、仇と敵とによりてなり。一八是等の事皆我等の上に起り来れり、
一九　我等汝を忘れず、汝の契約を破らず、一九また我等の心退かず、我等の歩み汝の径より
二〇　逸脱れず、二〇汝が患難の処にて我等を蹂躙り、暗闇もて我等を蔽い給いし時にさえ、然
二一　りしに。二一我等もし我等の天主の御名を忘れ、異る神に我等の手を差し伸べしことあり
二二　二三　とせば、二三天主は之を糺し給わざらんや、実に彼は心の秘密さえ知り給うものを。二三さ
二四　れど我等はいつの時にも汝の為に死に遇い、屠られんとする羊の如くせらるるなり。
二四　目ざめ給え。主よ、汝何とし眠り給うや。醒め給え。我等を恒久に棄て給わざれ。
二五　二六　二五汝何とて御面を隠し給うや、何とて我等の蒙る苦悩と虐遇とを忘れ給うや。二六実に我
二七　等の魂は塵に伏し、我等の腹は地につきたり。二七起ちて我等を助け給え、汝の御憐憫の
為に我等を救い給え。

第四十四篇（第四十五篇）

王の婚姻の歌

一 「百合の花」の調に合せて、歌隊長に歌わしめたる、コレの子等の教訓の歌、愛の歌。

二 わが心美き言の葉を吐き出す。わが歌を唱うは王の為にこそ。わが舌は速かに字を書く人の筆なれや。

三 汝の美麗しきは人の子等に優り、汝の唇には愛らしさ溢れたり。されば天主、永久に汝を祝し給えり。

四 最力ある者よ、汝の劍を腰に佩びよ、これ汝の裝い、汝の飾なり。

五 信実の為、正義の為に、真幸く進め、汝の右手、汝の華々しき業を教えん。

六 汝の矢は鋭くして、諸民汝に服し、王の敵意気挫けん。

七 天主よ、汝の玉座は世々に亘り、汝の御国の笏は公平の笏なり。

八 汝は正義を愛し、不義を憎み給う。されば天主汝の天主は、汝の仲間に優りて汝に、喜悦の油を注ぎ給いしなれ。

九 汝の衣服は沒藥、蘆薈、肉桂の薫を放ち、象牙の諸殿よりは、琴の音汝を楽しましむ。

一〇 王たちの娘等は来りて汝を迎え、后はオフィルの黄金を飾りて汝の右に立つ。

一一 聽け、娘、視よ、汝の耳を傾けよ、汝の民をも、汝の父の家をも、忘れよかし。

一二 王は汝の美しき

一三 を慕わん、彼は汝の主君なれば、之に従え。一三チロの民は礼物を携え来り、民の重立て
一四 る者も汝の恩恵を請い求む。一四王の娘は絢爛の限を尽して入り来る。その衣服は黄金も
一五 て織りなしたり。一五彼女は五色の衣服着て王の許に導かる、その伴なる処女等も、その
一六 後に隨いて、汝の許に導かる。一六彼等は喜び雀躍しつつ連れ行かれて、王の宮に入るな
一七一八 り。一七汝の父祖に代りて汝に子等あらん、汝之等を立てて全地に君侯となさん。一八我は
千代万代に汝の御名を記憶せん。されば諸々の民は世々に亘りて汝を頌えん。

第四十五篇（第四十六篇）

我等の避難所なる天主

一 「処女等」の調に従いて、歌隊長に歌わしめたる、コレの子等の歌。
二 一天主は我等の避難所にして、また力なり。患難の時の扶助者なることを、いと沢山に
三 証し給えり。三されば地は覆り、山は海の中央に崩れ落つとも、我等恐れず。
四 四その水騒ぎ、湧きかえり、その激勢に山ゆらぐとも、万軍の主は我等と共に在す。ヤ
五 コブの天主は我等の防塞なり。五河の流は天主の都、最高き者の聖き幕屋を愉しましむ。

六 天主その中に在せば、揺ぐことあらじ。天主曙に之を助け給わん。七 民等は騒ぎ、
国々は揺ぎたり。彼その御声を轟かし給えば、地すなわち融け失せぬ。八 万軍の主は我
等と共に在す。ヤコブの天主は我等の防塞なり。九 来りて視よ、主の御業を、地にてな
し給える驚くべきことを。一〇 彼は地の果までも戦闘を制止め、弓を折り、槍を砕き、楯
を火にて焚き給う。一一 静まりて、我が諸国の民に崇められ、地にて崇められる、天主た
ることを知れ。一二 万軍の主は我等と共に在す。ヤコブの天主は我等の防塞なり。

第四十六篇

（第四十七篇）

凱旋の歌

一 歌隊長に歌わしめたる、コレの子等の詩。二 諸々の民よ、手を拍ちて天主に歓喜の声を挙げよ。三 主は最高く、畏るべくして、全地の大王に在せばなり。四 彼は諸民を我等に服はしめ、諸国を我等の足下に置き、五 その愛で給うヤコブの誇りなる遺産を、我等の為に選み給う。六 天主歓喜の叫びと共に、主喇叭の声と共に、昇り給えり。七 讃歌唱え、天主に、讃歌唱え、讃歌唱え、我等の王

八九一〇

に、讃歌唱え、八天主は全地の王にて在せば、頌歌唱え。九天主は諸国の民を治め給う、天主はその聖なる御座の上に坐し給う。一〇諸民の諸侯は、アブラハムの天主の民の許に集い来れり。蓋は、地の貴き族は天主の有にして、彼はいと高く在せばなり。

第四十七篇　（第四十八篇）

シオンの護りなる主

一歌、コレの子等の詩。

二主は偉大にして、我等の天主の都の内に太く讃め称うべきかな。その聖なる山、三麗しき丘は、全地の喜悦なり。北の端なるシオンの山は大王の都なり。四天主はその城市の内に己を安全なる壘として示し給えり。五実に見よや、王等相集りて一斉に寄せ来りしが、六見るや忽ち愕き惑いて逃げ去りぬ。七彼処にて戦慄彼等を襲えり、苦痛はさながら子を産む婦の如く、八東風がタルシスの船を砕く時の如し。九我等は聞きし如く万軍の主の都にて、我等の天主の都にて、そを見たり。天主之を永久に固め給う。一〇天主よ、我等は汝の聖殿の内にて、汝の御憐憫を偲ぶ。二天主よ、汝の御名の如く、汝の讃

美もまた、地の果に及ぶ。汝の御右手は正義に満てり。一二シオンの山は楽しめかし、ユダの市々は汝の審判ゆえに喜び躍れかし。一三シオンを通り、之を巡りて、その塔を数えよ。一四その砦を視察し、その城を馳せめぐれ、さらば汝等後代に語り伝うるを得ん、天主はかくも偉大なり。我等の天主は永久に、世々にわたりて在し、御目ら我等を導き給わん。

第四十八篇（第四十九篇）

富の空しさ

一歌隊長に歌わしめたる、コレの子等の詩。

二諸国の民よ、之を聴け、世界に在む者皆耳に留めよ、三生れの賤しきも貴きも等しく、富めるも貧しきも同じく。四わが口は智慧を、わが心の瞑想は了悟を語らん。五我は箴言にわが耳を傾け、わが謎を琴の音に寄せて述べん。六我を待伏する者の奸計我を囲む禍の日にも、我いかで恐るることあらんや、七たとい彼等は己が富を恃み、己が財宝の多きを誇るとも。八蓋し誰も己を救う能わじ、また天主に己が贖の価を出す能わじ。

一〇九　九　その霊魂の救いはあまりにも多額を要し、一〇彼が終なく活きて滅びを見ざる為には、
一一　いつまでも足ることなからん。一二実に彼は、智慧ある者も死し、無知なる者も愚なる者
一二　も同じく死して、その富を他人に遺すを見るべし。一三彼等は地に己が名を命けたれども
一三　墓こそ永久に彼等の家、代々より代々に至るまで彼等の住所なれ。一三抑々富める人と雖
一四　も恒に存うる能はず、亡び去る畜の如し。一四これぞ愚にも安んじおる者の道、これぞ己
一五　が運命を楽しめる者の終なる。一五彼等は羊の如く冥府の中に置かる。死その牧者たり、
一六　義人彼等を治む。彼等の姿は速かに消え、冥府その家となるべし。一六されど天主はわが
一七　魂を、冥府より救い給わん、そは彼我を受容れ給うべければなり。一七人富み、その家の
一八　財増したりとも、汝恐るるなかれ。一八詰し彼その死するに当りては何物をも携え行く能
一九　わず、その財彼と共に下り行かざるべし。一九彼その生ける時には、「汝己が為に善くな
二〇　しければ、人々汝を称えん。」と、自ら祝ぎたりとて、二〇永久に光を見ざるべきその父
二一　祖の集いに加わらん。二一富の中に暮しながら悟らざる人は、亡び去る畜の如し。

第四十九篇（第五十篇）

真の信心

一 アサフの詩。

二 天主なる主詔勅して、日の出るよりその入るまでの地を招き給えり。

三 美麗に満てるシオンより天主輝き出で給えり、

四 我等の天主来りて默し給わず。焼き尽す火、御前に立ちて進み、彼の周囲には疾風狂う。

五 彼、御民を裁かんとて上より天地を召し給う、

六 犠牲もてわが契約を承認めたる、わが聖なる徒をわが許に集めよ。」と。

七 諸天は乃ち彼の義を告ぐ、其は天主御自ら審判者に在せばなり。

八 「わが民よ、聽け、イスラエルよ、我語らん、我汝に対して証せん、我こそは天主、汝の天主なれ。

九 我汝の犠牲に就きては汝を責めず、汝の燔祭は常にわが前にあればなり。

一〇 我は汝の家より牡牛を、汝の畜は群より牡山羊を承けじ。

一一 蓋は森のあらゆる獣も、わが山々の上なる幾千の畜も、わが有なればなり。

一二 我は知る、空飛ぶすべてのものを。野に動くものまた我に知れたり。

一三 我たとい飢えたりとて、汝に云わじ、蓋は世界と之に満てるものとは、わが有なれば

一四　なり。一三抑々我は牡牛の肉を食すること、或は牡山羊の血を飲むことあらんや。一四天主
一五　に讃美の犠牲を献げ、至高者に汝の誓願を還せ。一五しかして苦悩の日に我を呼べ、我汝
一六　を救い出し、汝我を崇むるに至らん。」一六されど罪ある者には天主曰わく、「汝は如何
一七　なればわが掟を談り、わが契約を口にするや。一七汝は教訓を憎み、わが言を己が背後に
一八　投棄てし者なるに。一八汝は盗人を見れば、之と共に走り、また姦淫する者等に与したり
一九〇　き。一九汝は悪しき事に口を開きたり、汝の舌は詭計を組立てたり。二〇汝坐しては己が兄
二一　弟に逆らい語り、汝の母の子に侮辱を加えたり。二一汝是等の事をなしたるに、我默すべ
二二　けんや。汝は我を汝の如き者なりと思惟せしや。我汝を責めて之を汝の眼の前にならべ
二三　立てん。二三天主を憶わざる者よ、之を了れ。然らずば我捉えんに、汝を救う者なからん。
二三　讃美の犠牲を献ぐる者は我を崇む、直く歩む者には我天主の救済を示さん。

一二　三　四五　六　七八　九　一〇　一一　一二三

第五十篇（第五十一篇）

痛悔の歌

一歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドの詩。二彼がベトサベーと罪を犯したるによりて彼の許に預言者ナタンの来りし後のことなり。

三天主よ、御仁慈によりて我を憐み、御憐憫の豊かなるによりてわが不義を消し給え。四我より全くわが愆を洗い去り、我よりわが罪を清め給え。五実に我はわが不義を認む、わが罪は常にわが前にあり。六我はただ汝御独りに対して罪を犯し、御前に悪しき事をなせり。これ、汝が宣告の時には義しきを、審判の時には直きを認められ給わんがためなり。七視よ、我愆の中に生れ、わが母罪にありて我を宿せり。八視よ、汝は心の純なるを悦び、わが胸の中にて我に智慧を教え給う。九ヒソプもて我に潅水ぎ給え、さらば我潔められん。我を洗い給え、さらば我雪よりも白くならん。一〇我に喜びと楽しみとを聞かせ、汝の砕き給える骨を躍らしめ給え。一一わが罪より御面を背け、わが愆を悉く消し給え。一二天主よ、わが為に潔き心を創造り、わが衷に堅き心を新に興し給え。一三我を

一四　御面前より斥け給うなかれ。我より汝の聖なる霊を取去り給うなかれ。一五　汝の救済の喜悦を我に返し、気高き精神もて我を固うし給え。一六　我は不義なる者に汝の道を教えん。さらば罪人等汝の御許に立帰らん。一六　天主よ、わが救主なる天主よ、我を血の科より救い給え、汝の正義によりてわが舌を喜び歌わしめ給え。一七　主よ、汝わが唇を開き給わん、さらばわが口汝の讃美を宣べ伝えん。一八　蓋し汝は犠牲を悦び給わず、また燔祭も、我之を献げたれど、汝受納め給わず。一九　天主よ、わが犠牲は砕けたる霊なり、天主よ、汝は砕け謙れる心を蔑み給わじ。二〇　主よ、御好意によりて、シオンに御慈しみを示し給え。これ汝がイエルサレムの石垣を再び築き給わんためなり。二一　その時汝は律法に定められたる犠牲、供物、及び燔祭を嘉納し給わん、その時人々汝の祭壇に犢を献げん。

第五十一篇（第五十二篇）

一二　悪人のほろび

一　歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドの教訓詩。二　エドム人ドエグがサウルの許に来り、之に告げて、ダヴィドはアキメレクの家に入れり、と云いし後の作。

三四 三悪名高き者よ、汝何とて悪しき心根を誇るや。汝はいつの時にも、害をなすことを思いめぐらす。五 欺瞞を行う者よ、汝の舌は鋭き剃刀の如し。五 汝は善よりも寧ろ悪を好み、正しきよりも寧ろ虚偽を云うこと好む。六 欺く舌よ、汝は凡て害をなす言を好む。七 この故に天主は汝を滅ぼし、永久に汝を除き去り、天幕より汝を引出し、活ける者の地より汝を絶やし給わん。八 義人は見て恐れ、彼のことを嘲笑わん、九 視よ、天主を己が砦とせずして、その財の多きを恃み、その罪悪によりて勢力を張りし者を。」と。

一〇 一〇 されど我は天主の家にて緑む橄欖の如く、永久に天主の御憐憫を恃み奉るなり。一一 汝之を行い給いければ、我世々に汝を頌え奉らん、汝の聖者等の眼前にて、汝の御名を宣伝えん、其は善きことなればなり。

第五十二篇 （第五十三篇）

天主をなみする愚かさ

一 「マエレト」の調に合せて、歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドの教訓詩。

二 愚なる者はその心の内に云う、「天主なし。」と。彼等は腐敗せり、憎むべき事を行

三　四　五　六　七

えり、善をなす者なし。三天主天より人の子等を望見て、曉る者天主を求むる者の有無を糺し給うに、四皆おしなべて迷いたり、拗けたり、善をなす者なし、一人だになし。五不義をなし、パンを食う如く、わが民を食い尽し、主に呼わらざる者、正気に帰らんとせざるか。六彼等は恐るべきことのなき場合にも、恐怖に震慄けり、そは天主汝を囲み攻むる者の骨を散らし給いしによりてなり。彼等は天主之を棄て給いたれば、狼狽えたり。七願わくはイスラエルの救済、シオンより出で来らんことを。天主御民の運命を飜し給わん時、ヤコブは喜び躍るべし、イスラエルは楽しむべし。

第五十三篇　（第五十四篇）

主の御祐助を願う

一琴に合せて、歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドの教訓詩。
二ジフの人々がサウルの許に来りて、「視よ、ダヴィドは我等の許に隠れるなり。」と云いたりし時。
三天主よ、汝の御名によりて我を救い、汝の御徳能もてわが訴訟を進め給え。四天主よ、わが祈祷を聴容れ、わが口の言を御耳に留め給え。五蓋は高ぶる者共我

一　二　三　四　五

に起ち逆い、暴ぶる者共わが生命を索むればなり。彼等は己が眼の前に天主を置かざりき。六 視よ、天主は我を助け給う、主はわが生命を支え給う。七 わが仇にその悪を転らし返し、汝の信実によりて彼等を滅ぼし給え。八 我は快く汝に供物を献げ奉らん、主よ我は汝の御名を頌え奉らん、其は美わしければなり。九 実に彼こそはあらゆる患難より我を救い出し給えるなれ、かくてわが眼わが敵の滅ぼさるるを見たり。

第五十四篇（第五十五篇）

悪人に悩まさるる義人の祈

一 琴を奏でて、歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドの教訓詩。

二 天主よ、わが祈祷を御耳に留め給え、わが懇願を避け給わざれ、三 我に御意を留め、我に応え給え。我はわが苦痛に追いまわされ、また悩まさる、四 仇の声ゆえに、罪人の叫喚ゆえに。其は彼等我に禍を来し、怒りて我を攻むればなり。五 わが心、わが衷にて乱れ、死の懸念我を襲う。六 恐怖と戦慄とわが上に来り、驚惶我を覆う。七 されば我云う、ああ、もし鳩の如く我に翼ありせば、飛び行きて休息わんものを。八 視よ、我遠く

九　去りて、荒野に留まらんものを。九 わが為速かに避難所を求めて、旋風と疾風とを遁れ
一〇　んものを。一〇 打ち散らし給え、主よ、彼等の舌を分ち給え、実に我は都の内に、暴行と
一一　不和とを見るなり。一一 この彼等は昼も夜も、その石垣の上を巡る。その只中には不義と虐待
一二　とあり。一二 陰謀その只中にありて、不法と欺瞞とその衢を離れず。一三 もし仇我を責めし
一三　ならば、いかなることありとも、我之を忍びしならん、もし我を憎む者我に敵い起ちし
一四　ならば、我彼より身を隠したるならん。一四 されど、そは汝なりしなり、わが仲間、友に
一五　して親しき者、一五 わが共に楽しき交わりしたる者なりしなり、我等は天主の家にて祝祭
一六　の群集の中を歩みき。一六 願わくは、死彼等に襲いかかりて、彼等活きながら冥府に下ら
一七　んことを。其は彼等の住所の内、彼等の只中には極悪あればなり。一七 されど我は天主に
一八　呼わり奉らん、さらば主我を救い給わん、一八 夕に、朝に、また正午に、我は嘆き且呻か
一九　ん、さらば彼わが声を聴き給わん。一九 彼は我を攻め悩ます者等より、わが魂を贖い戻し、
二〇　平安に入らしめ給わん。蓋は我に逆う者多ければなり。二〇 無始より統治し給う天主は、
二一　聴きて彼等を挫ぎ給わん。実に彼等は変らず、天主を畏れず、二一 各人その親しき者に手

二二 を伸べて、己が契約を破るなり。二三その面は牛酪よりも滑らかなれど、その心は鬪爭を
二三 好む。その言は油よりも柔軟なれど、抜き放ちたる劍なり。二三汝の心がかりを主に投げ
二四 かけよ、さらば彼汝を支え給わん、義しき者のよろめくを、恒久に容し給うまじ。二四か
くて天主よ、汝は彼等を滅亡の坑に下し給わん。血を流す人と欺く者とは、己が日数の
半にも至らざらん。されど主よ、我は汝に依頼み奉る。

第五十五篇（第五十六篇）

信頼溢るる祈願

一 「遠く離れおる者等の声立てぬ鳩」の調に合せて、歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドの
ミクタム（ヴルガタ訳詩一六の註一参照）。フィリスト人等が彼をガドに捕えおきし時の作。
二 天主よ、我を憐み給え、実に人我を蹂躙り、恒に鬪いて我を虐ぐ。三わが仇常に我を
三 蹂躙る、其は我と鬪う者多ければなり。至高き者よ、四恐怖の我を襲う日には、我汝に
四 依頼み奉らん。五御約束をわが頌え奉る天主に、その天主に我は依頼み奉る、我は恐れ
五 じ。肉我に何をかなさん。六彼等は終日我を誹り、その思念はすべて我に逆い禍をな
六

七八す。七彼等は相集まりて待伏し、わが足跡を窺いてわが生命を狙う。八彼等に不義の報いを与え給え、天主よ、怒りて彼等を打倒し給え。九汝はわが流離の道を知り給えり、わが涙は蓄えられて汝の革袋の中にあり、そは汝の書に録されたるに非ずや。一〇いつ我汝を呼び奉るとも、その時わが仇は後に退らん。天主の我に味方し給うことは、我よく之を知る。一一一二御約束をわが頌え奉る天主に、一三その天主に我は依頼み奉る、我は恐れじ、人我に何をかなさん。一三天主よ、我は汝になしたる誓に繋がる、我汝に讃美の犠牲を全く果さん。一四それ汝はわが生命を死より、わが足を滑り倒るるより、遁し給えり、これ我が生ける者の光の中にて、天主の御前に歩むを得んためなり。

第五十六篇

（第五十七篇）

み翼のかげに

一「滅ぼすなかれ。」の調に合せて、歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドのミクタム。彼がサウルを避けて洞に逃げ入りし時の作。

二我を憐み給え、天主よ、我を憐み給え、其はわが魂汝の御許に逃げ隠れ、禍の過ぎ去

三　るまで、我御翼の蔭に逃げ隠るればなり。
四　に、叫び奉らん。
五　め給わんことを。天主その御恩惠と信実とを遣し給えかし。
六　等の只中に、我は臥すなり。その牙は槍なり矢なり、その舌は利き剣なり。
七　諸天よりも高く現れ給え。全地の上に御栄光あれ。
八　わが霊魂を圧し拉ぎ、わが前に坑を掘りたり。彼等之に陥れかし。
九　主よ、わが心は固し。我歌い奉らん、奏で奉らん。
一〇　琴よ、我曙を呼び起さん。一〇主よ、我は民等の中にて汝を讃めん、異邦人等の中にて
一一　汝に奏で謳わん。一一其は汝の御憐憫は大いにして天にまで及び、汝の信実は雲にまで及
一二　べばなり。一二天主よ、諸天よりも高く現れ給え。全地の上に御栄光あれ。

第五十七篇　（第五十八篇）

悪を罪する天主あり

一　「滅ぼすなかれ。」の調に合せて、歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドのミクタム。

二　權勢ある者よ、汝等寔に義を云うや、人の子よ、汝等直く裁くや。
三　否、汝等は心の中に不義を行い、汝等の手は地に不正を衡り出すなり。
四　不敬なる者は母の懷にある時より道を逸脱れ、虚偽を云う者は胎を出でし時より迷えり。
五　彼等の内なる毒は、蛇の毒、己が耳を塞ぐ聾いの蝮の毒の如し、
六　その蝮のかくするは、蠱術を行う者の声、巧みに呪文を誦うる呪い師の声を聞かざらんとてなり。
七　天主よ、その口にある歯を磨滅し給え。主よ、獅子の大いなる牙を打砕き給え。
八　願わくは彼等が流れ去る水の如くに消え行き、その矢は彼等之を放つとも、鈍りたる如くならんことを。
九　彼等また融け去る蝸牛の如く、婦の流産したる、日を見ぬ子の如くに失せよかし。
一〇　願わくは、汝等の釜が茨を感ぜざる前、その緑なる間に、旋風の熱きが之を吹き去らんことを。
一一　義しき者は復讐を見て悦び、その足を不義なる者の血の中にて洗わん。
一二　かくて人々は云うべし、「実に義しき者には結実あり、実に地にて裁き給う天主は在す。」と。

第五十八篇　（第五十九篇）

残虐なる敵を訴う

一　二　三　四　五　六　七　八　九　一〇

「滅ぼすなかれ。」の調に合せて、歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドのミクタム。サウルが彼を殺さんと人を遣してその家を見守らしめし時の作。

二　わが天主よ、わが敵より我を助け出し給え。我に起ち抗う者より我を護り給え。三　不義を行う者より我を助け出し、血を流す人々より我を救い給え。四　実にも見よ、彼等は待伏してわが生命を狙い、猛き者等我を害せんと共に謀る。我には犯罪も罪悪もなし、主よ。五　我に愆なきに、彼等馳せ来りて攻めかかる。覚め給え、我を助けに疾く来りて見給え。六　蓋は万軍の主よ、汝イスラエルの天主にて在せばなり。目覚め給え、諸々の国民を懲らし給え、すべて裏切者を憐み給うなかれ。七　彼等は夕に帰り来り、犬の如く咆えて市を馳せめぐる。八　視よ、彼等はその口もて誇る。その唇には侮辱あり。「抑々誰か聴く。」と。九　されど主よ、汝は彼等を嘲笑い給う、すべての異邦人を弄り給う。一〇　わが力よ、我汝に意を傾け奉る、そは天主よ、汝わが砦にて在せばなり、二　わが天

一二　主、わが憐憫よ。願わくは天主我を助けに来り給いて、わが敵に対して悦ぶを得しめ給わんことを。一三天主よ、彼等を斬り仆し給え、これ、彼等がわが民の躓きとならざらんためなり。汝の御力によりて彼等を怖ぢ惑わしめ、之を打倒し給え、我等の楯なる主よ。

一三　彼等の唇の言はその口の罪なり、されば彼等の傲慢と、その云うところの呪詛と虚偽とに彼等を係らしめ給え。一四御忿怒もて彼等を亡ぼし給え、最早居らざるように、亡ぼし給え、これ、天主ヤコブの中に在して地の果までも統治し給うことの知られんためなり。

一五　彼等は夕に帰り来り、犬の如く咆えて市を馳せめぐる。一六彼等は食を求めてめぐりあるき、飽かざる時は咆声を出すなり。一七されど我は汝の御力を謳わん、朝に汝の御憐憫を思いて喜び躍らん。そは汝わが為に砦となり、わが苦悩の日の避難所となり給えばなり。一八わが力よ、汝に向かいて奏で歌わん、そは天主よ、汝わが砦にて在せばなり、わが天主、わが憐憫よ。

第五十九篇（第六十篇）

出征前のダヴィドの祈願

一 「証詞の百合」の調に合せて、歌隊長に歌わしめたる、教訓の為のダヴィドのミクタム。

二 彼が出征きてアラム・ナハライムを討ち、アラム・ソバを討ちし時、及びヨアブが帰り来りて塩の谷にエドム人一万二千名を破りし時の作。

三 天主よ、汝は我等を斥け、我等の陣立を打破り給えり、汝は怒り給いしなり、また我等を立て直し給え。

四 汝は地を震撼かし、之を裂けしめ給えり、そは揺らぐによりて、その裂目をいやし給え。

五 汝は酷きことを御民に負わせ、酔わしむる葡萄酒を我等に飲ませ給えり。

六 汝、弓より遁れしめんとて、汝を畏るる者に一つの旗を立てしめ給えり。

七 汝の愛し給う者が救わるるを得ん為に、汝の御右手もて助け、我等に応え給え。

八 天主その聖所にて曰えり、「我喜び躍らん、我シケムを分ち、スッコトの谷を測量らん。

九 ガラードの地はわが有、マナッセの地はわが有なり、エフライムはわが頭の兜、ユダはわが笏なり。

一〇 モアブはわが浴みの盥なり。我エドムにはわが沓を置く、フィリスト

一一　の国には凱歌を挙げん。」と。　二　堅備ある市の中に我を導くべきは誰ぞ、エドムにまで
一二　も我を導くべきは誰ぞ。　三　天主よ、我等を斥け給いし、汝に非ずや。天主よ、汝今我等
一三　の軍と共に、出征かんとはし給わざるか。　一三　我等に御祐助を賜いて敵に抵らしめ給え、
一四　人の援助は空しければなり。　一四　天主によりて我等雄々しく振舞わん、さらば彼我等の敵
を蹂躙り給わん。

第六十篇（第六十一篇）

聖所を慕うダヴィドの祈り

一　琴を奏でて、歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドの作。
二　天主よ、わが叫喚を聴き給え、わが祈祷に御意を向け給え。　三　わが心の挫けたる時、
四　我地の果より汝に呼わり奉る。汝は我を岩の上に挙げ、我に休息を与え給わん、　四　是、
五　汝はわが砦、敵に対する強き塔にて在せばなり。　五　ああ、我が恒に汝の幕屋の中に住み
六　て、御翼の蔭に避難るるを得んすべもがな。　六　蓋は天主よ、汝わが誓願を聴きて、御名
七　を畏るる者の遺産を我に賜いたればなり。　七　王の日数に日数を加えて、その年齢を幾代

八　にも等しからしめ給え。彼は天主の御前にて永久に治めよかし、御恩恵と信実とを遣
九　して、之を護り給え。さらば我恒に汝の御名を讴いて、日毎わが誓を果さん。

第六十一篇（第六十二篇）

天主のみへの信頼

一　イディトウンに倣いて、歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドの詩。
二　わが魂の憩うはただ天主によりてのみ。わが救済は彼よりぞ来る。三　わが巌、わが救
三　済、わが砦はただ彼のみ。我いかなることありとも動揺がじ。四　汝等みな何時まで人を
四　襲いて、傾ける壁、崩れかかれる石垣の如くに、之を覆さんとするや。五　寔に彼等はわ
五　が高き地位より我を逐わんと企て、虚偽を悦び、その口には祝ぎながら、その心には呪
六　いおるなり。六　わが魂よ、ただ天主によりてのみ憩え、そは彼よりぞわが希望来ればな
七　り。七　わが巌、わが救済、わが砦はただ彼のみ。我は動揺がじ。八　わが救済わが栄誉、
八　わが力の巌は天主の許にぞある、わが避難所は天主にぞある。九　民よ、いつの時にも彼
九　に依頼め。汝等の心をその御前に披瀝せよ。天主は我等の避難所にて在す。一〇　人の子等
一〇

二　はただ一呼吸のみ、人の子等は虚言者なり。彼等を衡にかくるに高く上りて、皆合すとも気息より軽し。二　暴力に頼るなかれ、掠奪に空しく誇るなかれ、財たとい増すとも、之に心を執着せしむるなかれ。三　天主一つの事を曰えり。我この二つの事を聞けり、

三　「力は天主にあり、主よ、汝には慈愛もあり、実に汝は人各々にその所行に従いて報い給うべし。」

第六十二篇

（第六十三篇）

朝の祈り

一　一　ダヴィド、ユダの荒野に留まれる時の詩。

二　天主よ、汝こそはわが天主なれ、我切に汝を求む。わが魂は汝を渇き望み、わが肉は汝を憬れ慕う、水なく乾き燥げる地の如くに。三　されば我聖所にありて汝を眺め奉る、汝の御力、汝の御栄光を見んとして。四　汝の御恩寵は生命にも優る故に、わが唇は汝を称え奉らん。五　我わが生くる限りかく汝を讃め、汝の御名によりてわが手を挙げん。六　わが魂、髄と脂肪とによる如くに飽かされ、わが口歓喜溢るる唇もて讃め称え奉らん、

七 我わが臥床の上にて汝を憶い出で、寝ねもやらず汝のことに思い耽らん時。八 実に汝はわが祐助者になり給えり、我汝の御翼のかげにて喜び躍る。九 わが魂は汝を慕い奉れり、汝の御右手は我を支うるなり。一〇 されどわが生命を亡ぼさんとする者は、地の深き所に入らん。一一 彼等は剣の手に付され、山犬の餌食とならん。一二 されど王は天主により て楽しまん、彼によりて誓う者は、皆誇らん、其は不義を云う者の口、塞がるべければなり。

第六十三篇

（第六十四篇）

悪しき者の行末

一 歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドの詩。
二 天主よ、わが嘆く間、わが声を聴き給え。敵の恐怖よりわが生命を護り給え。三 心根悪しき者の会合より、不義を行う者の喧騒より、我を庇い給え。四 彼等はその舌を剣の如くに研ぎ、毒ある言を矢の如くに放ち、五 潜伏みおる処より無辜者を射、俄に之を射て懼るる所更になし。六 彼等は堅く悪事を志し、共に謀りて密かに係蹄をかけ、「誰か

七　我等を見ん。」と云う。七彼等は道ならぬ事を企み、その企みたる計画を隠す。各人の思
八　いと心とは深し。八されど天主は矢もて彼等を射給う、彼等は俄に撃たれて傷を負う。
九一〇　九彼は彼等の為にその舌によりて滅亡を備え給う。彼等を見る者皆頭を振る。一〇総てべ
一一　の人は恐れて、天主の御業を宣伝え、その御行為を思量す。一一義しき者は天主を悦び
てその御許に逃げ隠れ、心の直き者は皆誇るなり。

第六十四篇　（第六十五篇）

牧穫感謝の歌

一　一歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドの讃美の歌。
二　二天主よ、シオンにての讃歌は汝に相応わしく、誓は汝に果すべし、三汝は祈願を聴容れ
三　給う。肉は皆汝の御許に来る、四不義あるに由りてなり。我等の科は我等を拉ぐ、汝之
四　を赦し給う。五幸福なるかな、汝の選みて迎え取り給う者。彼は汝の大庭にぞ住まう。
五　願わくは我等が汝の家の佳き物に、汝の御殿の聖なるに、飽かされんことを。六我等の
六　救主なる天主よ、汝は正義によりて、驚くべき徴もて我等に応え給う。汝は地と遠き海

七八 との諸々の果の希望、七汝は御徳能もて山々を固め、権力を帯び給い、
九 海の轟音、その波の音、諸国の民の騒擾を鎮め給う。九されば地の限界に住む者等も、
一〇 汝の徴故に畏るるなり、汝は東と西との極端にも歓喜を満し給う。一〇汝は地を訪れて之に灌ぎ、之を
一一 大いに豊かにし給えり。天主の川は水充満てり。汝彼等の穀物を備え給いぬ、蓋し汝かくして之を備え給えるなり、一一即ち汝その溝に灌ぎ、その土塊を平坦にし、雨もて之を
一二 軟かにし、その萠出るを祝し、一二御好意もて年の冠となし給えり。汝の径は膏滴るば
一三 かりなり。一三荒野の牧場も滴るばかりなり、丘々も歓喜を帯ぶ。一四野辺は羊の群を纏い
一四 谷は穀物に覆われたり、人々歓び叫びて歌う。

第六十五篇

（第六十六篇）

天主讃美のすすめ

一 歌隊長に歌わしめたる頌歌。

二 全地よ、天主に歓び叫べ、二その御名の栄を歌いて彼に、赫く讃美を帰し奉れ。三天主
三 に云えかし、「汝の御業は如何に驚くべきぞ。汝の御力の大いなるゆえに、汝の敵も汝に

四五 媚ぶ。四 全地は汝を拝みて汝に歌い、汝の御名を謳えかし」と。五 来りて天主の御業を
六 見よ。彼は人の子等の中にて驚くべきことを行い給えり。六 彼海を乾ける地に転え給い、
七 人々河を徒歩にて渉りぬ。されば我等彼を悦ばん。七 彼はその御権能もて永久に統治め、
八 その御眼は異邦人等を見守り給う。叛く者等の自らを崇むることなかれ。八 諸国の民よ、
九 我等の天主を讃め、その讃美を広く伝えよ。九 彼は我等の魂に生命を賜い、我等の足の
一〇 動かさるるを容し給わざりき。一〇 実に天主よ、汝は我等を試み、銀を験す如く、火もて
一一 我等を験し給えり。一二 汝は我等を罠に引き入れ、我等の腰に重き荷を置き、一三 人々をし
て我等の頭の上を踏み行かしめ給いき。我等は火の中、水の中を通りけるが、汝我等に
一四 寛ぎを賜えり。一三 我燔祭の牲を携えて汝の家に入り、わが誓を汝に果さん、一四 そはわが
一五 患難の時に、わが唇の申し出で、わが口の約したるものなり。一五 我は肥えたる羊の燔祭
一六 を、牡羊の膏と共に献げ、牡牛を牡山羊と共に屠らん。一六 天主を畏るる者よ、みな来り
一七 て聴け、我天主のわが魂になし給えるが如何ばかり大いなるかを語らん。一七 我わが口も
一八 て彼に呼わり、わが舌もて彼を讃めぬ。一八 我もしわが心に不義を思い立ちしことあらば、

一九　主聽容れ給わざりしならん。一九されど天主聽容れ給えり、わが懇願の声に御意を留め給
二〇　えり。二〇天主は讃むべきかな、わが懇願を斥け給わず、また御憐憫を我より除き給わざ
　　りき。

第六十六篇（第六十七篇）

天主の御祝福

一　琴を奏でて、歌隊長に歌わしめたる、頌歌。
二　天主我等を憐み、我等を祝し、我等に向かいて御顔を晴れやかならしめ給え。三これ
三　地にてその道が、また諸々の異邦人の中にてもその救済が知らるるに至らんためなり。
四　天主よ、民等汝を頌えよかし、諸々の民汝を頌えよかし。五諸国の民は楽しみて喜び
五　躍れ、其は汝公平をもて民等を治め、地の諸国をも統治し給えばなり。六天主よ、民等
六　汝を頌えよかし、諸々の民汝を頌えよかし。七地はその産物を出せり、天主我等の天主
七　は我等を祝し給えり。八願わくは天主の我等を祝し給わんことを、地の果挙りて彼を畏
八　れ奉らんことを。

第六十七篇

（第六十八篇）

シナイよりシオンへの御幸

一　歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドの頌歌。

二　天主起ち給う、その敵は打散らさる、彼を憎む者等はその御面前より逃げ去る。三　彼等は煙の散らさるる如く散らさる、罪ある者は火の前にて蝋の融くる如く、天主の御前にて亡ぶ。四　されど義しき者は楽しみ、天主の御眼前にて喜び躍るなり、実に楽しみて悦ぶなり。五　天主に歌い奉れ、その御名に楽を奏でよ。荒野を通りて乗り来り給う者の為に、道を備えよ、その御名は主なり。その御前にて喜び躍れ。六　孤児の父にして寡婦の保護者なる天主はその聖なる住所に在す。七　天主は寄辺なき者の為に家を備え、囚人を連れ出して繁栄に至らしめ給う。ただ叛く者のみは乾燥ける地に住まうなり。八　天主よ、汝御民の前に立ちて出で行き給いし時、荒野を通りて進み給うや、九　地動き、天また天主の御前に雫し、シナイも天主、イスラエルの天主の御前に震いたり。一〇　天主よ、汝はその遺産に豊かなる雨を遣り、その疲れしを憩わしめ給えり。一一　汝の羊群はその中

一二 に住めり、天主よ、汝、御仁慈によりて貧しき者の為に之を備え給いしなり。一三 主御言
一三 を出し給う、喜悦を告ぐる者の群は大いなり。一四 諸軍の王等は逃げ行く、逃げ行く。か
一四 くて家に居る者掠奪物を分つ。一五 汝等羊の檻の中にて憩える間、鳩の翼は白銀に輝き、
一五 その毛は黄金なしたりき。一六 全能なる者彼処にて王等を打散らし給える間、サルモンに
一六七 は雪降りたりき。一七 バサンの山は高き山なり、バサンの山は嶮しき山なり。嶮しき山
一八 よ、汝等何とて嫉視るや、天主の住うを嘉し給いし山を、実にも天主の恒久に住わんと
一八 し給う山を。一八 天主の戦車は幾万にして、千また千なり。主シナイより聖所の中に来
一九 り給う。一九 汝は高処に上り、捕虜を引き来り、人々を礼物として受け、主なる天主の御
二〇 許に住むことを欲まざる者等までも然なし給いき。二〇 主は日毎に讃むべきかな、我等の
二一 救済なる天主は、我等の荷を負い給う。二一 我等の天主は救い給う天主なり、主なる天主は
二二 死を遁ることを得しめ給う。二二 実に、天主はその敵の頭を、己が慾のうちを歩む者の
二三 髪毛ある脳天を、打砕き給う。二三 主は曰えり、「我はバサンより率い帰らん、海の深所
二四 より率い帰らん。二四 かくて汝己が足を血に浸し、汝の犬の舌にも敵の分前あらん。」と。

二五　二五天主よ、人々は汝の進み給うを、わが天主の、わが王の、聖所へ進み給うを見る。
二六　二六歌う者前に進み、小琴奏づる者後に続き、鼓鳴らす少女等を真中にす。
二七　二七「祝祭の集会に天主を讃めよ、汝等イスラエルより生れたる者よ、主を讃めよ。」
二八　二八彼処に最も年若きベンヤミンあり、彼等に先立ち進む。ユダの諸侯その群と共にあり、またザブロンの諸侯、ネフタリの諸侯あり。
二九　二九天主よ、汝の御力を出し給え。天主よ、汝我等の為に御力を作かせ給う者よ。
三〇　三〇イエルサレムにある汝の聖殿の為に、王等は汝に礼物を献げよかし。
三一　三一芦間の野獣、民等の牡牛、犢の羊を譴責め、彼等をしてその白銀の板もち来り、平伏さしめ給え、戦闘を好む国々の民を打散らし給え。
三二　三二大いなる者等はエジプトより来り、エチオピアは天主にその手を差伸べよかし。
三三　三三地の国々よ、天主に歌え、主に琴を奏でよ。
三四　三四彼は天を、古よりの天を乗りて過ぎ給えり。見よ、彼その御声を、力ある御声を出し給う、
三五　三五「天主の力を認識れ。」と。その御稜威はイスラエルの上に、その御力は雲の中にあり。
三六　三六天主はその聖所よりして畏るべし、イスラエルの天主は。彼はその御民に力と強さとを賜う。天主は祝せられさせ給え。

第六十八篇　（第六十九篇）

苦難のうちにある義人の祈り

一　二百合」の調に合せて、歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドの作。

二　天主よ、我を救い給え、そはわが首筋にまで、水来りたればなり。

三　我深き泥の中に沒みて　足をかくべき処もなし。我深き水に陷入りて、波我に襲いかかる。

四　我は叫び疲れたり、わが咽喉は嗄れたり。わが天主を待つ間に、わが眼は衰えたり。

五　故なく我を憎む者は、わが頭の髪よりも多く、不当にも我に仇する者は、わが骨よりも強し。我を豈奪わざりし物を返すべけんや。

六　天主よ、汝はわが愚なるを知り給う。わが愆は汝に隠れなし。

七　主よ、万軍の主よ、汝に依頼む者の、わが故に滅びに至ることなからしめ給え。イスラエルの天主よ、汝を求むる者のわが故に赤面することなからしめ給え。

八　実に我は汝の為に侮辱を忍べり、恥はわが面を蔽いたり。

九　我わが兄弟には渡り者の如く、わが母の子等には他所者の如くなれり。

一〇　実に汝の家を思う熱心は我を食い尽し、汝を誹る者の誹謗はわが上にかかれり。

一一　我断食してわが魂を苦しめしが、そは反つて

一二　わが誹らるる種となれり。一三我衣服として粗布を纏いしに、我彼等の笑柄となりぬ。
一三門に坐する者等は我を害う話を語り、葡萄酒飲む者等は我を嘲る。一四されど天主よ、
惠の時に、わが祈祷は、主よ、汝の御許に至る。汝の御仁慈の大いなるによりて、汝の
一五御祐助の忠実なるによりて、我に応え給え。一五わが沒まざるよう、我を泥より引出して、
我を憎む者より、深き水より、我を救い給え。一六大涛の我に襲いかかることなく、深淵
の我を呑むことなく、坑のその口をわが上に閉づることなからしめ給え。一七主よ、我に
応え給え。汝の御情は懇篤なればなり。汝の御憐憫の多きによりて、我を眷顧給え。
一八汝の下僕に汝の御面を隠し給うなかれ。我悩みおれば、速かに我に応え給え。一九わが
魂に近づきて之を贖い給え、わが敵の故に、我を救い給え。二〇汝はわが受けたる非難、
当惑、恥辱を知り給う。我を悩ます者は皆汝の御眼前にあり。二一誹謗わが心を挫きたれ
ば、我弱りて、同情する者を待ちたれど、一人だになく、慰むる者を待ちたれど、一人
だに見当らざりき。二二彼等は我が食物に苦胆を入れ、わが渇ける時我に酢を飲ませたり。
二三彼等の食卓、彼等には罠となり、その友等には輪索となれかし。二四彼等の眼はくらみ

て見えずなり、彼等の腰は常に顫えよかし。二五汝の御憤りを彼等の上に注ぎ、汝の御怒の激烈に彼等を捕えしめ給え。二六彼等の住居は荒るるままなれ、彼等の幕屋には住む者なかれ。二七そは彼等、汝の擊ち給いし者を責苦しめ、汝の傷つけ給いし者の痛みを増したればなり。二八彼等の愆に愆を加え、汝の御許にて彼等を義しと宣り給うなかれ。二九彼等は生者の書より抹殺られよ、義しき者と共に錄さるることなかれ。三〇されど我は悲慘にして苦しめり。天主よ、願わくは汝の御祐助我を護らんことを。三一我歌もて天主の御名を讃め、感謝もて彼を称え奉らん。三二さらばそは牡牛に優りて、角と蹄とある若き牡牛に優りて、天主に嘉せられん。三三謙る者等よ、見て楽しめ、天主を求むる者等よ、汝等の心蘇生せよ。三四そは主貧しき者に応え、縛められたる者を軽んじ給わざればなり。三五天も地も、溟海とその中に動くすべての物も彼を讃めよ。三六蓋し天主はシオンを救いて、ユダの諸市を建て給わん。かくて彼等そこに住みて之を領せん。三七しかしてその下僕の裔も之を嗣ぎ、その御名を愛する者その中に住まらん。

第六十九篇（第七十篇）

天主の御助けを乞う

一 歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドが記念の為にものせる作。

二 天主よ、我を救い給うこと御意に適えかし、主よ、我を助けに疾く来り給え。三 願わくは、わが生命を狙う者の事敗れて赤面し、わが禍を悦ぶ者の後に退りて羞わんことを。四 我に「善哉、善哉！」と云う者の退きて、狼狽に蔽われんことを。五 汝を求むる者の皆、汝を思いて喜び楽しまんことを。また汝の御祐助を望む者の、常に「天主は頌大えられさせ給え。」と云わんことを。六 されど我は悲惨にして貧しければ、天主よ、我を助け給え。汝はわが援助者、わが解放者なり。主よ、躊躇い給うなかれ。

第七十篇（第七十一篇）

堅忍を求むる祈り

一 主よ、我汝の御許に逃げ隠れ奉る。永久に亡ぶることなからしめ給え。二 汝の義に従いて、我を解放ち、我を助け出し給え。我に御耳を傾けて、我を救い給え。三 わが為に

避難の巖、堅き城となりて、我を救い給え。実に汝こそわが岩、わが城にて在すなれ。
四 わが天主よ、不義なる者の手より、悪しき者と虐ぐる者との拳より、我を救い取り給
え。五 実にわが天主よ、汝はわが期待なり、主よ、汝はわが幼時よりのわが希望なり。
六 我は胎を出づるより、汝に頼りたり。わが母の腹にありし時より、汝はわが保護者な
りき。我は常に汝に依頼めり。七 我は多くの人に奇異なる者の如く見えたり。蓋は汝わ
が強き援助者にて在したればなり。八 終日わが口には汝の讃美、汝の頌栄満ちたりき。
九 老いし時に我を離れ給うなかれ。わが力衰えん時に我を見棄て給うなかれ。一〇 蓋は
わが敵我に就きて語り、我を窺う者、共に謀りて、一一 云う、「天主彼を見棄てたり。助
け出す者なければ、追い行きて彼を捕えよ。」と。一二 天主よ、我を離れて遠くに立ち給
うなかれ。わが天主よ、我を助けに疾く来り給え。一三 わが生命に仇する者は事敗れて衰
え、我に悪しき事を図る者は狼狽と羞恥とに蔽われよかし。一四 されど我は常に希望を抱
きて、汝のすべての讃美に日々寄与する所あらん。一五 わが口は汝の義を、終日汝の御祐
助を告げん。蓋は我その限度を知らざればなり。一六 我天主の御能力を物語らん、主よ、

一七 我ただ汝の義のみを宣べ伝えん。一七天主よ、汝はわが幼時より我に教え給えり。さればこ
一八 今に至るまで、我汝の奇蹟を宣伝うるなり。一八髪白くなり老いにし時にも、天主よ、我
を見棄て給うなかれ、わが汝の御腕をこの代に、汝の御能力を後のすべての代々に、宣
一九 伝え、一九また天主よ、汝の義を宣伝えん時まで。そは天にまで達び、汝之によりてかく
二〇 も大いなる事をなし給いしなり。天主よ、誰か汝に匹敵う者あらんや。二〇汝は我に多く
の患難と禍とを負わせ給えり。汝は再び我を活かし、再び我を地の深き所より揚げ給わ
二一 ん。二一わが威光を増さしめ、再び我を慰め給え。二二さらば天主よ、我も琴に合せて、汝
二三 の信実を頌え奉らん、イスラエルの聖なる者よ、汝に小琴奏で奉らん。二三わが汝に歌い
奉る時、わが唇は喜び勇まん、汝の贖い給いしわが魂も然らん。二四わが舌も亦、終日汝
の義を述べん、そは我に悪しき事を図りし者、事敗れて赤面したればなり。

第七十一篇（第七十二篇）

一　サロモンの作。

メシアの栄光

二　天主よ、汝の審判を王に、また汝の正義を王の子に、与え給え。
三　彼は正義もて汝の民を、公平もて汝の卑き者を、治めよかし。
四　山々は民に平和を、丘々は正義を齎さん。
五　彼は民の卑き者を護り、貧しき者の子等を救い、虐ぐる者を蹂躙らん。
六　彼は長く生くること、日の如く、月の如くにして、すべての代々に亘らん。
七　彼は草の上に降る雨の如く、地を濡す夕立の如く降らん。
八　彼の日には正義栄え、平和充溢れて、月の失せん時にまで至らん。
九　彼は海より海に至るまで、河より地の果に至るまで治めん。
一〇　その敵は彼の前に平伏し、その仇は塵を舐ぶらん。
一一　タルシス及び島々の王等は礼物を献げん、アラビアの、及びサバの、王等は贈物を持ち来らん。
一二　かくて地の王等は皆彼を拝み、国々の民は悉く彼に臣事えん。
一三　実に彼は、呼ばわるによりて、貧しき者を、また援助者なき憐なる者を解放い、
一四　乏しき者と貧しき者とを憐みて、貧しき者の生命を救い、非道と虐待とより彼等を解放ち給うべし。彼等の血は彼の御前に貴からん。
一五　されば彼は生き存え給うべく、人々之にアラビアの黄金を奉るべし。彼等は常に彼の為に祈り、絶えず彼を祝がん。
一六　地には穀物の充溢るるあらん。その実はリバノンの

一七　如く山々の頂にそよぎ、邑々に住む者地の草の如く生い立つべし。一七彼の御名は世々に
祝せられん、その御名は日に光のあらん限り、永く続かん。地の族は皆彼によりて祝福
一八　を得、国々の民はすべて彼を至福なる者と称揚えん。一八主イスラエルの天主は祝せられ
一九　させ給え、彼独り奇しき御業をなし給う。一九またその栄ある御名は世々に祝せられさせ
給え。全地はその御栄光に満てよかし。然あれかし、然あれかし。

第七十二篇　（第七十三篇）

悪人の偽りの幸福

一　アサフの詩。
二　天主は直き者に向かい、主は心の純き者に向かい、如何に仁慈深く在すぞ。二されどわ
三　が足は殆ど蹣跚き、わが歩みはやがて滑らんばかりなりき。三そは我罪人の繁栄を見て
四　不敬なる者を羨みたればなり。四実に彼等には何の責苦もなく、その体は健康にして肥
五　えたり。五彼等は死すべき者の受くる艱難にも逢うことなく、人々と共に鞭打たるこ
六　となし。六是によりて傲慢は頸飾の如く彼等を囲繞り、暴力は衣服の如く彼等を蔽う。

七八　七その不義は粗き心より出で、精神の織り作す所迸り出ず。八彼等は嘲笑い、悪意もて語り、上より虐げもて脅かす、九彼等はその口もて天を攻む。その舌は地を難詰る。一〇是によりて、わが民もその許に赴き、夥しき水を呑みて、二云う、「天主いかでか知り給う。至高者に知識ありや。」と。一二見よ、罪人はかくの如くなるに、常に安穏にして勢力を増す。一三然らば我のわが心を潔く保ち、無辜にわが手を洗いたるは、徒労ならずや。一四実に我は毎に笞を、日毎懲罰を受くるなり。一五我もし彼等の如く語らんと思いしならば、汝の子等の代を見棄つることとなりしならん。一六されば我この事を知らんとして思いめぐらしけるが、そは我に煩労しく見えたり。一七我が天主の聖所に入りて、彼等の終に意を留むるまでは然りき。一八寔に汝は滑り易き道の上に彼等を置き、之を滅亡に陥れ給う。一九如何に彼等は瞬く間に顛落ちて失せ、大いなる恐怖に死したりしぞ。二〇主よ、汝起き出で給う時は、人の目覚めたる時の夢の如く、彼等の虚構像を軽んじ給わん。二一わが精神激し、わが心痛みし時は、二二我愚にして曉らず、汝の御前に畜の如くなりき。二三されど我は常に汝と共にあらん、汝はわが右の手を取り給えり。二四汝はその

二五　御勧告もて我を導き、終に栄光の中に我を迎え取り給わん。二五我には汝を除きて誰か天
二六　にある。また我もし汝と共にあらば、わが楽しみに地も要らず。二六わが肉もわが心も
二七　衰う。天主は永久にわが巖にしてわが分なり。二七蓋し視よ、汝を離れ退く者は亡びん。
二八　汝は凡て汝に忠ならぬ者を滅ぼし給うなり。二八然れども天主の御傍にあり、わが避難所
　　を主なる天主に置くは、わが為に善し。我は娘シオンの門にありて、汝のすべての御業
　　を宣べ伝えん。

第七十三篇　（第七十四篇）

聖所の荒廃を見て祈る

一　一アサフの教訓詩。
　　天主よ、何とて汝は絶えず我等を斥け給えるぞ。何とて汝の御忿怒は汝の牧野の羊に対
二　いて燃ゆるや。二汝が往古より建て給いし会、贖いて汝の有となし給いし族、御座を置
三　き給いしシオンの山を思い出で給え。三汝の玉歩を永久の廃墟に向け給え。敵は聖所に
四　てあらゆる物を荒せり。四汝の仇は汝の集会の場にて吼え猛り、己が旗を勝利の印と

五 六 して押し立てたり。五彼等は森の繁みにて斧を揮う者の如し。六既に手斧と鎚とをもて
七 その門を悉く打碎けり。七彼等は汝の聖所に火を放ち、御名の幕屋を地に瀆したり。
八 八しかしてその心の中に云えらく、「我等是等を悉く毀たん。汝等は地にある天主の聖
九 所をみな焼き払え。」と。九今は我等味方の徴を見ず、預言者もなし。またそのいつま
一〇 でなりやを知る者も我等の中にあらざるなり。一〇天主よ、いつまで敵は誹らんや。仇は
一一 汝の御名を果もなく瀆さんや。一一汝何とて御手を引き、御右手を御懐に入れ置き給う
一二 一三 や。一二されど天主は往古よりわが王にて在す、彼地の只中にて救済を行い給う。一三汝は
一四 御能力もて海を裂き、水の中なる龍の頭を踏み躙り、一四鰐の頭を打碎きて、之を海の巨
一五 大なる動物に餌食として与え給えり。一五汝は泉と渓流とを湧出でしめ、満々たる大河を
一六 一七 涸らし給えり。一六昼も汝の有なり、夜も汝の有なり。汝は月と日とを固く据え、一七地の
一八 四方の境界を定め、夏と冬とを形成し給えり。一八主よ、敵は汝を誹り、愚なる民は汝の
一九 御名を呪いたり。是等の事どもを思い出で給え。一九汝の山鳩の生命を兀鷹に付し給うな
二〇 かれ。二〇汝の貧しき者の生命を永久に忘れ給うなかれ。汝の御契約を顧み給え、そは地

二一　と野との隠れたる処には暴虐満ちたればなり。二二　賤しき者を愧じ退かしめ給うなかれ、
二二　貧しき者力なき者に汝の御名を讃えしめ給え。二三　起ち給え、天主よ、汝の訴訟を審理き
二三　給え。愚なる者の日毎汝に加え奉る無礼を憶い給え。二三　汝の仇の声を忘れ給わざれ。汝
に逆い起つ者の喧しき声は常にあがるなり。

第七十四篇（第七十五篇）

主は正しき審判者

一　「滅ぼすなかれ」の調に合せて、歌隊長に歌わしめたる、アサフの頌歌。
二　主よ、汝を我等頌え奉らん、頌え奉らん。我等汝の御名を宣伝え、汝の奇しき御業を
三四　語らわん。三「我時を定めて、法に従い審判をなさん。四地の、之に住む者と共に動揺ぐ
五　時と雖も、我はその柱を堅く保てり。五我は思い上れる者に、〃思い上るなかれ〃と云
六　い、不敬なる者に、〃角を挙ぐるなかれ〃と云う。六至高者に向かいて汝等の角を挙ぐ
七　るなかれ、天主に向かいて無礼なることを云うなかれ。七即ち東よりも、西よりも、又
八九　荒野よりも、山よりも。八ただ天主は審判者に在せば、此を貶し、彼を陟せ給う。九夫

れ、天主の御手には杯あり、是には葡萄酒泡立ちて、混合物満てり。彼之より注ぎ給う。
一〇 彼等滓まで啜らん、地の不敬なる者皆之を飲まん。」 一〇されど我は永久に喜び躍らん、
一一 ヤコブの天主に琴弾き歌わん。一一我また不敬なる者の角を悉く碎かん、義しき者の角は
挙げらるべし。

第七十五篇 （第七十六篇）

敵敗北の感謝

一 琴に合せて、歌隊長に歌わしめたる、アサフの頌歌。
二 天主はユダに知られ給えり、その御名はイスラエルに偉大なり。
三 その御幕屋はサレムに在り、その御住居はシオンに在り。四 彼処にて彼、弓の電光、楯、剣、及び武器を打碎き給えり。
五 汝は光に輝き、権能を佩びて、永遠の山より来り給えり。六 心の毅き者は掠奪せられたり、彼等は睡眠に眠る、勇者の手は悉く弱れり。七 ヤコブの天主よ、汝の御叱咤に戦車も馬も立ちすくみたり。八 汝は懼るべし、汝の御忿怒の烈しきに向かいては、誰か汝に抗らうを得んや。九 汝天より御宣告を聞かせ給えり、地は慄きて默し

一〇 たり、一〇是は天主地のすべての卑き者を救わんとて、審判に起ち給いし時のことなり。
一一 一一実にエドムの憤怒は汝の光栄となるべし、エマトの残存れる者は汝に祝祭を行わん。
一二 一二汝等の天主なる主に誓を立てて、之を果せ。その周囲なる者は皆懼れ奉るべき者に礼
一三 物を持ち来れかし。一三即ち諸侯の気を挫き給う者に、地の王等の懼れ奉るべき者に。

第七十六篇

（第七十七篇）

なやみの日に天主を求む

一 一イディトウンに倣いて、歌隊長に歌わしめたる、アサフの詩。
二 二わが声天主の御許に上り、我呼わり奉る、わが声天主の御許に上る、かくてぞ彼我に
三 聴き給わん。三わが苦悩の日に、我主を求め奉る。夜にはわが手を伸べて倦むことなし、
四 わが霊魂は慰藉を否む。四我天主を思い出でては呻吟き、かえりみてはわが気挫く。
五 五汝わが眼を眠らしめ給わず、我懊悩みて語うことすら能わず。六我昔の日を偲び、往に
七 古の年を七思い出で、夜わが心の中に熟々考え、かえりみてはわが精神具に探り究む、
八 八抑々天主は永久に斥けんとし給うか。最早御恵を垂れんとはし給わざるか。九抑々そ

一〇 の御好意は永久に絶ゆるならんか。御約束はすべての代々に亘りて徒爾ならんか。一〇抑
一一 々天主は憐むことを忘れ給えるか。もしくは怒りて御憐憫を閉鎖し給えるか。」二かか
一二 る時にわが曰く、「至高者の御右手の変れること、是ぞわが嘆きなる。」と。一二我は主
一三 の御業を忘れず、わけても汝の往古の奇しき御業を忘れず、一三汝の諸々の御働きを思い
一四 めぐらし、汝の御行為を考察べたり。一四天主よ、汝の道は聖なるかな。何れの神か我
一五 等の天主の如くに偉大なる。一五汝は奇しき御業を為し給う天主にして、御能力を民等に
一六 知らしめ給えり。一六汝は御腕もて汝の民を、ヤコブとヨゼフとの子等を贖い給えり。
一七 一七水は汝を見たり、天主よ、水は汝を見たり、そは震慄きたり、高潮も亦動揺ぎたり、
一八九 一八雲は水を注ぎつ、雲は轟音を出しつ、汝の矢また飛び出でつ。一九汝の雷は旋風の中
二〇 に轟き、電光は地球を照らし、地は震い動けり。二〇汝の道は海を過り、汝の徑は大水を
二一 過りて附きたり、されど汝の御足跡は見え分かざりき。二一汝はモイゼとアーロンとの手
によりて、汝の民を羊群の如く導き給えり。

第七十七篇（第七十八篇）

天主の恩惠とイスラエルの民の忘恩

一　アサフの教訓詩。

二　わが民よ、わが教訓をよく聽き、わが口の言に汝等の耳を傾けよ。

三　我譬喩にわが口を開き、古き代の秘義を語り闡明さん。

四　我等が聞き知りたる所、我等の父祖が我等に語り伝えし所、我等之をその子等に隠さじ、主の讃美とその御能力とその為し給いし奇蹟とを、来るべき代の人に語り伝えん。

五　抑々彼はヤコブの中に掟を定め、イスラエルの中に法を立て給いしが、是、その我等の父祖に命じ給いしことを、その子等に知らしめん為、

六　是によりて来るべき世代、即ち後に生るべき子等が之を知らん為、その起りて己が子等に語り伝えん為、

七　かくて彼等がその希望を天主に置き、天主の御業を忘れずしてその御誡命を守り、

八　以てその父祖なる、叛きて頑固なる族、直き心をも、天主に忠実なる精神をも有たざりし族の如くならざらん為なりしなり。

九　弓執りて闘いしエフライムの子孫は、戦闘の日に背を向けたり。

一〇　彼等は天主の契約を守らず、その法を

一一　履行うことを辞み、二またその御業と、その彼等に示し給える奇蹟とを忘れ果てたり。
一二一三　二彼はエジプトの国にて、タニスの野にて、彼等の父祖の前に奇蹟を行い給えり。三即
一四　ち海を裂きて彼等を渡らしめ、水を壁の如くに立たしめ給えり。四昼は雲もて、夜は終
一五　夜火の光もて、彼等を導き給えり。五彼は荒野にて岩を裂き、河流よりする如く、豊か
一六　に彼等に水をあてがい、六また岩より小川を招び出し、大河の如く水を流れ下らしめ給
一七一八　えり。七さるを彼等は彼に罪を犯すことを続け、荒野にて至高者の御意を害い、八また
一九　已が慾のままに食を求めて、その心の中に天主を試み奉れり。九剰え、天主を難り
二〇　て云いけらく、「天主は荒野にて、食卓を備うることを得給うか。一〇見よ、彼岩を撃ち
二一　給いしに、水迸り、急湍流れ出でたり。彼またパンをも与うること、或はその民に肉
二二　を備うることを得給うか。」と。一一この故に、主聴き給うや、激怒を発し給えり。即ち
二三　火ヤコブに対いて燃上り、御忿怒イスラエルに対いて沸き返りぬ。一二そは彼等天主を信
二四　ぜず、またその御祐助に依頼まざりしを以てなり。一三されど天主は上より雲に命じて天
の戸を開き、一四彼等の上にマンナを雨と降らせてその食となし、彼等に天のパンを授け

二五 給えり。二五人その勇者のパンを食せり、彼彼等に食物を飽足るまで遣り給いしなり。
二六 彼は天より東風を起し、その御能力もて南風を導き来り給えり。二七しかして彼等の上
二八 に肉を塵の如く、羽毛ある鳥を海の真砂の如く、雨と降らせ給いしかば、二八そは彼等の陣
二九 営の中に、その天幕の周囲に落ちたり。二九かくて彼等は食して甚だ飽き足りぬ。主彼等
三〇 の望を満たし給いしなり。三〇彼等未だその望を去らず、その食物なおその口にありし時
三一 三一天主の御忿怒は彼等に対いて沸き返り、彼その貴き者を死なしめ、イスラエルの若き
三二 者を打倒し給えり。三二然るにかくてもなお彼等罪を犯し、その奇しき御業を信ぜざりし
三三 かば、三三彼速かに彼等の日を尽くるに至らしめ、俄にその年を終らしめ給いぬ。三四彼の
三五 彼等を殺し給える時、彼等彼を尋ねて立帰り、天主を探し求めたり。三五かくて彼等、天
三六 主の己が岩なること、至高き天主の己が贖い主なることを思い起しけるが、三六己が口も
三七 て彼を欺き、己が舌もて之に虚偽を云えり。三七即ち彼等の心は彼に対いて直からず、彼
三八 の契約に忠ならざりしなり。三八されど彼は憐みてその愆を赦し、彼等を滅ぼし給わず、
三九 幾度も御忿怒を抑止めて、その激怒を悉くは注ぎ給わざりき。三九なお彼等が肉なること

四〇 行きて帰らぬ気息なることを思い出で給えり。四〇彼等が荒野にて彼を怒らせ、人住まぬ
四一 所にて之を悲しませ奉りしことはそも幾度ぞや。四一彼等はまたもや天主を試み、イスラ
四二 エルの聖なる者を憤らしめたり。四二彼等は彼の御手をも、その己等を仇の手より贖い給
四三 いし日をも、思い起さざりき。四三その時彼はエジプトにて御徴を、タニスの野にて奇
四四 しき御業を行い、四四彼等の河をもその小川をも血に変らしめて、飲むを得ざらしめ、
四五 四五彼等を喰う蠅と、彼等を悩ます蛙とを、彼等に遣り、四六また彼等の産物をこおろぎに
四七 彼等の労作を蝗に、与え給えり。四七主は雹もて彼等の葡萄樹を、霜もてその無花果樹を
四八 四九 撃ち滅ぼし、四八彼等の家畜を雹に、その羊群を電光に付し、四九彼等に向かいて忿怒の烈
五〇 しきと、憤りと、激昂と、患難と、災禍を施す者の群とを、遣し給えり。五〇彼は御忿怒
五一 を漏らす道を拓き給いて、彼等を死より防護らず、その畜までも疫病に付し、五一エジプ
トにてすべての長子を、カムの幕屋にて彼等の最初に生みたる者を、撃ち滅ぼし給えり。
五二 五三 五二されど彼は己が民を羊の如くに引出し、荒野にて之を畜群の如くに導き、五三彼等を安
らかに率い行き給いしかば、彼等は懼れざりき。然るにその敵は、海之を覆沒いけり。

五四 次いで彼はその聖地に彼等を導き入れ、御右手にて獲給いし山に至り、五五 彼等の前より異邦の民を逐い出し、籤にて彼等を、嗣産として割当て、イスラエルの族を彼等の幕屋に住ましめ給えり。五六 然れども彼等は至高き天主を試みて怒らせ奉り、その御命令を守らず、五七 叛き離れてその父祖の如く邪曲になり、狂える弓の如く逸れ行きたり。五八 彼等はその高処に由りて彼を御忿怒に誘い、その彫める像によりて彼の御嫉妬を起せり。五九 天主は聞きて激しき御忿怒を発し、厳しくイスラエルを斥け、六〇 シロの御住居、己が人々の間に住み給えるの幕屋を棄て去り、六一 その力を捕囚に、その栄光を敵の手に付し、六二 御民を剣に委ね、その嗣産に対いて御忿怒を燃やし給えり。六三 彼等の若者は火之を喰い、彼等の乙女は婚約を結ばれず、六四 彼等の司祭は剣に斃れ、彼等の寡婦は悼み哭かざりき。六五 この時に当りて、主はさながら睡眠より覚むるが如く、葡萄酒に酔い倒れたる武夫の覚むるが如く目覚め、六六 その敵を背後より撃ち、之に永久の名折を負わせ給えり。六七 またヨゼフの幕屋を棄て、エフライムの族を選ばず、六八 ユダの族を、その愛で給うシオンの山を、選び、六九 その聖所を天の如く、世々に至るまで据え給いし地の如く、築き

七〇 七一 給えり。七〇更にその下僕ダヴィドを選びて、之を羊の檻より取り、七一乳飲む仔等に従え
七二 る彼を召びて、その民ヤコブ、その嗣産イスラエルを牧わしめ給いぬ。七二されば彼は、
その心の直きもて彼等を牧い、その分別ある手もて之を導けり。

第七十八篇（第七十九篇）

イエルサレムの破壊を嘆く

一 一アサフの詩。
天主よ、異邦人等汝の嗣産に入り来りて、汝の聖なる御殿を瀆し、イエルサレムを廃墟
二 と化し、二汝の下僕等の屍を餌として天の鳥に、汝の聖者等の肉を地の獣に与え、三彼等
三 の血をイエルサレムの周囲に水の如く流せり。しかも是等を葬る者あらざりき。四我等は
四 隣人の侮辱の的、周囲にある者等の笑柄、弄り物となれり。五主よ、いつまでぞ。汝永
五 久に怒りて在さんか。汝の御憤り火の如く燃えんか。六汝を知らざる異邦人と、御名
六 を呼ばざる国々の上に、御忿怒を注ぎ給え。七実に彼等はヤコブを喰い尽し、その住所
七 を荒らしたり。八父祖の愆を憶い出でて我等に当り給うなかれ。汝の御憐憫は速かに我

九 等を迎えよ。蓋は我等いと惨しき者なればなり。
一〇 為に、我等を助け、御名の為に我等を救い、我等の罪を赦し給え。一〇 何ぞ異邦人等をして、「彼等の天主は何処にかある。」と云わしむべけんや。我等の眼の前にて、異邦人
一一 等の間に、汝の僕等の流されたる血の報復を知らしめ給え。一一 願わくは、捕虜の呻吟の汝の御許に至らんことを。汝の御腕の力によりて、死に定められたる者を解放ち給え。
一二 一二 しかして主よ、我等が隣人等に対してその懐に、彼等の汝に加え奉りし侮辱を、七倍
一三 にして報い給え。一三 されど汝の民にして汝の牧場の羊なる我等は、永久に汝を頌祝ぎ奉らん、代々より代々に至るまで、汝の讃美を宣伝え奉らん。

第七十九篇 （第八十篇）

荒されたる葡萄畑を思いて

一 「法の百合」の調に合せて、歌隊長に歌わしめたる、アサフの詩。
二 イスラエルを牧し給う者よ、羊群の如く、ヨゼフを導き給う者よ、御意留めて聴き
三 給え。智天使の上に坐し給う者よ、輝き出で給え、三 エフライム、ベンジャミン、マナッ

四 セの前に。汝の御力を揮い起し、我等を救わんために来り給え。四 天主よ、我等を連れ
五 戻し、我等の救われんために汝の御顔を晴れやかならしめ給え。五 万軍の天主よ、汝の
六 民祈れるに、汝いつまで怒らんとし給うや。六 汝は彼等に涙のパンを食せしめ、之に
七 夥しき涙を飲ましめ給えり。七 汝我等を隣人等の紛争の因となし給いしかば、我等の
八 敵等我等を嘲笑う。八 万軍の天主よ、我等を連れ戻し、我等の救われんために、汝の御
九 顔を晴れやかならしめ給え、九 汝は葡萄樹をエジプトより取り去り、異邦人等を逐い出
一〇 して、之を植え給えり。一〇 汝之に地を備え給いしかば、そは根を張りて国中にはびこり
一一 一二 ぬ。一二 山々はその蔭に、天主の杉はその枝に、蔽われたり。一三 そは枝を海にまで、小枝
一三 を河にまで伸ばしたり。一三 汝何とてその石垣を毀ち給いしや。是によりて道行く人々皆
一四 一五 之を摘み取り、一四 森の猪之を荒らし、野の獣之を喰い去るなり。一五 万軍の天主よ、帰
一六 り給え、天より望み、みそなわしてこの葡萄樹を訪れ給え。一六 汝の御右手の植え給える
一七 もの、御自分の為に強くなし給える苗木を護り給え。一七 之を火に焼き、また切り倒す者
一八 は、汝の御顔の御威嚇によりて亡びよかし。一八 願わくは汝の御手、汝の右手の人の上に、

一九 汝が御自分の為に強くなし給える人の子の上にあらんことを。一九さらば我等最早決して
二〇 汝より離れ去らじ。汝我等を守りて活かしおき給わん、かくて我等汝の御名を宣伝えん。
二〇 主よ、万軍の天主よ、我等を連れ戻し、我等の救われんために、汝の御顔を晴れやかならしめ給え。

第八十篇（第八十一篇）

祭日の讃歌

一 「葡萄酒搾り」の調に合せて、歌隊長に歌わしめたる、アサフの作。
二 我等の援助者なる天主に向かいて喜び躍れ。ヤコブの天主に向かいて声を挙げよ。
三 琴かき鳴らし、鼓を打て、音快き小琴を竪琴に合せよ。四 新月に喇叭を吹き鳴らせ、
五 我等の祝典の日なる満月にも然せよ。五 そはイスラエルの制定、ヤコブの天主の御掟なればなり。六 主がヨゼフの中にこの法を立て給いしは、そのエジプトの国を討たんと進み給いし時なりき。我は未だ知らざりし語を聞けり、七 我は荷を除きて彼の肩を軽くしたり。彼の手は籠を放せり。八 汝患難の時に呼わりければ、我汝を助け出せり。我雷

九 の雲より汝に答え、メリバの水の辺にて汝を験せり。聽け、わが民よ、我汝を警告めん。
一〇 イスラエルよ、汝の我に聽かんことこそ望ましけれ。一〇汝の許に他の神あるべからず、
一一 汝異国の神を拝むべからず。二我は主、汝の天主、エジプトの国より汝を導き出したる者なり。汝の口を開け、さらば我之に満さん。一二されどわが民はわが声を聽かず、
一三 イスラエルは我に順わざりき。一三この故に我彼等をその心の頑固なるに任せ、その志
一四 すままに歩ましめたり。一四わが民の我に聽かんこと、イスラエルのわが道を歩まんことこ
一五 そ望ましけれ。一五さらば我直に彼等の敵を抑圧け、彼等の仇にわが手を向けんものを。
一六 一六主を憎む者も之に媚び、彼等の運は永久に続かんものを。一七かくて我、麥の精髄を
一七 彼に食せしめ、岩よりの蜜をもて彼を飽かしめんものを。」

第八十一篇（第八十二篇）

正義の審判を行え

一 二 一アサフの詩。天主は諸神の集会の中に起ち、諸神の只中にて審判を行い給う。二汝等いつまで公平な

三　らぬ審判して、悪しき者の訴因に偏り与せんとするや。
四　庇い、下層なる者と貧しき者とに公義をなせ。
五　しき者の手よりこれを助け出だせ。」
六　の基悉く動揺げり。我は云えり、「汝等は神なり、皆至高者の子等なり。
七　がら汝等は人々の如く死し、諸侯の各々の如く倒れん。」と。
八　裁き給え、そは汝が諸々の国民を己が有となし給うこと、当に然るべければなり。

第八十二篇（第八十三篇）

敵に抵る祈り

一　アサフの頌歌。
二　主よ、默し給うなかれ。天主よ、言無く靜まり在すなかれ。
三　ぎ立ち、汝を憎む者等頭を抬げたり。実に見給え、汝の敵騷
四　護り給う者に向かいて陰謀をなすなり。彼等は汝の民に向かいて策略をめぐらし、汝の
五　つの民たるを得ざらしめ、更にイスラエルの名の記憶せらるることなからしめん。」と。彼等は云う、「いざ我等彼等を滅ぼして、一

六 寔に、彼等は心を一つにして相謀り、汝に敵いて盟約を結ぶ。七 そはエドムの天幕に
八 住む者にイスマエル人、モアブにアガル人、八 ゲバルにアンモンにアマレク、フイリス
九 ト人とチロの住民なり。九 またアッシリア人も彼等に与せり。彼等ロトの子等に腕を貸
一〇 したり。一〇 汝嘗てマディアンになし給いし如く、シサラになし給いし如く、キソンの溪
一一 流にてヤビンになし給いし如く、彼等になし給え。一一 彼等はエンドルにて滅ぼされ、地
一二 の肥堆となれり。一二 彼等の諸侯をオレブとゼブとの如く、彼等の諸将を皆ゼベーとサル
一三 マナとの如く、なし給え。一三 彼等は云えり、「いざ我等、己が為に天主の諸州を占領せ
一四 ん。」と。一四 わが天主よ、彼等を旋風に吹廻さるる木の葉の如く、風の前の藁の如く、
一五 なし給え。一五 森を焼く火の如く、また山々を燃やす火の如く、一六 汝の疾風もて彼等を追
一七 い立て、汝の暴風もて彼等を怖じ惑わしめ給え。一七 彼等の面に恥を満し給え、これ、彼
一八 等が汝の御名を求めんためなり。一八 彼等は赤面して永久に怖じ惑い、恥かしめられて亡
一九 びよかし。一九 また彼等は知れかし、主と名のりまする汝独り、全地を統べ給う至高き者に
て在すを。

第八十三篇（第八十四篇）

聖所に憬れて

一「葡萄酒搾り」の調に合せて、歌隊長に歌わしめたる、コレの子等の詩。

二 万軍の主よ、汝の御住居は如何に愛すべきかな。三 わが魂は主の大庭を、絶え入るばかりに恋い慕い、わが心わが肉は活ける天主に向かいて歓び叫ぶ。四 雀も家を、燕もその雛置くべき巣を、見出すなり。万軍の主よ、わが王わが天主よ、五 汝の祭壇を。主よ、至福なるかな、汝の家に住む者。彼等は絶えせず汝を讃め奉る。六 至福なるかな、聖き巡礼を志ざす時、汝より御祐助を蒙る人。七 彼等は乾き果てたる谷を過ぐるや、之を泉となす。また朝の雨は之に恵を着せん。八 彼等は力より力に進み、シオンにて神々の天主を仰ぎ見ん。九 万軍の主よ、わが祈祷を聴き給え。ヤコブの天主よ、御耳に留め給え。一〇 我等の楯なる天主よ、照覧し給え、汝の受膏者の面を眷顧み給え。一一 実に汝の大庭にある一日は、他の千日に優り、わが天主の家の敷居にありて禍を蒙るは、罪の幕屋に住まるに優りてよし。一二 夫れ、主なる天主は陽なり、楯なり。主は恩恵と栄光とを賜い、

一三　辜なく歩む者に、善き物を拒み給わず。一三万軍の主よ、汝に頼り奉る人は至福なるかな。

第八十四篇　（第八十五篇）

正義と平和と接吻する時来らん

一　歌隊長に歌わしめたる、コレの子等の詩。

二　主よ、汝は汝の地に、恩恵を垂れ給えり、ヤコブの運を好きに向かわしめ、三　汝の民の愆を赦し、そのあらゆる罪を蔽い、四　御憤りを全く抑え、烈しき御怒りを止め給えり。五　我等の救主なる天主よ、我等を旧に復し、我等に対する御不興を棄て給え。六　抑々汝は永久に我等を怒り給うや、即ち汝の御忿怒を万代に及ぼし給うや。七　汝、我等に再生命を与え、汝の民を、汝によりて楽しましめ給わずや。八　主よ、御憐憫を我等に示し、御救拯を我等に賜え。九　我は主なる天主の語り給う所を聴かん。彼は実に平安を告げ給わん、その御民に、その聖徒に、また心より彼に立帰りし人々に。一〇　正に御救拯は彼を畏れ奉る人々に近し、かくて栄光我等の地に住まらん。一一　憐憫と信実と相迎え、正義と平和と互に接吻せん。一二　信実は地より生え出で、正義は天より見下さん。一三　また主

一四　も佳き物を賜い、我等の地はその産物を出さん。一四正義は彼の御前に行き、救拯はその歩み給う道にあらん。

第八十五篇（第八十六篇）

患難の時の祈禱

一　ダヴィドの祈祷。
二　主よ、御耳を傾けて、我に応え給え。其は我悲惨にして貧しければなり。
三　わが魂を守り給え、そは我汝に忠なるものなればなり。汝に頼り奉る汝の下僕を救い給え。
四　わが天主にて在す。主よ、我絶えず汝に向かいて呼わり奉れば、我を憐み給え。
五　我汝にわが霊魂を挙げ奉れば、汝の下僕の霊魂を悦ばしめ給え。
六　実に主よ、汝は慈愛深くして柔しく、すべて汝を呼び求むる者には憐憫に充溢れ給うなり。
七　祷をよく聴き、わが懇願の声に御意を留め給え。
八　我はわが患難の日に、汝に向かいて呼わり奉る、そは汝我に応え給うべければなり。
九　主よ、神々の中に、汝に匹儔う者はなく、また業として、汝の御業の如きはあらず。
十　汝の造り給える諸々の国民は来りて、

一〇 主よ、汝を拝み、汝の御名を宣伝えん。一〇そは汝偉大にして奇しき御業をなし給えばなり。汝ただ独り、天主にて在す。一一主よ、我が汝の真理を踏みて歩まんために、汝の道を我に教え給え、わが心が汝の御名を畏れ奉らんために、そを導き給え、一二主よ、わが天主よ、我わが心を尽して汝を頌え、永久に汝の御名を宣伝えん。一三そは汝の御憐憫我に対して大いにして、汝わが魂を冥府の深処より救いあげ給いたればなり。一四天主よ、傲る者我に逆い起てり、また力ある者の群わが生命を窺い、汝をその眼の前に置かず。一五されど主よ、汝は憐憫深く、情あり、怒るに遅く、此上なく柔しく、信実ある天主にて在す。一六我を眷顧み、我を憐み給え。汝の下僕に御力を賜い、汝の婢の子に救済を施し給え。一七我を憎む者見て狼狽するよう、汝の御愛顧の印を我に与え給え、其は主よ、汝我を助け我を慰め給いしに由りてなり。

第八十六篇　（第八十七篇）

我等の母なるシオン

一　コレの子等の頌歌。

二　聖なる山に築き給いしものを、主は愛で給う。ヤコブのすべての住居に優りて、シオンの諸門を愛で給う。三　天主の都よ、汝のことは褒めはやされたり。四　我はラハブとバベルとを、我を崇むる者の中に加えん。視よ、フィリステアと、チロと、エチオピアの民とを、是等の者は彼処にて生れたり。五　またシオンに就きてかく云われん、「人は皆、その中にて生れたり、最高き者、御自ら之を固うし給いぬ。」と。六　主は民等の書に錄し給わん、「是等の者は彼処にて生れたり。」と。七　かくて彼等舞踊の音頭取りつつ、かく歌わん、「わがすべての泉は汝の中にあり。」と。

第八十七篇

（第八十八篇）

悩みの裡に主に叫ぶ

一　コレの子等の頌歌。「マハラト」の調に合せて、歌隊長に歌わしめたるもの。歌わしめん為にせるエズラ人ヘマンの教訓詩なり。

二　主よ、わが天主よ、我、昼は呼わり、夜は汝の御前に嘆く。三　わが祈祷を御許に至らしめ、御耳をわが叫声に傾け給え。四　実にわが霊魂は禍に満され、わが生命は冥府に近

五六 づくなり。五 我は穴に下る者の中に数えらる。我は病める人の如くなりたり。六 わが褥
が死者の中にあるは、殺されて墓に臥す者の如し。汝は最早彼等を記憶し給わず、彼等
は汝の配慮より切り放されたるなり。七 汝は深き穴に、暗黒の中に、淵のなかに、我
を置き給えり。八 汝の御憤怒はわが上に重し、汝その諸々の涛もて我を圧倒し給いぬ。
九 汝はわが知人を我より遠ざけ、我を彼等に憎まるる者となし給えり。我は閉込められ
たり、出でゆく能わず。一〇 わが眼は悲嘆ゆえに衰う。主よ、我は日毎汝に向かいて叫び、
汝に向かいてわが手を差伸べ奉る。一一 抑々汝は死せる者の為に奇蹟を行い給うや。即ち
逝きし者の起ちて汝を讃め奉ることあらんや。一二 抑々また汝の御仁慈が墓の中にて、汝
の信実が冥府に於いて、語らるることあらんや。一三 抑々また汝の奇蹟が暗黒に、また汝
の御恩恵が忘却の国に、顕わるることあらんや。一四 されど我は、主よ、汝に向かいて叫
び奉る。わが祈祷は朝に汝の御許に至る。一五 主よ、汝何とてわが魂を斥け給うや。何と
て我に御面を隠し給うや。一六 我は幼時よりこの方、憐れなる者、死すべき者なり、汝を
恐るる念を抱きて衰え果てたり。一七 汝の御忿怒わが上を過ぎたり、汝を恐るる念我を亡

一九八

ぼせり。一八是等は常に水の如く我を囲繞り、諸共に我を囲み攻むるなり。一九汝は友と仲間とを我より遠ざけ給えり。わが親しきものは暗黒にこそ。

第八十八篇

（第八十九篇）

天主の御約束は希望のいしずえ

一エズラ人エタンの教訓詩。

二我は永久に主の御恩恵を歌わんかな、万代に亘りて汝の信実を、わが口もて告げんかな。三我は永久に据え置かれたり。汝はその信実を天にな。四汝は曰えり、「我はわが選びたる者と契約を結べり。我はわが下僕ダヴィドに誓いたり。五我永久に汝の裔を立て、汝の王座を据えて万代に及ぼさん。」六主よ、諸天は汝の奇し立て給えり。七蓋し雲の中にて誰か主に匹儔き御業を、聖なる者の集会にては汝の信実を、頌えん。八天主は聖なる者の会のぶ者あらんや。天主の子等の中にて誰か主の如き者あらんや。九万軍の天主なる主よ、中にて畏むべく、その周囲のすべてのものに優りて恐るべし。一〇汝は海の荒ぶるを誰か汝に匹う者ぞ。主よ、汝は大能あり、汝の信実は汝を囲繞る。一〇汝は海の荒ぶるを

一一 治め、その涛の起るを靜め給う。一二 汝はラハブを刺し貫きて蹂躙り、汝の力ある御腕も
一二 て汝の敵を打散らし給えり。一三 諸天は汝の有なり、地もまた汝の有なり。地球と之に滿
一三 てる物とも、汝その基を置き給えるなり。一四 北と南とは汝の創造り給いし所、タボルと
一四 ヘルモンとは汝の御名によりて喜び躍る。一五 汝には力ある御腕あり、汝の御手は強く、
一五 汝の御右手は挙がれり。一六 義と権とは汝の玉座の基たり、慈愛と信実とは汝に先だち進
一六 一七 む。一六 至福なるかな、喜び躍ることを知る民。主よ、彼等は御顔の光の中を歩み、一七 御
一七 名によりて常に楽しみ、汝の義によりて挙げらるるなり。一八 実に汝は彼等の力の光輝な
一八 り。一九 我等の角は汝の御好意によりて挙げらる。一九 実に我等の楯は主のもの、我等の王は
一九 イスラエルの聖者のものなり。二〇 曽て汝幻視の中に汝の聖者等に告げて曰えり、「我は
二〇 力ある者に冠を戴かしめたり、民の中より選みたる者を挙げたり。二一 我はダヴィドのわ
二一 が下僕たるを見出し、之にわが聖油を塗れり、二二 これ、わが手常に彼と共にあり、わ
二二 が腕彼を強くせんためなり。二三 敵の彼を欺くことなく、意根悪しき者の彼を虐ぐること
二三 なからん。二四 却つて我彼の前にその敵を粉砕し、彼を憎む者等を討滅ぼさん。二五 わが信
二四 二五

二六 実とわが慈愛とは彼と共にあり、その角はわが名によりて挙げらるべし。二七 我彼の手を海の上に、その右の手を河の上に伸べん。二八 彼は我を呼ばん、『汝はわが父、わが天主にしてわが救済の巖なり。』と。二九 なおまた我は彼を立てて長子となし、地の王等の中にて最高き者となさん。三〇 我永久に彼の為にわが慈愛を維持け、彼に向かいてはわが契約堅くして変らざるべし。三一 我またその裔を永久にあらしめ、その玉座を天の日数の如くにあらしめん。三二 もしその子等わが法を棄て、わが命のままに歩まず、三三 わが規定を破り、わが誡命を守らずば、三四 我杖もてその罪を、打擲もてその愆を罰せん。三五 されどわが恩恵を彼より取り去ることなく、またわが信実を失うことなからん。三六 我はわが契約を破らじ、またわが唇より出したることを変えじ。三七 我曾てわが聖によりて誓いしことあり、我必ずダヴィドに虚偽を云わじ、三八 その裔の永久に存し、その玉座のわが前にあらんこと、日の如く、三九 天の信実なる証人、永久に存する月の如くなるべし。」

四〇 されど汝はその受膏者を、斥け、棄て、彼に対して太く怒り給えり。四一 汝の下僕の契約を軽んじ、その冠を瀆して地に委ね給えり。四二 その石垣を悉く崩し、その砦を荒るる

に任せ給えり。四二 道行く者は皆彼より掠奪り、彼はその近隣の弄りものとなりぬ。四三 汝は彼の敵の右手を挙げ、その諸々の仇に喜悦を満し給えり。四四 彼の剣の刃先を鈍らしめ戦闘にも彼を支え給わざりき。四五 汝彼の光輝を失せしめ、その玉座を地に投げ倒し、四六 その青春の日を短縮め、之を不名誉もて覆い給えり。四七 主よ、いつまでぞ。汝永久に御自分を隠さんとし給うや。御忿怒火の如く燃えんか。四八 わが生命の如何に短きか、又汝すべての人を如何に儚く創造り給えるかを憶い給え。四九 生存えて死を見ざる者、已が霊魂を冥府の手より取戻す者、誰かある。五〇 主よ、汝が信実もてダヴィドに誓い給いし往古の御恩惠は今何処にかある。五一 主よ、汝の下僕の恥辱を記憶し給え。我は異邦人等の敵意を悉くわが懐に抱く、五二 主よ、汝の仇は是をもて嘲り、是をもて汝の受膏者の歩みを嘲るなり。五三 主は永久に祝せられさせ給え、然あれかし、然あれかし。

第八十九篇（第九十篇）

一 天主の人、モイゼの祈祷。

永遠の天主は命短き人間の避難所

二　主よ、汝は代々より代々に至るまで、我等の避難所にて在せり。
三　山々成り、地と世界との生れしに先立ちて、天主よ、汝は永遠より永遠に在す。
四　汝塵に帰ることを死すべき者に命じて曰わく、「汝等人の子よ、帰れかし。」と。
五　抑々汝の御眼には千年も過ぎ去りし昨日の如く、また夜の不寝番の如し。
六　汝之を奪い去り給うに、そは朝の夢の如く、萌え出づる草の如し。
七　朝には茂りて緑なれど、夕には刈られて枯れ果つるなり。
八　実に我等は汝の御忿怒によりて焼尽され、汝の御憤りによりて怖惑わしめられたり。
九　汝は我等の愆を汝の御眼前に、我等の隠れたる罪を御顔の光の中に置き給えり。
一〇　我等の年は合せ計えて漸く七十、健かなるも八十に過ぎず。しかもその大部分は労苦と空虚とのみ。そは速かに過行きて、我等は飛去るなり。
一一　誰か汝の御忿怒の力を、汝に相応わしき敬畏の念に準りて汝の御憤恚を量りし者あらんや。
一二　我等の日を数うることを、我等に教え給え、そわ我等心の智きに至らんためなり。
一三　主よ、帰り給え。いつまでぞ。汝の下僕に御恵を垂れ給え。
一四　速かに我等を御憐憫もて飽かしめ給え、これ、我

一五 等已が日の限り喜び楽しむを得んためなり。一五汝が我等を苦しましめ給える日々に代え
一六 我等が憂目を見たる年々に代えて、我等を楽しましめ給え。一六汝の御業を汝の僕等に、
一七 汝の御栄光を彼等の子等に、顕し給え。一七かくて主我等の天主の御仁慈我等の上にあれ、
我等の手の業我等に幸せよ、我等の手の業幸に運べよ。

第九十篇（第九十一篇）

天主は義人を護り給う

一 至高者に護られて生活す汝、全能なる者の御蔭の下に宿る汝、二主に云えかし、「わ
が避難所にしてわが城、わが頼み奉る天主。」と。三蓋は彼汝を獵人の罠より、悪しき疫
より遁し給うべければなり。四彼はその御翅もて汝を庇い給うべければ、汝はその御翼
の下に逃げ避難れん。彼の信実は大楯小楯なり。五汝夜の恐怖にも、昼の飛び来る矢に
も、六暗闇を徘徊い歩く疫病にも、正午に荒らす災害にも、恐るることあらじ。七たと
い汝の傍にて千人、汝の右にて万人倒るるとも、汝にはその近づくことなからん。八の
みならず汝已が眼もて眺め、罪人等の報を見るべし。九実に主は汝の避難所にて在す、

一〇 汝は至高者を立てて汝の防備となせり。一〇不幸汝の許に至らざるべく、災禍汝の幕屋に
一一 近づかざるべし。一一蓋は彼汝に就きてその天使等に命じ、汝のあらゆる途に於て汝を守
一二 らしめ給いたればなり。一二彼等は汝の足の石に衝き当らざるよう、手にて汝を支えん。
一三 一三汝は毒蛇と蝮とを踏みつけ、獅子と龍とを蹂躙らん。一四彼我に縋りたれば、我彼を救
一四 い出さん。彼わが名を知れるにより、我彼を庇護らん。一五彼我を呼ばんに、我之に応え
一五 ん。その患難の時にも我之と共に在り、彼を救い出し、之に誉あらしめん。一六我寿命の
一六 長きもて彼を飽かしめ、わが救済を之に示さん。

第九十一篇　（第九十二篇）

善きかな、主を頌うること

一 安息日の頌歌。
二 善きかな、主を頌うること、至高者よ、汝の御名に奏で歌うこと、
三 朝には汝の御憐
四 憫を、夜には汝の信実を宣伝うるに、四十絃琴と竪琴とを用い、小琴に合せて歌うこと。
五 蓋は主よ、汝御所為もて我を楽しましめ給えばなり。我御手の業に喜び躍る。六主よ、

七 汝の御業は如何に偉大なるぞ、汝の思慮は如何に深きぞ。七 この事どもを、無智なる
八 人は知らず、愚なる者は曉らず。八 たとい不敬なる者草の如く栄え、悪を行う者皆輝く
九 ことありとも、彼等は永久の滅亡に定められたり。九 されど主よ、汝は永久に至高者に
一〇 て在す。一〇 実に見給え、汝の敵は、主よ、実に見給え、汝の敵は亡ぶべし。悪を行う者
一一 は皆打散らさるべし。一一 汝はわが角を、野牛の角の如く挙げ給えり、我に至純き油を注
一二 ぎ給えり。一二 かくてわが眼はわが敵を見さげ、わが耳は我に起ち逆いし意根悪しき者に
一三 就きて、悦ばしき事を聞きたり。一三 義しき者は棕櫚の如く栄え、リバノンの杉の如く成
一四 一五 長たん。一四 主の家に植えられたる者は、我等の天主の大庭にて栄えん。一五 彼等は老いて
一六 もなお、実を結ばん、潤いて、勢盛んなるべし。一六 これ、わが巖なる主の如何に直く
在すかを、また彼に不公平なきことを、告げんためなり。

第九十二篇 （第九十三篇）

一 力ある君

一 主ぞ統治し給う、御稜威を着給えり、主権能を纏い、自に帶して、地球を固く立て給

二　いければ、その揺ぐことなからん。三汝の玉座は古より堅し、汝は永遠より在す。三大河
三　は挙ぐ、主よ、大河は挙ぐその声を、大河は挙ぐその轟音を。四多くの水の声より強し、
四　海の逆巻く波より強し、高処に在す主は強し。五汝の証詞は甚だ頼もし。主よ、聖は汝
五　の家に月日の続かん限り適わしきなり。

第九十三篇　（第九十四篇）

御民の圧迫者に対する天主の審判

一　復讐者たる天主よ、主よ、復讐者たる天主よ、御光輝を放ち給え。二地を裁き給う者
二　よ、起ち給え。高ぶる者に然るべき報を与え給え。三不敬なる者いつまでか、主よ、不
三　敬なる者いつまでか栄ゆべき、四いつまでか口角泡を飛ばして無礼なることを語るべ
四　き、不義を行う者、誇るべき。五主よ、彼等は汝の民を蹂躙り、汝の遺産を害い、六寡婦
五六　と旅人とを斬り刻み、孤児を殺す。七しかして曰く、「主は見ず、ヤコブの天主は意注め
七　ず」と。八暁れかし、民の中なる愚者よ。無智なる者よ、汝等いつの時にか賢くならん。
八　九耳を植えつけ給える者、聴き給わざらんや。又眼を構成し給える者、見給わざらんや。
九

一〇 国々の民を躾け給う者、懲らし給わざらんや。人に知識を教え給う者ぞ。一一 主は人々の思念を、その空しきを、知り給う。一二 主よ、福なるかな、汝が躾け、且汝の法を教え給う人。一三 汝はかくして彼に、禍の日を脱れしめ、不敬なる者の為に穴の掘らるるまで安息を与えんとし給うなり。一四 蓋し主はその民を棄て給わざるべく、またその遺産を捨て給わざるべし。一五 却つて審判は義しきに帰り、心の直き者皆これに従わん。一六 誰かわが為悪をなす者に敵い起たんや。誰かわが為不義を行う者に逆らい立たんや。一七 主もし我を助け給わざりしならんには、わが霊魂はやがて沈黙の境に住いたるならん。一八 わが足蹣跚く」とわが思う時、主よ、汝の慈しみ我を支う。一九 わが心に憂苦のいや増す時汝の慰藉わが魂を楽しましむ。二〇 律法と見せて、煩わしき事を作り出す不義なる輩の裁判の座は、汝に関係あらんや。二一 彼等、義しき者の魂を責めなば責めよ、罪なき者の血を罪せば罪せよ、二二 主必ずわが為に砦となり、わが天主わが避難の巌となり給わん。二三 しかして彼等にその不義を報い、彼等をその自己の悪意によりて亡ぼし給わん、主我等の天主彼等を亡ぼし給わん。

第九十四篇　（第九十五篇）

讃美のすすめ

一　いざ我等主に向かいて喜び躍らん、我等の救拯の巖に向かいて歓び叫ばん、二　我等讃
称えつつその御前に至り、彼に向かいて喜び歌わん。三　夫れ主は大いなる神なり、諸々
の神に優れる大王なり。四　地の深き所、その御手にあり、山の高き所も彼の有なり。
五　海は彼の有なり、即ち彼之を造り給えり、その御手に成りし乾ける地も亦然り。六　い
ざ我等拝み平伏さん、我等を造り給える主に向かいて膝を屈めん。七　そは彼こそ我等の
天主にして、我等はその牧場の民、その御手の羊なればなり。汝等の今日その御声を聞
かんことこそ望ましけれ。八「汝等己が心を頑固にするなかれ。メリバに在りし時、マッ
サの日に荒野に在りし時、九　汝等の父祖がわが業を見ながら、彼処にて我を試み、我を
験したる如く、一〇　我彼等の代を厭うこと四十年にして云えり、『彼等は心迷える民なり
わが道を知らざりき』と。一一　是故に我怒りて誓えり、『わが安息に彼等を入れじ。』と。」

第九十五篇（第九十六篇）

主の来臨

一　主に向かいて新しき歌を歌え、全地よ、主に向かいて歌え。二　主に向かいて歌え、その御名を讃め、日に日にその救拯を告げよ。三　異邦人の間にその御栄光を、諸々の民の間にその奇しき御業を、宣べよ。四　夫れ、主は偉大に在して大いに讃うべく、あらゆる神々に優りて畏るべき者に在す。五　蓋は異邦人の神々は皆虚しき像なれども、主は天を造り給いたればなり。六　御稜威と美麗とこれに先立ち、権能と光輝とその聖なる御座にあり。七　主に帰せよ、諸々の民の族よ、主に帰せよ光栄と権能とを、八　主に帰せよ御名の頌栄を。供物を取りてその大庭に入れ。九　聖き飾して主を拝せよ。全地よ、その御前に戦け。一〇　異邦人の間にて云え、「主ぞ統治し給う。」と。彼は地球を堅く立てて、動かざらしめ、民を公平に治め給う。一一　天は楽しみ、地は雀躍せよ。海と之に満てる物、鳴り轟け。一二　田畑とその中にあるすべての物、喜び躍れ。その時森の諸々の樹木も、一三　主の御前に喜ばん、そは彼来り給えばなり。彼地を治めんとて来り給えばなり。彼は地球

を正義もて、民を信実もて治め給わん。

第九十六篇（第九十七篇）

王たる主の御栄え

一 主ぞ統治し給う、地は喜び、多くの島々は楽しめかし。 二 雲と闇と彼を囲繞り、義と
権とその王座の基たり。 三 火その御前に先立ち進み、周囲の敵を焚き尽す。 四 その電光
は世界を照らす。地之を見て震い戦く。 五 山々も主の御前、全地も主君の御前にては、
蝋の如く融け去るなり。 六 諸天はその正義を告げ、すべての民はその栄光を見る。 七 彫
める像を崇むる者、また偶像を誇りとする者は、皆滅ぶ。諸々の神は主の御前に平伏す。
八 シオンは聞きて悦ぶ、主よ、汝の審判ゆえに、ユダの市々は雀躍す。 九 主よ、実に汝
は全地の上にありて高く、諸々の神の間にありて最高く抽で給う。 一〇 主は悪を憎む人々
を愛し、その聖者等の霊魂を護り、之を悪しき者共の手より救い出し給う。 一一 義しき者
には光明、心の直き者には喜悦生ず。 一二 汝等義しき者よ、主によりて喜び、その聖なる
御名を讃め称えよ。

第九十七篇（第九十八篇）

主に新しき歌を

一 詩なり。

二 主に向かいて新しき歌を唱え、其は彼奇しき御業をなし給いたればなり。その御右手、
その聖なる御腕、彼に勝利を齎せり。

三 主はその救拯を知らしめ給えり、その義を異邦
人等の眼前に顯し給えり。

四 彼はその仁慈と信実とを思い出でて、イスラエルの家を恵
み給えり。地の果も皆我等の天主の救拯を見たり。

五 全地よ、主に向かいて歓喜の声を
挙げよ、喜び楽しみて楽を奏でよ。

六 小琴執り、主に向かいて奏で歌え、小琴執り、琴弾
き鳴らし、

七 喇叭を執り角笛を吹き、王たる主の御眼前にて歓喜の声を挙げよ。

八 鳴り
轟け、海と之に満てる物、地球とその中に住める物。

九 河川は手を拍て、山々も共に喜
び躍れ、主の御前にて然せよ、そは彼来り給えばなり、地を治めんとて来り給えばな
り。彼は地球を正義もて、民を公平もて、治め給わん。

第九十八篇　（第九十九篇）

主は聖なる王

一　主統治し給う、民等震慄く。彼智天使の上に坐し給う、地揺ぎ動く。二　主はシオンにありて偉大に、諸々の民の上に高く在し給う。三　彼等は汝の偉大にして畏るべき御名を頌えよかし。そは聖なるかな。四　審判を好み給う力ある者ぞ統治す。汝は直き事を確く立て、ヤコブの中に、義と権とを執行い給う。五　汝等主我等の天主を頌え、その足台の許に額ずき奉れ。そは聖なるかな。六　その司祭等の中にモイゼ及びアーロンあり、またその御名を呼ぶ者の中にサムエルあり。彼等主を呼び奉りしに、彼之に応え給えり。七　彼雲の柱の中に在して彼等に語り給えり、彼等御誡命と、その彼等に授け給える掟とを聴きぬ。八　主よ、我等の天主よ、汝は彼等に応え給えり、天主よ、汝は彼等に愛顧を賜えり、されど彼等に不正をなす者には仇を復し給えり。九　汝等主我等の天主を頌え、その聖なる山にて額ずき奉れ。実に主我等の天主は聖にて在すなり。

第九十九篇　（第百篇）

聖殿に入りつつ

一　讃美の為の詩。

二　すべての国よ、主に向かいて喜び叫べ、
三　楽しみつつ主に事え、雀躍しつつその御眼前に入れ。
四　汝等主の天主にて在すことを知れ、彼我等を創造り給いたれば、我等は彼の有、彼の民にして、その牧場の羊なり。
五　讃め称えつつその門に、讃め歌いつつその庭に入れ。彼を頌え、その御名を讃めよ。
その信実は千代万代に存すればなり。実に主は仁慈深く在して、その憐憫は永遠に、

第百篇　（第百一篇）

支配者の決心

一　ダヴィドの詩。
我愛顧と正義とを謳歌わん、主よ、汝に向かいて琴かき鳴らさん。
二　我は汚玷なき道に踏み入らん。汝いつわが許に来らんとし給うや。我わが心の宰なきままにわが家の中を

三　歩まん。三我は義しからぬ事を、わが眼の前に置かじ。我は邪曲をなす者に憎悪を抱く。
四　彼は我に着かざらん。四曲れる心は我より遠く離るべし。悪しき事は我之を知らんとも
五　せず。五己が近き者を秘に誹る者は、我之を亡ぼさん。眼高ぶり、心傲れる者は、我之
六　を容赦さじ。六わが眼は国の忠実なる者を顧みて、之をわが許に住ましめん。汚玷なき
七　道を歩む者、彼は我に事うべし。七詐欺をなす者は、わが家に住むべからず、虚偽を云
八　う者はわが眼の前に立つべからず。八我は日毎国の罪人を悉く亡ぼし、すべて悪を行う
　　者を主の都より絶やし尽さん。

第百一篇（第百二篇）

いたく悩める者の悲嘆と祈禱

一　一弱り果てて、己が憂悶を主の御前に披瀝する、悩める者の祈願。
二　二主よ、わが祈祷を聴容れ給え、わが叫喚を御許に至らしめ給え。
三　三わが煩悶の日に当りて、我に御面を隠し給うなかれ。我に御耳を傾け給え。わが汝を呼び奉る時、速かに
四　我に応え給え。四実にわが日は煙の如く消え、わが骨は火の如く燃ゆ。五わが心草の如

く焦けて枯れ、我はわがパンを食することをだに忘れ果つ。六わが呻吟の激しきにより
て、わが骨わが皮にぞ着く。七我は荒野のペリカンの如く、さながら廃墟におる梟の如
くなれり。八我眠りもやらず嘆息し、屋根にただ孤おる鳥の如し。九わが敵は絶えず我
を嘲り、我に向かいて猛り狂う者、わが名を呪う。一〇実に我はパンの如く灰を食し、わ
が飲物に涙を混う、一一是、汝の御憤恚と御激怒との為、汝が我を持上げて投げつけ給え
る故なり。一二わが齢は夕影の長く引きたるが如し、我は草の如く枯れ行く。一三されど主
よ、汝は永久に存え給い、その御名は万代に亘りて存す。一四汝起ちてシオンに愛顧を賜
え。其は今こそ汝の之を憐み給うべき時なるに由りて、その期既に至れるに由りてなり。
一五実に汝の下僕等はその石を愛し、その荒廃の址を悼む。一六主よ、異邦人等が汝の御名
を、地の諸々の王等が汝の御栄光を、畏るるに至らんは、一七主がシオンを建て直し、御
栄光を佩びて現れ、一八乏しき者の祈祷を迎え、その祈祷を斥け給わざらん時なり。一九来
るべき代の為に是等の事を録して、創造らるべき民に、挙りて主を讃美せしむべし。
二〇実に主はその高き聖所より顧み、天より地を望見給えり、二一そは捕虜等の呻吟を聴

二二　きて、死に定められたる者を解放ち給わん為、二三主の御名のシオンに、その讃美のイェ
二三　ルサレムに、云い広められん為にして、二三その時諸民諸国、相集まりて主に事え奉らん。
二四　彼は途にてわが力を尽きしめ、わが齢を切り縮め給えり。二五我の曰く、わが天主よ、
　　わが生くべき日数の半にて我を取り去り給うなかれ、汝の年は万代に亘りて続くものを。
二六　二六汝原始に地を据え給えり、また天も汝の御手の業なり。二七是等は亡びん、されど汝は
二七　恒に存え給わん。なべては着物の如く古びん、汝之を衣服の如く更え給うに、是等は変
二八　るなり。二八されど汝は同一に在し、汝の年齢には終なし。二九汝の下僕等の子等は憂なく
二八　住わん、その裔は汝の御前に永く続かん。

第百二篇（第百三篇）

天主の御憐憫の讃美

一　一ダヴィドの作。
二　わが魂よ、主を讃めよ。わが衷なるものよ、みなその聖なる御名を讃めよ。二わが魂よ、
三　主を讃めよ、そのすべての御恩恵を忘るるなかれ。三彼は汝の過失を悉く赦し給う、彼

四 は汝の弱所を悉く癒し給う、
五 彼は汝の人生を善き物に飽かせ給う。汝の若さ新たに帰り来りて
六 鷲の如くなり。六主は義の業を行い、すべて虐げらるる者の為に義を行い給う。七彼は
八 己が道をモイゼに、己が業をイスラエルの子等に、知らせ給えり。八主は憐憫に満ち情
九 深くして、怒るに遅く、極めて寛仁に在す。九いつまでも争い給うことなく、永久に怒
一〇 り給うことなし。一〇我等の罪に従いて我等を扱い給わず、我等の過失に従いて我等に報
一一 い給わず。一一実に彼を畏れ奉る者に対するその御憐憫の大いなるは、天の地を高く抽ん
一二 でたるが如し。一二その我等の愆を我等より遠く取除け給うは、東の西より隔たれるほど
一三 なり。一三主の己を畏るる者を憐み給うことは、父がその子を憐む如し。一四蓋は彼我等の
一五 誰に創造られし者なるかを知り、我等の塵なることを憶い給えばなり。一五人の齢は草に
一六 等しく、その栄ゆるは野の花の如し。一六風纔に之を撫でて過ぐるや、忽ち失せて跡を留
一七 めず、その在りし処すら最早彼を知らざるなり。一七然れども主の憐憫は永遠より永遠に
一八 至るまで、彼を畏るる者に及び、その正義は子等の子等に及び、一八その契約を守り、そ

一九　の命令を果さんと心がくる者に及ぶ。一九主はその玉座を天に置き給えり、その王権は万
二〇　物を治む。二〇主を讃めよ、その諸々の天使、その御言に従わんとて御命令を行う汝等猛
二一　き勇士よ、二一主を讃めよ、その万軍よ、汝等御旨を行うその下僕等よ。二二主を讃めよ、
二二　その諸々の御作よ、その大権の下なるすべての所に於いて然せよ。わが魂よ、汝主を讃
　　めよ。

第百三篇

自然界の讃美

（第百四篇）

一　一わが魂よ、主を讃めよ。主よ、わが天主よ、汝はいと偉大にて在す。汝は稜威と美麗
二三　と を着、二光を袍の如く纏い、天を天蓋の如く張り、三己が部屋を水の上に築き給えり。
四　汝雲を己が戦車となし、風の翼に乗りて往来し、四風を己が使者となし、燃え立つ火を
五　己が下僕となし給う。五汝地をその基底の上に据え給えり、そは世々の世々に至るまで
六　揺ぐことなからん。六汝大洋を衣服の如くにして之を覆い給いぬ、水山々の上に湛えた
七　り。七そは汝の叱咤に逃げ去り、汝の雷霆に震慄けり。八山々は上り、谷々は下れり、
八

九 汝がその為に定め給いし処に。汝はその越ゆべからざる境界を設け給えり、是、その
一〇 再び地を覆うことのなからん為なり。一〇汝泉に命じて、小川となりて流れ下らしめ給
一一 うに、そは山々の間を奔りて、一一野の諸々の獣に飲水を与う。野驢馬もその渇を癒し、
一二一三 天の鳥もその辺に住みて、梢の間より声を出す。一三汝已が部屋より山々に灌漑ぎ給う、
一四 地は汝の御作の実に飽けり。一四汝家畜の為に草を、人の用に蔬菜を、生えしめ給う。さ
一五 れば彼地よりパンを取り、一五人の心を楽しましむべき葡萄酒を取り、油もてその面を晴
一六 れやかならしむべく、パンは人の心を引立つべし。一六主の樹木は、その植え給えるリバノ
一七一八 ンの杉は、飽き足る。一七小鳥は其処に巣を置く、樅樹は鶴の家なり。一八高き山々は野山
一九 羊に、岩々は雀に、避難所を与う。一九汝は時の印にと月を造り給えり、日はその沒むを
二〇 知れり。二〇汝闇を造り給いて夜となる時、森の獣は皆徘徊い歩く。二一若き獅子は獲物を
二二 欲みて咆え、天主より餌食を乞い求む。二二彼等は日出ずるや、退きてその臥処に臥す。
二三二四 二三人は出でて夕まで、その仕事に、その労働に従う。二四主よ、汝の御作は如何に多きか
二五 な、そは皆汝が御智慧もて作り給いしなり。地は汝の造り給える物にて満ちたり。二五視

二六 よ、海の大いにして広く開けたるを。其処には爬虫類数知れず、生物の小なるも大なる
二七 もあり。二六船舶其処を通りて往来し、汝の作り給いし鰐その中に遊ぶ。二七皆汝に、その
二八 時に適う食物を己等に賜わんことを待望む。二八彼等は汝の己に賜う物を集む。汝御手を
二九 開き給うや、彼等善き物に満たさる。二九汝御面を隠し給えば、彼等狼狽え、汝その気息
三〇 を取去り給えば、彼等死して塵に帰る。三〇汝霊を遣し給えば、彼等創造られ、かくて
三一 汝地の面を新にし給う。三一願わくは主の御栄光世々にあらんことを、主その御作を悦び
三二 給わんことを、三二彼地を顧み給えば、そは震慄き、彼山々に触れ給えば、そは煙を吐
三三 く。三三我生ける間は主に歌わん、存うる限はわが天主に楽を奏でん。三四願わくはわが申
三四 し言の彼に悦ばれんことを。我は主によりて楽しまん。三五罪人は地より取去られ、不敬
三五 なる者は最早あらずなるべし。わが魂よ、主を讃めよ。アレルヤ。

第百四篇　（第百五篇）

御導きに対する感謝

一 一主を頌え、その御名を讃めそやし、異邦人等の中にその御業を知らしめよ。二彼に歌

三 い、彼に楽をかなで、その諸々の奇しき御業を物語れ。 三 その聖なる御名を誇れ、主を
四 求むる者の心は楽しむべし。 四 主とその御能力とを思いめぐらせ、常にその御面を求め
五 よ。 五 その為し給える奇しき御業と、不思議と、その御国の審判とを記憶せよ、 六 アブ
六 ラハムの裔よ、汝等彼に事え奉る者よ、ヤコブの子等よ、汝等彼に選まれし者よ。 七 主
七 こそ我等の天主なれ。その御審判は全地に行わるべきものなり。 八 彼はその契約、その
八 幾千代かけて取極め給いし約束を、永久に記憶し給う、 九 そはアブラハムと結び給いし
九 契約、またイサークに与え給いし誓にして、 一〇 之をヤコブの為に固き捉として、イスラ
一〇 エルの為に永久の契約として、定め、 一一 曰えらく、「我汝等の嗣産の分として、カナアン
一一 の地を汝に与えん。」と。 一二 彼等なお数少く、いと僅かにして、かの地に客たり、 一三 異
一二 邦より異邦へ、この国よりかの民へと移り行きし時、 一四 彼何人にも彼等を虐ぐることを
一三 許し給わず、彼等の為に王等を懲戒め給えり、 一五 「わが受膏者に触るるなかれ、またわ
一四 が預言者等に害を加うるなかれ。」と。 一六 彼また地上に饑饉を呼び下し、支えのパンを
一五 悉く取去り給いぬ。 一七 彼は彼等の前に一人の人を遣し給えり。ヨゼフが売られて奴隷
一六
一七

一八 の身となりしなり。一八彼等は彼の足に足械を嵌めたり、その頸は鉄鎖もて繋がれたり。
一九 かくてあること、その預言成就し、主の御言彼を善しとし給う時までなりき。二〇王は
二一 人を遣して之を解き、民の君は之を放ち、二一之を立ててその家を治むる者、そのすべて
二二 の所有物を管理る者となしたれば、二二彼は己が意のままにその諸侯を諭し、その長老等
二三 に智慧を教うるを得たり。二三時にイスラエルはエジプトに入りしが、ヤコブはカムの地
二四 に客たりき。二四さるほどに主はその民を大いに殖やし、之をその敵よりも強からしめ給
二五 いぬ。二五やがて彼敵の心を変えて、己が民を憎ましめ、己が下僕等を欺瞞もて扱わしめ
二六 給えり。二六その時主その下僕モイゼと、その選び給えるアーロンとを遣し給いぬ。二七彼
二七 等乃ち彼等の中にて主の徴を、カムの地にて奇蹟を行えり。二八主闇を遣し給いしかば、
二八 いと暗くなりしが、彼等はその御言に抗いたりき。二九主彼等の水を血に変えて、その魚
二九 を殺し給えり。三〇彼等の国には蛙湧き出でて、その王の奥室にまで及びぬ。三一主曰いし
三〇 に、蠅の群来り、蚊四方の境に入り来れり。三二主彼等に雨の代りとして雹を、その国中
三一 に燃え上る火を下し、三三彼等の葡萄の樹と無花果の樹とを滅ぼし、その境界の中なる樹
三二
三三

三四 三五 木を打砕き給いぬ。三四 また曰いしに、蝗と根切虫と数知れず来り、三五 彼等の国の中なる
三六 草を悉く喰い尽し、又その畑の作物を喰い尽せり。三六 主なおも彼等の国の中なるすべて
三七 の初生を、彼等のすべての力の初穂を撃ち給いぬ。三七 しかして彼等に白銀黄金を携えし
三八 め、之を導き出し給いけるが、その族の中に病弱なる者あらざりき。三八 エジプト人等
三九 は彼等の出発てるを悦びたり、其は彼等を恐るる念彼等を襲いたればなり。三九 主は覆布
四〇 として雲を、夜は照らさん為に火を、展べ給えり。四〇 彼等請い求めしに、主鶉を来らし
四一 め、また彼等を天のパンに飽かしめ給いぬ。四一 主巖を割き給いしに、水迸り出で、荒
四二 野の中を河の如く流れたり。四二 そは彼襲にその下僕アブラハムに賜いし聖なる御言を、
四三 御心に留め給いしに由るなり。四三 彼かく導きて、その民を喜びつつ、その選び給いし者
四四 を雀躍しつつ、出でしめ給えり。四四 しかして彼等に異邦人等の地を賜いしかば、彼等民
四五 等の資財を獲たり、四五 そは彼等が主の掟を守り、その法に遵わん為なりき。アレルヤ。

第百五篇（第百六篇）

忘恩の民に対する主の御憐み

一 主を頌えよや、彼慈しみ深く在せば、その御憐憫は永遠なれば。 二 誰か主の大能の業を説明すを得んや、その讃むべき事を悉く語り尽すを得んや。 三 幸福なるかな、掟を守り、いつの時にも義しきをなす者。 四 主よ、汝の民に対する御好意ゆえに、我を忘れず、御祐助もて我を訪れ給え、 五 さらば我汝の選び給いし者の至福を楽しみ、汝の民の歓喜を喜び、汝の嗣産と共に誇るを得ん。 六 我等は我等の父祖の如く罪を犯し、不義をなし不敬を行えり。 七 我等の父祖はエジプトにありて、汝の奇しき御業を思いめぐらさず、汝の恩恵の夥しきを心に留めず、紅海の辺にて至高者に逆らい奉りぬ。 八 然るに彼はその大能を示さんとて、その御名の為に彼等を救い給えり。 九 しかして紅海を叱咤し給いしに、そは乾きたれば、彼等を導きて、荒野の中を通る如く波涛の中を通らしめ、 一〇 彼等を憎む者の手より救い、之を敵の手より放ち給いぬ。 一一 時に水彼等の仇を覆いて、その一人だに生残らざりき。 一二 是に於て彼等その御言を信じ、その讃美を歌えり。 一三 彼等

一四 はやがてその御業を忘れ、その御計らいに頼らずなり、一四荒野にて慾望に駆られ、その
一五 寂しき境にて天主を試みたり。一五彼乃ち彼等の願いを容れ給いしかど、彼等に悪疫を遣
一六 一七 り給いぬ。一六彼等陣中にてモイゼを、また主の聖なる者アーロンを嫉妬ければ、一七地開
一八 けてダタンを呑み、アビロンの一味を覆い、一八なお火その一味の中に燃え出でて、焔悪
一九 しき者等を焼き尽せり。一九彼等はホレブにて犢を作り、黄金もて鑄たる偶像を拝み、
二〇 二一 二〇かくて草喰む牡牛の肖像もて、己が光栄に更え、二一己を救い給いし天主を忘れたり、
二二 即ちエジプトにて徴をなし、二二カムの地にて奇蹟を、紅海の辺にて愕くべき事をなし給
二三 える者を。二三されば彼は彼等を亡ぼし去らんと思い給いしが、ただその選み給いしモイ
ゼの彼に執成したるにより、その御忿怒を飜して、彼等を亡ぼし給うことなからしむる
二四 二五 を得しなり。二四しかも彼等は望ましき地を蔑み、御言を信ぜず、二五その幕屋にて呟き、
二六 主に聴き従わざりき。二六是に於て彼御手を挙げて彼等に誓い、荒野にて彼等を打伏せ、
二七 二八 二七その裔を異邦人等の間に追散らし、之を国々に散在せしめんとし給えり。二八彼等はな
二九 おもベールフェゴルに着きて、死せる神々の供物を食いぬ。二九かくその悪行もて彼を怒

三〇 らせ奉りたれば、災厄彼等を襲えり。三〇然るにフィネエス起ちて裁き、災厄やみにき。
三一 三二 この事万代を経て永久に至るまで、功績として彼に帰せられたり。三二彼等またメリバ
三三 の水の辺にて、彼を怒らせ奉り、彼等ゆえに禍モイゼに及べり。三三其は彼等彼の気に逆
三四 らいしにより、彼その唇もて軽々しく語りたればなり。三四彼等は主の己等に命じ給いし
三五 三六 如く、異邦人等を滅ぼさずして、三五異邦人等と混り、その所行にならい、三六その彫像を
三七 崇めけるが、是は彼等にとりて罠となれり。三七しかして彼等は己が息子娘等を悪鬼に捧
三八 げたり。三八かくて彼等罪なき血を、カナアンの彫像に捧げしその息子娘等の血を流しぬ。
三九 よりて国は血に穢されたり、三九また彼等は己が所行に穢され、その悪行もて姦淫を犯せ
四〇 り。四〇是に於て主の御忿怒その民に向かいて燃え、彼その嗣産を厭いて、四一彼等を異邦
四一 人等の手に付し給いしかば、彼等を憎む者等之に権力を揮い、四二彼等の敵之を悩まし、
四二 彼等その手の下に圧迫せられたり。四三主は幾度も彼等を救い給いたれど、彼等はその謀
四三 る所によりて之に逆らい奉りしかば、己が不義ゆえに打伏せられぬ。四四されど主は彼等
四四 の祈祷を聞くや、その患難を顧み、四五御慈しみにより彼等の為にその契約を思い出で、
四五

四六 御憐憫の豊かなるに由りて悔い給い、四六彼等をして、之を捕虜として引き行きしすべて
四七 の者等より、憐憫を受けしめ給えり。四七主よ、我等の天主よ、我等を救いて、我等を国
々の民の間より集め給え、これ我等が汝の聖なる御名を頌えて、汝を讃むることを誇ら
四八 んためなり。四八イスラエルの天主なる主は、世々より世々に至るまで祝せられさせ給え。
されば民挙りて云えかし、アメン、アメン、アレルヤ、と。

第百六篇

（第百七篇）

試みより救われし感謝

一 主を頌えよや、彼慈しみ深く在せば、その御憐憫は永久なれば。二主に贖われたる者
は然云うべし。三主之を敵の手より贖い、之を国々より、東西より北南より、集め給い
四五 ぬ。四彼等は荒野を、寂しき処を、彷徨い、住むべき市に至る道を見出さざりき。五飢え
六 且渇きて、彼等の生命その衷にて衰えにけり。六よりて彼等その困窮の中にて主に叫び
七 しに、彼之をその患難より救い出し、七彼等が住むべき市に行き得るよう、之を直き途
八 に導き給えり。八されば彼等主に、その御憐憫を、またその人の子等に対する奇しき御

九　業を感謝せよかし。九そは彼饑じき霊魂を飽かしめ、飢えたる霊魂に善き物を満たし給
一〇　いたればなり。一〇彼等は暗闇と蔭との中に、不幸と鉄鎖とに繋がれて坐せり。二是、主
一二　の御言に叛き、至高者の御旨を蔑みたるに由るなり。一二されば彼労苦もて彼等の心を挫
一三　き給えり、彼等蹣跚きしが、助くる者なかりき。一三よりて彼等その困窮の中にて主に叫
一四　びしに、彼之をその患難より遁れしめ、一四暗闇より蔭より彼等を導き出し、その絆を断
一五　ち給いぬ。一五されば彼等主に、その御憐憫を、またその人の子等に対する奇しき御業を
一六　一七　感謝せよかし。一六其は彼青銅の門を毀ち、鉄の閂を砕き給いたればなり。一七彼等は己
一八　が不義ゆえに患い、己が慾ゆえに悩みたりき。一八その魂はあらゆる食物を厭い、彼等死
一九　の門に近づきたり。一九よりて彼等その困窮の中にて主に叫びしに、彼之をその患難より
二〇　遁れしめ、二〇御言を遣して、彼等を癒し、之を滅亡より救い出し給えり。二一されば彼等
二二　主に、その御憐憫を、またその人の子等に対する奇しき御業を、感謝せよかし。二二讃美
二三　の犠牲を献げ、歓び叫びてその御業を語れかし。二三船にて海に下り、大洋にて生業を営
二四　二五　まんとする者等、二四彼等は主の御業と、海におけるその奇蹟とを見たり。二五主曰いて烈

二六 しき風を起し給えば、そは大涛を高く上げ、二六こは上るや天に至り、下るや奈落の底に
二七 至り、その災難に彼等の魂消えたり。二七彼等酔漢の如く蹌踉い蹣跚き、その熟練も全く
二八 用をなさざりき。二八よりて彼等その困窮の中にて主に叫びしに、彼之をその患難より引
二九 三〇 き出し、二九暴風を鎮めて微風となし給いしかば、海の波も静まれり。三〇彼等乃ちその静
三一 かなるを悦びしが、主彼等を希望める港に導き給いぬ。三一されば彼等主に、その御憐憫
三二 を、またその人の子等に対する奇しき御業を、感謝せよかし。三二しかして民の集える所に
三三 て彼を頌え、長老等の坐せる所にて彼を讃めよかし。三三主は河を荒野に、泉を乾ける地
三四 に変え、三四穣豊かなる地を、そこに住める民の意悪しきに由りて、塩原に変え給えり。
三五 三六 三五彼また荒野を湖水に、乾ける地を泉に変え、三六飢えたる者を其処に置き給いしかば、
三七 彼等住むべき市を建て、三七畑に種蒔、葡萄畑に植附して、その実の生りたるを收穫れた
三八 り。三八彼また彼等を祝し給いければ、彼等甚だ多くなれり。なお家畜をも少からず彼等
三九 に与え給いぬ。三九されど悪しき者の虐待と患難とに由りて、彼等少くなり、且気挫けた
四〇 四一 り。四〇然るに諸侯に軽侮を注ぎ、道なき荒野を彷徨わしめ給う者、四一乏しき者を悲惨の

四二 中より挙げて、数多の家族を羊群の如くなし給えり。四三 直き者は見て悦ぶ、悪意はすべてその口を閉ず。四四 賢くして、是等の事を守り、主の御憐憫をよく思いめぐらす者は誰ぞや。

第百七篇（第百八篇）

イスラエルに対する天主の御祈助

一 ダヴィドの頌歌。

二 わが心は固し、天主よ、わが心は固し、我歌い奉らん、奏で奉らん。三 覚めよ、わが魂。覚めよ、琴と小琴よ、我曙を呼び起さん。四 主よ、我は民等の中にて汝を讃め、国人等の中にて汝に奏で謳わん、五 そは汝の御憐憫は大いにして天にまで及び、汝の信実は雲にまで及べばなり。六 天主よ、諸天よりも高く現れ給え。全地の上に御栄光あれ。七 汝の愛で給う者の救わるるを得ん為に、汝の御右手もて助け、我等に応え給え。八 天主その聖所にて曰えり、「我喜び躍らん、我シケムを分ち、スコトの谷を測量らん。九 ガラードの地はわが有、マナッセの地はわが有なり、エフライムはわが頭の兜、ユダ

はわが笏なり。一〇モアブはわが浴みの盥なり、我エドムにはわが沓を置く、フイリスト人には凱歌を挙げん。」と。一一堅備ある市の中に我を導くべきは誰ぞ。エドムにまでも我を導くべきは誰ぞ。一二天主よ、我等を斥け給いし汝に非ずや。天主よ、汝今我等の軍と共に出征かんとはし給わざるか。一三我等に御祐助を賜いて敵に抵らしめ給え、人の援助は空しければなり。一四天主によりて我等雄々しく振舞わん、さらば彼我等の敵を蹂躙り給わん。

第百八篇（第百九篇）

不義なる敵と不信なる輩とに対して

一歌隊長に歌わしめたるダヴィドの詩。

一天主よ、わが誉よ、默し給うなかれ、二そは彼等我に向かいて不敬なる欺瞞の口を開きたればなり。彼等は虚偽の舌もて我と語り、三憎悪の言もて我を囲み、故なく我を攻めたり。四彼等はわが愛に報いるに、我を非難せり。されど我は祈りぬ。五彼等は悪もてわが善に、憎悪もてわが愛に報いたり。六彼に仇なす不敬なる者を起し給え、訴うる者

七 その右に立て。 八 彼裁かるる時に罪せられて出でよ。その祈祷は従労なれかし。 九 その
日数は少くなりて、他人その職を得よ。 一〇 その子等は孤兒に、その妻は寡婦になれ。
一一 その子等は所定めず流浪いて物乞し、その荒れたる家より逐い出されよ。 一二 そのすべ
ての所有物は金貸之を窺い、彼の労して得たる所は他人之を奪い取れ。 一三 誰も彼に憐憫
を示す者なく、彼の孤児等を憐む者もなかれかし。 一四 彼の後裔は断絶するに任され、彼
等の名は次の代に抹し去られよ。 一五 その父祖の愆は主に記憶せられ、その母の罪は抹さ
るることなかれ。 一六 彼等は常に主の御前にあれ、願わくはその彼等の記憶を地より絶や
し給わんことを。 一七 蓋は彼憐憫を施すことを思わずして、不幸なる人の困窮し心悩める
を迫害し、之を殺さんと図りたればなり。 一八 剰え彼は呪うことを好めり。されば彼
に至れかし。彼は祝福を欲せざりき。されば彼より離れよかし。 一九 彼は衣服の如く
呪詛を着よ、そは水の如く彼の内部に、油の如く彼の骨に入れよ。 二〇 そは彼にとりて、
身を蔽う衣服の如く、また常に佩ぶる帯の如くなれ。 二一 願わくはかかる報、我を非難す
る者、及びわが霊魂に向かいて悪しきことを云う者に、主より来らんことを。 二二 されど

二二 主よ、天主よ、汝は御名の為に我を扱い給え。汝の御憐憫は恵豊かなれば、我を救い給
二三 え。実に我は悲惨にして困窮せり、わが心はわが衷にて傷つけり。我は傾く日影の
二四 如く消え、蝗の如く逐い払わる。わが膝は断食に由りて蹣跚き、わが肉は瘠せ衰え、
二五 我は彼等の誹謗の的となれり、彼等我を見て、その頭を振る。主よ、わが天主よ、
二六 我を助け給え。汝の御憐憫に従いて我を救い給え。しかして之が汝の御手なること、
二七 主よ、汝が是等をなし給えることを、彼等に知らしめ給え。彼等は呪わば呪え、され
二八 ど汝は祝し給え。我に逆い起つ者は恥辱を得よ、されど汝の下僕等は悅べかし。我を
二九 訴うる者は汚名を着、袍によること如く己が恥辱に覆われよ。我はわが口もて大いに主を
三〇 頌え、衆くの人の只中にて之を讃めん。蓋は彼貧しき者の右に、裁判官等より之を救
三一 わんとて立ち給えばなり。

第百九篇（第百十篇）

一 ダヴィドの詩。

メシアの神性

二　主わが主に曰えらく、「汝、わが右に坐せよ、わが汝の敵を汝の足台となすまで。」
三　主は汝の権能の笏をシオンより差伸べ給わん、「汝その敵の只中に君臨せよかし。
四　主権は汝が聖き光輝を佩びて出でし日より、汝の許にあり。我、明星の出づる前に、露の如く汝を生めり。」
五　主誓い給えり、悔い給うことあらじ。「汝は永久にメルキセデクの先例に従う司祭なり。」と。
六　主は汝の右に在して、その御震怒の日に王等を蹂躙り給わん。
七　彼は国々の民を裁き、屍の山を築き給わん。広く地上にその頭を蹂躙り給わん。
七　彼は道にて流より飲み、是によりて頭を抬げ給わん。

第百十篇

（第百十一篇）

主の奇しき御業をほめ奉らん

一　アレルヤ。
二　我は義人の団欒及び聖会の中にて、心を尽し主を頌え奉らん。
三　主の御業は偉大なるかな、之を愛づる者みな考え究むべし。
四　その御業は威ありて偉大なり、その義は永久に存す。
五　彼はその奇しき御業を記憶せしめ給えり。主は憐憫に満ち、寛仁に在す。

六 は己を畏るる者に食物を賜えり。その契約を永久に記憶し給わん。六彼はその御業の力
七 を御民に顕し給えり、是、彼等に異邦人等の領地を賜わんとてなり。七その御手の業は
八 信実ありて義し。その御掟はすべて確実にして、八世々永久に至るまで揺ぎなく、堅く
九 公平に作られたるなり。九彼は御民に贖いを遣し、その契約を永久に立て給えり。その
一〇 御名は聖にして崇むべきかな。一〇主を畏るるは智慧の始なり。すべて之を崇むる者は行
う所賢し。彼の讃美は永久に存す。

第百十一篇（第百十二篇）

義人の幸福

一 一アレルヤ。
二 至福なるかな、主を畏れ、その御誡命を甚く悦ぶ人。二かかる人の裔は地にて力あらん、
三 直き者の族は祝せられん。三その家には財と富とあるべく、その愛の業は恒久に存すべ
四 し。四主は直き者に、暗闇の中の光の如くさし出で給う、寛仁にして憐憫に満ち、且義
五 しく在す者は。五憐みて貸し、己が事を正義もて処理う人には幸あり。六かかる人は永

七　久に動揺ぐことなからん。義しき者は永久に忘るることなからん。
八　恐るることあらじ。その心は主を恃みて確し。
九　て、終にその仇の滅ぼさるるを見るに至らん。
一〇　は永久に存し、その角は光栄を得て挙げらるべし。
　　行かん。罪人の望は亡び去るべし。

第百十二篇（第百十三篇）

主の御名は祝せられかし

一　アレルヤ。
二　讃めよ、主の僕等、主の御名を讃めよ。
三　日の出るよりその沒るまで、主の御名は讃むべきかな。
四　主は諸々の国民の上に高く
五　在し、その御栄光は諸天の上にあり。
六　誰か主我等の天主の如き者あらんや、彼は高処
七　に坐し、御眼を伏せて天地を顧し給うなり。
八　彼は乏しき者を塵より抱き上げ、貧しき者を糞土より起し給う、そは之を諸侯と共に、御民の諸侯と共に、位せしめんとて

九　なり。九彼は石婦を、子等の喜ばしき母として家に住まわせ給う。

第百十三篇　（第百十四篇、第百十五篇）

主に栄えあれ

一　一アレルヤ。
二　イスラエルがエジプトより、ヤコブの家が蛮民の許より出でし時、三ユダは主の聖所、
三四　イスラエルはその王国となりぬ。三海は見て逃げ去り、ヨルダンは後に退き、三山は牡
五　羊の如く、丘は小羊の如く、躍れり。五抑々何事のあればとて、海よ、汝逃げ去るぞ、
六　ヨルダンよ、汝後に退くぞ、六山よ、汝牡羊の如く、丘よ、汝小羊の如く、躍るぞ。
七八　七地よ、主の御面前にてヤコブの天主の御面前にて、震慄け、八彼こそ巌を湖水に、
九　断崖を泉水に、変え給いしなれ。
一〇　九（一）我等に非で、主よ、我等に非で、ただ汝の御名に光栄を帰し給え、汝の憐憫ゆえに、
一一　一〇（二）何ぞ異邦人等をして、「彼等の天主は何処にかある。」と云わ
汝の信実ゆえに。
一二　一一（三）我等の天主は天に在す、その欲し給う所を悉くなし給えり。
しむべけんや。

一三(四)彼等の偶像は白銀や黄金にして、人の手の作なり。
一四(五)眼あれども見ず。
一五(六)耳あれども聞かず、鼻あれども嗅がず。
一六(七)手あれども探らず、足あれども歩まず、またその咽喉より一声だに出さず。
一七(八)之を作る者、之に依頼む者はいづれも皆之に類せん。
一八(九)イスラエルの家は主に依頼む。彼は彼等の援助者にしてその楯にぞ在す。
一九(一〇)アーロンの家は主に依頼む。彼は彼等の援助者にしてその楯にぞ在す。
二〇(一一)主を畏るる者は、主に依頼む。彼は彼等の援助者にしてその楯にぞ在す。
二一(一二)主は我等を御心に留め給う、されば我等を祝し給わん。イスラエルの家を祝し、アーロンの家を祝し給わん。
二二(一三)主を畏るる者を大小ともに祝し給わん。
二三(一四)主は汝等を殖やし給わん、汝等をもまた汝等の子等をも。
二四(一五)願わくは汝等天地を創造り給いし主に、祝せられんことを。
二五(一六)天は主の天なり、されど地は彼之を人の子等に与え給えり。
二六(一七)死せる者は主を讃むることをせず、冥府に下る者は誰も
せず。
二六(一八)されど我等は主を讃め奉る、今より永久に至るまで。

一　二　三　四　五六　七　八　九　一〇

一アレルヤ。

第百十四篇（第百十六篇　上）

死の苦しみより救われし人の感謝

二我は主を愛し奉る。其はわが懇願の声を聽き給えるによりて、三わが彼を呼び奉る日に御耳を我に傾け給いしによりてなり。三死の紐我を繞り、冥府の罠我に臨み、我苦悩と悲愁とに陷りぬ。四時に我主の御名を呼び奉れり、「主よ、わが生命を救い給え。」五主は慈恵深くして義しく、我等の天主は憐憫豊かなり。六主は素直なる者を守り給う。我悲惨なりしに、彼我を救い給えり。七わが魂よ、汝の安息に帰れ、其は主汝に善をなし給いたればなり。八即ち彼はわが魂を死より、わが眼を涙より、わが足を滑り倒るるより、引放し給えり。九我は生ける者の地域にありて、主の御前に歩まん。

第百十五篇（第百十六篇　下）

感謝の歌

一〇我は「甚く悩めり」と云いし時にも、信頼し居たり。一一我恐れ戦きて云いぬ、

三　「人は皆欺瞞に満ちたり。」と。　三(一三)我は主に対し、何を以てその我に賜いし一切に報い奉らんや。

四五　四(一三)我は救拯の爵を受けて、主の御名を呼び奉らん。　五(一四)我は御民一同の前にて、主にわが誓を還さん。

六七　六(一五)主の御眼にその聖者等の死は貴し。　七(一六)あ主よ、我は汝の下僕なり、我は汝の下僕にして、汝の下婢の子なり。汝はわが絆を断ち給えり。

八九　八(一七)我は讃美の犠牲を汝に献げ、主の御名を呼び奉らん。　九(一八)我は御民一同の前にて、主にわが誓を還さん、

一〇　一〇(一九)主の家の大庭にて、イエルサレムよ、汝の只中にて、然せん。

第百十六篇　（第百十七篇）

讃美のすすめ

一　一アレルヤ。

二　万の国よ、主を讃めよ、万の民よ、彼を称えよ。　二その御憐憫は我等の上に堅くして、主の信実は限なく存すればなり。

第百十七篇　（第百十八篇）

救を得たる感謝

一　一アレルヤ。
二　主に感謝せよ、彼慈しみ深く在せば、その御憐憫は永久に存すればなり。
三　イスラエルの家は云えかし、「その御憐憫は永久に存す。」と。
四　アーロンの家も云えかし、「その御憐憫は永久に存す。」と。
五　主を畏るる者も云えかし、「その御憐憫は永久に存す。」と。
六　我患難の中より主を呼び奉りしに、主我に応えて我を救い給えり。
七　主我と共に在して、わが援助者たり、されば我
八　我は恐れず。人我に何をか為し得ん。
九　主の御許に逃避るるは、諸侯に頼るにいや優る。
一〇　諸々の国民我を囲みしが、我主の
一一　御名によりて彼等を蹂躙れり。
一二　彼等は蜂の如く我を囲み、茨の火の如く焼きしが、我主の御名に
一三　よりて彼等を蹂躙れり。我、打たれ、突かれて倒れんとしたれど、主我を助け給えり。
わが敵の滅ぼさるるを見るに至らん。
八　主の御許に逃避るるは、人に頼るにいや優り、
一〇　諸々の国民我を囲みしが、我主の
一一　御名により我を囲みしが、我主の御名に
一二　彼等を蹂躙れり。
一三　彼等は蜂の如く我を囲み、茨の火の如く焼きしが、我主の御名に
一三　よりて彼等を蹂躙れり。我、打たれ、突かれて倒れんとしたれど、主我を助け給えり。

一四 主はわが力、わが勇気にして、わが為に救済者となり給えり。一五 歓呼と救済との声は
一六 義しき者の幕屋にあり。主の御右手は雄々しく振舞えり、一六 主の御右手は我を起した
一七 り、主の御右手は雄々しく振舞えり。一七 我は死せずして、生き存えん。しかして主の御
一八 業を談らん。一八 主は我を懲らしに懲らし給えり、されど死には我を付し給わざりき。
一九 一九 わが為に義の門を開け、我それより入りて主に感謝せん。二〇 是こそ主の門なれ、義し
二一 き者は之より入るべし。二一 我汝に感謝せん、そは汝我に聴きて、わが為に救済者となり
二二 給いたればなり。二二 建つる者の棄てたる石は隅の親石とせられたり。二三 是、主の為し給
二四 いし所にして、我等の目には不思議なり。二四 是、主の設け給える日なり、我等喜び躍り
二五 て、之を楽しまん。二五 ああ主よ、救い給え、ああ主よ、栄えしめ給え。二六 主の御名によ
二七 りて来る者は祝せられよかし。我等主の家より汝等を祝す。二七 主こそ天主なれ、我等を
二八 照らし給えり。青葉繁れる枝を携え、行列を作りて祭壇の角の許にまで至れ。二八 汝こそ
二九 わが天主なれ、されば我汝に感謝し奉る。わが天主よ、我汝を讃美して崇め奉る。二九 主
に感謝せよ、彼慈しみ深く在せば、その御憐憫は永久に存すれば。

第百十八篇　（第百十九篇）

生活の規範としての天主の律法

アレフ

一　幸福なるかな、己が道の汚れざる者、主の御法を歩む者。　二　幸福なるかな、その御掟を守り、心を尽して彼を求むる者、　三　不義を行わずして、彼の道を歩む者。　四　汝は厳しく守らしめんとて御掟を与え給えり。　五　ああ、わが道確く定まりて、汝の御定めを守るに至らんこそ望ましけれ。　六　我、汝のあらゆる御誡命に意を注ぐその時は、破滅に至ることあらじ。　七　我汝の義しき御規定を学びたる時は、直き心もて汝を頌えん。　八　我は汝の御定めを守らん。我を全くは棄て去り給うことなかれ。

ベト

九　若人は如何にしてその道を潔く保たんや。汝の御言を守るによりてこそ。　一〇　我わが心を尽して汝を求め奉る。汝の御誡命を離れて我の彷徨うを容し給わざれ。　一一　我は汝の曰いし事をわが心に蔵め、汝に対して罪を犯さざらんことを期す。　一二　主よ、汝は讃むべ

一三 きかな、汝の御定めを我に教え給え。一四 我わが唇もて、汝の御口の御規定を悉く宣伝えん。一五 我は汝の御命令の道を、諸々の財の如くに悅ぶ。一六 我は汝の御定めを悅び、汝の御言を忘れざらん。一六 我は汝の道に眼を注がん。

ギメル

一七 汝の下僕を懇に扱い給え、さらば我生存うるを得て汝の御言を守らん。一八 わが眼を開き給え、さらば我汝の御法の奇しきを眺むるを得ん。一九 我は地上に客たる者なり、我に汝の御誡命を隠し給うなかれ。二〇 わが霊魂、いつの時にも汝の御定めに憬れて、憔れ衰う。二一 汝は高ぶる者を責め給えり。汝の御誡命より離るる者は呪われたるかな。二二 我より誹毀と侮蔑とを取除き給え、そは我汝の御掟を守ればなり。二三 よしや諸侯坐して我に敵い語るとも、汝の下僕は御定めを思い廻らす。二四 蓋は汝の御掟はわが悅び、汝の御定めはわが顧問なればなり。

ダレト

二五 わが魂は塵に伏せり、汝の御言に従いて我に生命を返し授け給え。二六 我わが道を云い

二七 あらわしたれば、汝我に応え給えり。汝の御定めを我に教え給え。
二八 に知らしめ給え、さらば我汝の奇しき御業を思い廻らさん。
二九 を流す。汝の御言に従いて我を励まし給え。
三〇 我に恵み給え。
三一 我は真理の道を選めり、汝の御規定をわが前に置けり。
三二 捉に愛着す、主よ、我を滅亡に至らしめ給うなかれ。
三三 我汝の御誡命の道を走らん。
三四 主よ、汝の御定めの道を我に示し給え、さらば我厳密に之を守らん。
三五 これ、我が汝の御法を奉じ、わが心を尽して之を守らんためなり。
三六 径によりて導き給え、其は我之を悦べばなり。
三七 傾けしめ給え。
三八 わが眼を逸して空しき事を見ざらしめ給え、汝の道によりて我に生命を与え給え。
三九 汝を畏るる者等に賜わりたる御約束を、汝の下僕に果し給え。
四〇 わが恐るる恥辱を取り除き給え、其は汝の御規定は楽しければなり。
視給え、我汝の御捉を

思い慕う。汝の公義に従いて我に生命を与え給え。

ワ　フ

四一 また主よ、わが上に、汝の御約束に従いて汝の御憐憫を、汝の御祐助を来らしめ給え。

四二 さらば我を誹る者に我答えん。そは我汝の御言を恃むに由りてなり。四三 わが口より真理の言を取除き給うなかれ、そは我汝の御規定を恃むによりてなり。四四 我は世々永久に絶えせず汝の御法を守らん。四五 我は広き道を歩まん、そは我汝の御掟を探ぬればなり。四六 我また王等の眼前にて汝の御掟に就きて語らん、恥辱を蒙ることあらじ。四七 我汝の御誡命によりて楽しまん、我はそを好むなり。四八 我は汝の御誡命に向かいてわが手を挙げ、汝の御掟を思い廻らさん。

ザ　イ　ン

四九 汝の下僕に仰せし御言を忘れ給わざれ、汝之によりて我に希望を与え給えり。五〇 是はわが患難の時に当りて我を慰むるものなり、汝の曰いし事は我に生命を恵むが故なり。五一 傲る者等いたく我を嘲りぬ、されど我は汝の御法を離れざりき。五二 主よ、我は汝の

五三　古の御規定を思い出ず。そは我にとりて慰藉なり。五四　汝の御定めは、わが旅する処にて、わが為に歌となれり。五五　主よ、我憤慨我を捉う。五六　夜にも汝の御名を憶い出でて、汝の御法を守らん。五七　この事の我に成りしは、我汝の御捉を守りしに由りてなり。

ヘ　ト

五八　主よ、我は汝の御言を守ることそわが分なれと云えり。五九　我心を尽して汝の御面に願い奉る、汝の御約束に従いて我を憐み給え。六〇　我はわが道を考え査べ、終にわが足を汝の御捉に向けたり。六一　我は汝の御誡命を守るに速くして躊躇わざりき。六二　罪人の縄は我を繞れり、されど我は汝の御法を忘れざりき。六三　我汝の御規定の義しきに由り、夜半に起きて汝の讃美に当る。六四　我は凡て汝を畏れ汝の御捉を守る者の友なり。六五　主よ、汝の恩寵は地に満ちたり、汝の御定めを我に教え給え。

テ　ト

六五　主よ、汝は御言に従いて、汝の下僕を懇切に扱い給えり。六六　我汝の御誡命に信頼する

六七 により、我に判断と知識とを教え給え。六七 我悩まざりし内は、迷いたりしが、今は汝の
六八 御言を守る。六八 汝は慈しみ深くして恵を施し給う。汝の御定めを我に教え給え。六九 傲る
七〇 者は我に向かいて虚偽を企めり、されど我は心を尽して汝の御掟を守る。七〇 彼等の心は
七一 厚きこと脂肪の如し、されど我は汝の御法を悦ぶ。七一 わが悩みたるこそ、わが為に善け
七二 れ、そは我が汝の御定めを学ばんためなり。七二 汝の御口の法は、我にとりて幾千の金銀
にも優るなり。

ヨ　ド

七三 我を作り、我に形を与えしは汝の御手なり。汝の御誡命を学ばしめんために、我に教
七四 え給え。七四 汝を畏るる者は我を見て悦ぶべし、そは我汝の御言に希望を置きたればなり。
七五 主よ、我は知る、汝の御規定の義しくして、汝の我を苦しめ給いしことの義しきを。
七六 汝の下僕に与え給いし御約束に従いて、我を慰めん為に、汝の御憐憫を垂れ給え。
七七 我の生くるを得んために、汝の御憐憫を我に下し給え、汝の御法はわが悦楽なればな
七八 り。七八 傲る者は滅びよかし、そは彼等不当にも我を苦しめたればなり。されど我は汝の

七九 御掟を思い廻らさん。七九汝を畏るる者、汝の御掟に心を寄する者を、我に向かわしめ給
八〇 え。八〇わが心を汝の御定めによりて完からしめ給え、これ、我の滅ぶることなからんた
めなり。

カ　フ

八一 わが魂は汝の御祐助を望みて絶え入るばかりなり。我汝の御言に希望を置く。八二汝の
八三 御言を思慕うあまり、わが眼衰う。汝いつの時にか我を慰めんとやし給う。八三実に我は
八四 煙の中の革嚢の如くなりたれど、汝の御定めを忘れたるにあらず。八四汝の下僕の日数は
八五 幾許ぞ。汝いつの時にか我を迫害む者等に審判を行わんとやし給う。八五傲る者等我を
八六 陥れんとて穴を掘れり。彼等は汝の御法に従いて行動せず。八六汝の御誡命は悉く信実
八七 なり。彼等は不当にも我を迫害む。汝我を助け給え。八七彼等は地にて殆ど我を亡したり。
八八 されど我は汝の御掟を棄てざりき。八八汝の御憐憫に従いて我を生存えしめ終え。さらば
我汝の御口の御掟を守らん。

八九〇　ラメド

八九　主よ、汝の御言は、天の如く永久に搖ぎなし。九〇　汝の信実は代々の代々まで存す。汝
九一　地を確く据え給いたれば、そは久しきに耐う。九一　是等は汝の御定めに従いて常に存す、
九二　そはすべての物汝に事うればなり。九二　汝の御法もしわが喜悦ならざりせば、我既にわが
九三　患難の裡にて亡びたりしならんに。九三　汝の御掟は我永久に忘れじ、其は汝之によりて我
九四　に生命を賜いたればなり。九四　我は汝の有なり。我汝の御掟を探ねたれば、我を救い給え。
九五　九六　罪人等我を亡ぼさんと我を待つ。我は汝の御掟に意を留む。九六　我はすべての完全きも
のに限りあるを見たり。されど汝の御誡命は最も広し。

メム

九七　九七　主よ、わが汝の御法を好むことは抑如何ばかりぞや。そは終日わが思いめぐらすもの
九八　なり。九八　汝の御誡命は我をわが敵よりも賢からしめたり、そは常に我と共にあればなり。
九九　九九　我は我に教えしすべての者よりも分別に富む、其は汝の御掟に就きて我思いめぐらせ
一〇〇　ばなり。一〇〇　我は老いたる者よりも深く了る、其は我汝の御掟を守れればなり。一〇一　我は

一〇二 あらゆる悪しき道を避けてわが足を止む、是、汝の御言を守らんとてなり。 一〇二 我汝の
一〇三 御規定より離れず、其は汝我に教え給えばなり。 一〇三 汝の御言はわが顎に、いかばかり
一〇四 甘きぞや。そはわが口には蜜に優れり。 一〇四 我は汝の御捉によりて賢くなる、是故に不
義のあらゆる道を厭う。

ヌ ン

一〇五 汝の御言はわが足には燈、わが径には光なり。 一〇六 我は汝の義しき御規定を守らん
一〇六 と誓い且思い定む。 一〇七 主よ、我は甚く悩めり。汝の御言に従いて我を生存えしめ給え。
一〇七
一〇八 主よ、わが口の献物を受納めて、汝の御規定を我に教え給え。 一〇九 わが生命は常に
一〇八
一〇九 危うし、されど我は汝の御法を忘れず。 一一〇 罪人等は我に罠をかけたり、されど我は汝
一一〇 の御捉を離れて彷徨わざりき。 一一一 汝の御捉は永久にわが嗣産なり、其はわが心の悦楽
一一一
一一二 なればなり。 一一二 我は汝の御定めを始終厳密に果さんとて、わが心を傾けたり。

サ メ ク

一一三 我は二心の者を憎み、汝の御法を好む。 一一四 汝はわが庇護者、わが楯にぞ在す、我
一一四

一一五 は汝の御言に希望を置く。　一一六 汝等意根悪しき者よ、我を離れて去れ、我わが天主の御
一一六 誡命を守らん。　一一六 汝の御約束に従いて我を支え給え、さらば我生くべし。わが希望を
一一七 破り給うなかれ。　一一七 我を助け給え、さらば我は救わるべく、毎も汝の御定めに意を用
一一八 いん。　一一八 汝は凡て御定めを離れ去る者を棄て給えり。そは彼等の思う所虚偽なればな
一一九 り。　一一九 汝は地のすべての罪人を鉄滓の如く見做し給う、是によりて我汝の御掟を好む
一二〇 なり。　一二〇 わが肉汝を懼るるあまり戦き、我汝の御規定を恐る。

アイン

一二一 我は権と義とを行えり。我を虐ぐる者に我を付し給うなかれ。　一二二 汝の下僕の為に
一二二 保証して幸福に至らしめ給え、これ、傲る者の我を虐ぐることなからんためなり。
一二三 汝の御祐助を望み、汝の義しき御言を思慕うあまり、わが眼衰う。　一二四 汝の御慈愛
一二四 に従いて汝の下僕を扱い、汝の御定めを我に教え給え。　一二五 我は汝の下僕なり、我に教
一二五 え給え、そは我が汝の御定めを知らんためなり。　一二六 今こそ主にとりて働き給うべき時
一二六 なれ、彼等は汝の御法を破れり。　一二七 是に由りて我は金銀に優りて汝の御誡命を好むな

一二八　り。　一二八是に由りて、我わが為に汝の御掟を選べり。我は虚偽のあらゆる道を憎む。

フェ

一二九　一二九汝の御掟は妙なり、さればこそわが霊魂之を守るなれ。　一三〇汝の御言を示すは光を
一三一　与う、そは拙き者に教うる所あり。　一三一我わが口を開きて気息を吸入る、そは我汝の御
一三二　誡命を慕えばなり。　一三二わが方に向きて我を憐み給え、汝の御名を愛する者に対して常
一三三　になし給う如く。　一三三汝の御言に従いてわが歩みを導き、いかなる悪をもわが衷にはび
一三四　こらしめ給うなかれ。　一三四我を人の虐待より放ち給え、さらば我汝の御掟を守らん。
一三五　一三五汝の下僕に晴れやかなる御顔を示し、汝の御定めを我に教え給え。　一三六わが眼より
一三六　小川なす水流れ出でたり、そは人々汝の御法を守らざりしが故なり。

サ　デ

一三七　一三七主よ、汝は義しく、汝の審判は直し。　一三八汝は正義と大いなる決意もて、御掟を負
一三八　わせ給えり。　一三九わが熱心は我を消磨す、そはわが仇汝の御言を忘るればなり。　一四〇汝の
一三九　御言は極めて確実なり、されば汝の下僕は之を愛す。　一四一我は小さき者にして軽蔑せら
一四〇
一四一

一四二 るれど、汝の御掟を忘れず。 一四三 汝の義は永遠の義なり、また汝の御法は不動なり。
一四四 一四三 悩苦我に臨めども、汝の御誡命はわが悦楽なり。 一四四 汝の御掟の義しきは永久なり、我に教え給え、さらば我生くべし。

コ　フ

一四五 我わが心を尽して叫ぶ。主よ、我に応え給え。我汝の御定めを守る。 一四六 我汝に向
一四七 かいて呼わる。我を救い給え、さらば我汝の御掟を守らん。 一四七 我は黎明に来りて御祐
一四八 助を願い奉る。我は汝の御言に希望を置く。 一四八 わが眼夜警の交代時刻に先んじて覚む、
一四九 是、汝の御言を思い廻らさんとてなり。 一四九 主よ、汝の御憐憫に従いてわが声を聴き、
一五〇 汝の御規定に従いて我に生命を賜え。 一五〇 不当に我を迫害する者等近づき来る。彼等は
一五一 汝の御法を離るること遠し。 一五一 主よ、汝は近く在す、汝の御誡命は悉く信実なり。
一五二 我夙に汝の御掟よりして、汝が之を永久に定め給えることを知れり。

レ　ス

一五三 わが患難を見て我を救い出し給え、そは我汝の御法を忘れざればなり。 一五四 わが訴

一五五　訟を弁護り我を贖い給え。汝の御言に従いて我に生命を恵み給え。
一五六　るること遠し、そは彼等汝の御定めに心を労せざればなり。
一五七　いなるかな。汝の御規定に従いて我に生命を賜え。
一五八　我は汝の御捉より離れず。
一五九　の御言を守らざりしが故なり。
一六〇　従いて我を生存らえしめ給え。
　　永久なり。

シン

一六一　諸侯は故なく我を迫む。されどわが心は汝の御言を畏み奉る。
一六二　悦ぶは、さながら大いなる獲物を見出でたる者の如し。
一六三　御法を好む。
一六四　汝の義しき御規定故に、我日に七度汝を頌え奉る。
一六五　する者には大いなる平安あり、また彼等には躓跌く物なし。
一六六　を待望み、汝の御誡命を行う。
一六七　わが魂は汝の御捉を守り、甚く之を好む。
一六八　我は汝の御捉より離れず。
一六九　主よ、見給え、我は汝の御捉を好む。汝の御憐憫に
一七〇　汝の御言の基は不変なり。汝の正義の御規定は悉く

の御掟と命令とを守る、そはわが道すべて汝の御眼前にあればなり。

タ　ウ

一六九　主よ、わが叫声を汝の御許に至らしめ給え。汝の御言に従いて我に教え給え。

一七〇　わが祈祷を汝の御許に至らしめ給え。汝の御言に従いて我を救い給え。

一七一　汝その御定めを我に教え給わん時、わが唇讃歌を出せかし。

一七二　汝の御誡命は皆義しければ

一七三　わが舌汝の御言を謳えかし。

一七四　掟を選びたればなり。

一七五　願わくはわが魂の生きて汝を讃め称えんことを、また汝の御規定の我を助けんことを。

一七六　我は失せたる羊の如く彷徨う。汝の下僕を探ね給え、そは我汝の御誡命を忘れざりしに由りてなり。

聖寵と平安への憬れ

一　上京の歌。

第百十九篇　（第百二十篇）

二 我患難にあいて主に叫びしに、彼我に応え給えり。 三 主よ、わが魂を不義の唇より、欺く舌より救い給え。

三 四 欺く舌よ、汝に何をか与え、汝に何をか加えん。 四 強者の鋭き矢と、えにしだの炭火となり。 五 ああ禍なるかな、我がモソクに宿り、ケダルの天幕に住むこと。 六 わが魂、平和を憎む者等と共に住みてより、時既に久し。

五 六 七 我は平和を語るに、彼等は戦争を迫る。

第百二十篇（第百二十一篇）

忠実なる保護者

一 上京の歌。

一 我山々に向かいてわが眼を翹ぐ、救援は我に何処よりか来らん。 二 わが救援は主よりこそ、是、天地を造り給いし者なり。 三 彼は汝の足の蹣跚くを容し給わじ、汝を護る者は微睡み給わじ。 四 視よ、イスラエルを守り給う者は、微睡むことも眠ることもなからん。

五 主は汝を守り給う、汝の保護者なる主は、汝の右側に在す。 六 昼には日、また夜には月も、汝を打たじ。

七 主は汝を諸々の悪より護り給わん。 八 汝の魂を護り給わん。

八　八 主は汝の出ると入るとを護り給わん、今より世々に至るまで。

第百二十一篇　（第百二十二篇）

聖都入城の歓喜

一 ダヴィドの作りし上京の歌。
二 「我等主の家に行かん。」と、人々我に云いしかば、我喜べり。
三 イエルサレムよ、既に我等の足は、汝の門内に立てり。
四 彼処をさして支族は、主の支族は上り行く、そはイスラエルの法に従いてられたり。
五 主の御名を称えんとてなり。彼処には、審判の座設けられたり、ダヴィドの家の玉座なり。
六 汝等イエルサレムの安寧に益あることを願え、汝を愛する人々は恙なかれ。
七 汝の石垣の内は安寧なれ、汝の御殿の中には事なかれ。
八 わが兄弟、及びわが伴侶の為に、我は云わん、「汝の内に平安あれ。」と。
九 我等の天主なる主の家の為に、我汝に幸を祈らん。

第百二十二篇　（第百二十三篇）

虐げらるる者の希望

一　上京の歌。

二　我汝に向かいてわが眼を翹ぐ、天に住み給う者よ。

三　視よ、僕等の眼が、主人の手に向かうが如く、婢等の眼が、女主人の手に向かうが如く、然我等の眼も主我等の天主に向かいて、その我等を憐み給わん時を俟つなり。

四　我等を憐み給え、主よ、我等を憐み給え、そは我等いたく蔑視に飽かされたればなり。

三　我等の魂はいたく飽かされたり、豊なる者の嘲笑と、傲る者の蔑視とに。

第百二十三篇　（第百二十四篇）

主はわれらの味方

一　ダヴィドの作りし上京の歌。

二　主もし我等の方に在し給わざりせば、今イスラエルは云えかし、

三　主もし我等の方に在し給わざりせば、人々我等に逆いて起ち上りし時、

三　我等を生きながら呑みしならんに。

四　彼等の激怒の我等に対いて燃えし時、　四　水我等を沒めしならんに、激流我等の上を過ぎ
五　行きしならんに、　五　さかまく水我等の上を越え行きしならんに。　六　彼等の牙の餌食とし
六　て我等を付し給わざりし、　七　主は祝せられさせ給え。　七　我等の魂は鳥捕る者の係蹄より、
七　鳥の如く挽ぎ放されたり。係蹄は破れて、我等は放たれたり。　八　我等の救援は主の御名
八　にあり、是、天地を造り給いし者なり。

第百二十四篇　（第百二十五篇）

主の御保護

一　上京の歌。
二　主に依頼む者は、動かさるることなく永久に存する、シオンの山の如し。　二　山々はイェ
三　ルサレムを囲む、かく主も今より永久に、御民を囲み給うなり。　三　蓋し悪しき者の笏は
四　いつまでも義しき者の領分を支配することなかるべし、然らずば義しき者さえも、その
五　手を不義に伸ぶるに至らん。　四　主よ、願わくは善人と、心の直き者とを恵み給え。　五　さ
れど曲れる道に傾ける者は、悪を行う者と共に、主之を逐い払い給えかし、イスラエル

の上に平安あれ。

第百二十五篇　（第百二十六篇）

捕囚より帰りし喜び

一　上京の歌。

一　主がシオンの捕虜を導き帰り給いし時、我等は夢みる者の如くなりき。

二　その時我等の口は笑いに、我等の舌は歓喜に充満されたり。その時異邦人等の中にも云いし者あり、

三　「主彼等のために大事を為し給えり。」と。

四　主よ、我等のために大事をなし給えり、我等は楽しむ者となれり。

五　涙しつつ播く者は、喜びつつ刈取らん。

六　往く時は、彼等播くべき種子を携え、行きて嘆く、帰り来る時は、その禾束を携え、喜びつつ帰り来らん。

第百二十六篇　（第百二十七篇）

人間の労苦と天主の御祝福

一　サロモンの作りし上京の歌。

主、家を建て給うに非ずば、之を建つる者の勤労も空し。主城市を守り給うに非ずば、衛る者の夜警も徒労なり。二空しきかな、汝等の日出ずる前に起き、夜遅くまで寝ねざること、汝等労苦のパンを食する者よ、そは彼、その愛し給う者には、眠れる間に惜しみなく与え給えばなり。三視よ、子等は主の賜物なり、胎内の実は報酬なり。四若き時の子等は、武人の手にある矢の如し。五之をもて己が箙を満たす者は至福なるかな、彼等は門にて敵と諍う時も、敗るることあらざるべし。

第百二十七篇

（第百二十八篇）

天主を信ずる家庭の幸福

一上京の歌。

至福なるかな、汝、誰にもあれ主を畏るる者、その道を歩む者。二蓋は汝、己が手を労して得たる物を食すべければなり。汝は至福にして、仕合せ善かるべし。三汝の妻は汝の家の奥に在りて、多くの実を結ぶ葡萄樹の如く、汝の子等は汝の食卓の周囲に在りて、橄欖の若樹の如くならん。四視よ、主を畏るる者は、かく祝せらるべし。五願わくは主

シオンより汝を祝し給え、これ、汝の生くる日の限り、イエルサレムの繁栄を見ん為、
汝の子等の子等を見ん為なり。イスラエルの上に平安あれ。

過去を偲びて希望を抱く

第百二十八篇　（第百二十九篇）

一　上京の歌。

二　彼等はわが若き時より、いたく我を攻め悩ましたり、今イスラエルは云うべし、

三　はわが若き時より、大いに我を攻め悩ましたり、されど我に勝利を得ざりき、と。

四　耕す者はわが背の上を耕し、その溝を長くしたり。

五　然れども主は義しくして、悪しき者の繩を断ち給う。

六　シオンを憎む輩は皆、恥辱を得て退き去れかし。

七　彼等は抜かざる内に枯るる、屋根の草の如くなれかし。

八　之は刈る者もその手に充たさず、束ぬる者もその懐に満たさず。また道行く人も云わざるなり、「汝等の上に主の祝福あれ。」

「我等主の御名に由りて汝等を祝す。」と。

第百二十九篇　（第百三十篇）

悔悛の歌

一　上京の歌。

一　主よ、我深き淵より汝に叫び奉る、　二　主よ、わが声を聴き給え。願わくはわが願いの声に、御耳を傾け給え。　三　主よ、汝もし愆を御心に留め給わば、主よ、誰か能く立つことを得ん。　四　されど汝には罪の赦免あり、そは汝畏み事えられ給わんためなり。　五　我は主に希望を置き、わが魂はその御言を恃となす。　六　わが魂の主を待望むは、夜衛の者の曉を待望むにいや優る。　七　実に夜衛の者の曉を待望むにいや優りて、イスラエルは主を待望めかし、そは主に憐憫あり、また彼に豊かなる贖いあればなり。　八　彼は御自らイスラエルを、そのすべての不義より贖い給わん。

第百三十篇　（第百三十一篇）

謙遜なる者の平安

一　ダヴィドの作りし上京の歌。

主よ、わが心高ぶらず、わが眼驕らず、我また大いなる事をも、わが力に超えたる事を
二 も望まず。二却つて我はわが心を、靜め日安からしめたり、己が母の膝にある幼児の如
三 く、わが魂わが裡にあり。三イスラエルよ、主に希望を繋げ、今より世々に至るまで。

第百三十一篇

（第百三十二篇）

天主ダヴィド相互の約束

一 一上京の歌。
二 主よ、ダヴィドを眷顧て、その諸種の憂慮を御心に留め給え、
三 二彼が主に誓い、ヤコブの力ある者に誓を立てしを。三我はわが家の住居に入らず、わが臥床の褥に上らず、
四 四わが眼に眠りを、わが眼瞼に息みを容さず、五ついに主の為に処を、ヤコブの力ある
五 者の為に住居を見出すまで、かくてあらん。」と。六見よ、我等はエフラタにて之を聞き、
六 ヤールの野に之を見出したり。七我等いざその御住居に入り、その御足台の前に額ずか
七 ん。八主よ、起ちて、汝の御稜威の櫃諸共、汝の鎮まり給う処に入り給え。九汝の司祭
八 等は正義を着、汝の聖者等は喜びて雀躍りに雀躍れかし。一〇汝の下僕ダヴィドの為に、
九 一〇

二　汝の受膏者の面を斥け給うなかれ。二主はダヴィドに誓いて確き御約束をなし給いたれば、之より御手を引き給うことあらじ。即ち曰わく「我汝の族より出づる者を汝の位に即かしめん。三汝の子等もしわが契約と、わが彼等に教うべき掟とを守らば、彼等の子等も亦幾久しく汝の位に坐すべし。」と。

一三　夫れ、主はシオンを選び給えり、之を御自分の御座所に望み給えり。一四即ち曰わく「是こそ永久にわが安息所なれ。我此処に住わん、蓋は我之を望みたればなり。一五我その糧を祝しに祝せん、その貧しき者をパンに飽かしめん。一六我その司祭等に救済を着せん、またその聖者等は喜びて雀躍りに雀躍らん。一七我ダヴィドの為に、一つの角を彼処に興さん、わが受膏者の為に燈を備えん。一八彼の仇には我恥辱を着せん。されど彼の上にはわが冠輝くべし。」と。

第百三十二篇

（第百三十三篇）

同胞の和合。

一　上京の歌。ダヴィドの作。

二　見よ、同胞睦みあいて共に住むは、如何に善く、如何に楽しきかな。三そは頭に注ぎし

三　貴き油の、鬚に、アーロンの鬚に、流れ下り、その衣服の裾に流れ下りしが如く、三ヘルモンの露の、シオンの山に下りしが如し。実に主は彼処にて御祝福を、世々に及ぶ生命を惜しみなく与え給うなり。

第百三十三篇　（第百三十四篇）

夜の讃美

一　上京の歌。

二　見よ、汝等主を讃め奉れ、主のすべての下僕よ、夜の定刻に主の家に立つ者よ。

三　聖所に向かいて汝等の手を挙げ、主を讃め奉れ。三願わくは天地を造り給いし主、シオンより汝を祝し給わんことを。

第百三十四篇　（第百三十五篇）

いざ天主を讃美せん

一　アレルヤ。

二　汝等主の御名を讃めよ。讃めよ、主の下僕等、二主の家に、我等の天主の家の大庭に、

三　立つ者よ。三主を讃めよ、主は慈しみ深く在せば。その御名に奏で歌え、そは芳しけれ
四　ば。四そは主、御自分の為にヤコブを、その大御宝としてイスラエルを、選び給いたれ
五　ばなり。五主の偉大に在すと、我等の主君の諸々の神に優り給うとは、我正に之を知る。
六　六主は天に於ても地に於ても、海に於ても、あらゆる水の深き処に於ても、その欲し給う
七　事を悉くなし給う。七彼は地の極より雲を齎し、電光より雨を作り、その倉庫より風を
八　出し給う。八彼は人と畜との差別なく、エジプトの初子仔を撃ち給いき。九エジプトよ、
九　彼は汝の中に徴と奇蹟とを遣して、ファラオとそのすべての臣僕等とに下し給えり。
一〇　一〇彼は多くの異邦人を撃ち、勢力ある王等を殺し給いぬ、一一アモル人の王セホン、バサ
一一　ンの王オグ、及びカナアンの諸々の王即ち是なり。一二かくて彼はその御民イスラエルに
一二　所領として、彼等の地を所領として与え給えり。一三主よ、汝の御名は永久に存す、主よ
一三　汝の記憶は千代に八千代に及ぶ。一四夫れ、主はその御民を庇護り、その下僕等を憐み給
一四　う。一五異邦人の偶像は白銀や黄金にして人の手の作なり。一六口あれども物言わず、眼あ
一五　れども見ず。一七耳あれども聞かず、またその口には気息あらざるなり。一八之を作る者、
一六　一七　一八

一九 之に依頼む者はいずれも皆、之に類す。一九イスラエルの家よ、主を讃めよ。アーロンの
二〇 家よ、主を讃めよ。二〇レヴィの家よ、主を讃めよ。主を崇むる者よ、主を讃めよ。二一イ
ェルサレムに住み給う主は、シオンより祝せられさせ給え。

第百三十五篇

（第百三十六篇）

主の御憐憫の讃美

一 一アレルヤ。
二 汝等主を讃めよ、彼慈しみ深く在せば、その御憐憫は永久なれば。二汝等神々の天主を
三 讃めよ、その御憐憫は永久なれば。三汝等諸々の主の主を讃めよ、その御憐憫は永久な
四 れば。四彼ただ独り、大いなる奇蹟をなし給えり、是はその御憐憫永久なればなり。
五 五彼は御智慧もて天を造り給えり、是はその御憐憫永久なればなり。六彼は水の上に地
七 を展べ給えり、是はその御憐憫永久なればなり。七彼は大いなる光体を造り給えり、是
八九 その御憐憫永久なればなり。八かくその御憐憫永久なればこそ、昼を掌るべき日を、九そ
一〇 の御憐憫永久なればこそ、夜を掌るべき月と諸星とを、然なし給いしなれ。一〇彼はエジ

一一 プト人を懲らすにその長子を撃ち給えり、是はその御憐憫永久なればなり。一二 彼はまた
一二 彼等の中よりイスラエルを引き出し給えり、是はその御憐憫永久なればなり。一三 かくそ
一三 の御憐憫永久なればこそ、力ある御手に御腕を差伸べて然なし給いしなれ。一三 彼は紅海
一四 を二つに分ち給えり、是はその御憐憫永久なればなり。一四 かくその御憐憫永久なればこ
一五 そ、イスラエルをしてその只中を通らしめ、一五 その御憐憫永久なればこそ、ファラオと
一六 その軍勢とを紅海の中に突き落し給いしなれ。一六 彼はその御民を導きて、荒野を通らし
一七 め給えり、是はその御憐憫永久なればなり。一七 彼は大なる王等を撃ち給えり、是はその
一八 御憐憫永久なればなり。一八 かくその御憐憫永久なればこそ、大なる王等を殺し、一九 その
二〇 御憐憫永久なればこそ、アモル人の王セホンを、二〇 またその御憐憫永久なればこそ、バ
二一 サンの王オグを然なし、二一 その御憐憫永久なればこそ、彼等の地を所領として、二二 その
二三 御憐憫永久なればこそ、その下僕イスラエルに所領として、与え給いしなれ。二三 彼は我
二四 等が卑しき身なりしに我等を記憶し給えり、是はその御憐憫永久なればなり。二四 かくそ
二五 の御憐憫永久なればこそ、我等の敵より我等を救い給いしなれ。二五 彼はすべての肉物に

二六 食物を与え給う、是はその御憐憫永久なればなり。 三六 汝等天つ神を讃めよ、是はその御憐憫永久なればなり。

第百三十六篇　（第百三十七篇）

とらわれの時を偲びて

一 バビロンの河の辺、我等彼処に坐し、シオンを憶い出ては泣きぬ。 二 我等かの地なる楊柳に、我等の小琴をかけたり。 三 即ち彼処にて、我等を引き行きし者等我等に歌を求め、我等を苦しむる者等悦楽を求めて、「我等の為に何かシオンの歌を歌え。」と云いしが、 四 他国にて我等いかで主の歌を歌うべけんや。 五 イェルサレムよ、我もし汝を忘れなば、わが右の手忘れられよかし。 六 我もし汝を憶わざりせば、我もしイェルサレムをわがすべての悦楽の上位に置かざりせば、わが舌わが顎に着けよかし。 七 主よ、エドムの子等に対してイェルサレムの日を憶い出で給え、彼等は「覆せ、覆せ、その基礎までも。」と云えり。 八 バビロンの娘よ、荒らす女よ、汝が我等に加えし悪を汝に報いん者は幸福なるかな。 九 汝の幼児等を捉えて岩に投げつけ砕かん者は幸福なるかな。

第百三十七篇　（第百三十八篇）

主の道を謳うべし

一　ダヴィドの作。

二　主よ、我わが心を尽して、汝を頌え奉らん、そは汝わが口の言を聴き給いたればなり。我天使等の眼前にて汝に向かい奏で歌わん、

三　汝の聖なる御殿に向かいて平伏し、汝の仁慈と信実との故に汝の御名を頌えん、そは汝その御名と汝の御約束とを、一切に優りて大いならしめ給いたればなり。

四　わが汝を呼び奉りし時、汝我に応え、わが魂の力を増し給えり。

五　主よ、地の王等皆、汝の御言を聴きたる時、汝を頌え奉らん。

六　しかして主の道を謳い奉らん、「実に主の御栄光は大いなるかな。」と。

七　実に主は高貴く在して、卑き者を眷顧給う、されど傲る者はただ遠方より之をみそなわし給う。

八　我たとい患難の只中を歩むとも、汝我を生存えしめ、御手を差し伸べてわが敵の忿怒に抵り給う。汝の右の御手我を救う。

主は始め給いし事をわが為になしとげ給わん。主よ、汝の仁慈は永久に存す。汝の御手の業を棄て給うなかれ。

第百三十八篇　（第百三十九篇）

天主の遍在と全知

一　歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドの詩。
二　主よ、汝我を探り給いて、我を知り給う。
三　わが坐する時にも起つ時にも、汝我を知り給う。遠方よりわが思念を了り給う。
四　わが歩む時にも臥す時にも、汝見透し、且、わがすべての道に御目を注ぎ給う。
五　言の未だわが舌に上らざる時にも、主よ、視給え、汝既に悉く知り給う。
六　汝は我を後よりまた前より抱き、わが上に汝の御手を置き給う。
七　この知識は我に甚だ不可思議、高遠にして、我之を会得する能わず。
八　我天に上るとも汝彼処に在し、我冥府に臥すとも汝其処に在す。
九　我黎明の翼を借るとも、海の涯に住むとも、
一〇　彼処にてさえ汝の御手我を導き、汝の御右手我を保たん。
一一　「せめては暗黒我を蔽い、夜光の如く我を囲むべし。」
一二　その暗黒すら汝には暗からずして、夜も昼の如く明るからん、汝には闇も光の如し。
一三　抑々汝はわが腎を

一四 形成り、わが母の胎内に我を組織て給えり。一四我は汝を讃め称え奉る、そはわがかくも
微妙じく造られたるによりて、汝の御作の奇しきによりてなり。剰え汝はわが霊魂を全
く知り給う、一五わが人知れず形成られ、地の底にて組織てられし時にも、わが物質は、
一五 汝に隠れなかりき。一六汝の御眼はわが所為を見給えり、そは悉く汝の書に録されたり。
一六 日数は、その一つだも未だあらざる前に、定められたりき。一七されど天主よ、汝の御意
一七 図は我に及び難きこと何如ばかりぞ、その総括は広大なること如何ばかりぞ。一八我之を
一八 数うれば、そは砂より多く、我終りに至るとも、なお汝と共に在り。一九天主よ、汝が不
一九 敬なる者を殺し給わんこと、また血を流す者の我より退き去らんことこそ望ましけれ。
二〇 二〇実に彼等は詭計もて汝に叛く、汝の敵は已が不忠なるを示す。二一主よ、我は汝を憎め
二一 る者等を憎むに非ずや、汝に逆い起つ者等を厭えるに非ずや。二二我は彼等をひたすら憎
二二 みに憎む。彼等は我にとりて敵となれり。二三天主よ、我を探りて、わが心を知り給え。
二三 我を験して、わが心根を知り、二四我が曲れる道に踏み入るやをみそなわし、我を古の道
二四 に導き給え。

第百三十九篇　（第百四十篇）

敵に対して主の御助けを願う

一　歌隊長に歌わしめたる、ダヴィドの詩。
二　主よ、悪しき人より我を救い出し、暴ぶる人より我を護り給え、
三　即ち心の内に悪事を企みて毎の日にも争いを起す者等より。
四　彼等は蛇の如くその舌を研ぐ。その唇の下には蝮の毒あり。
五　主よ、不義なる者の手より我を救い、暴ぶる人より我を守り給え、彼等はわが歩みを倒さんと企む、
六　傲る者は我に対して罠を伏せ、網の如く縄を張り、わが為道の辺に陥穽を設く。
七　我主に申す、汝はわが天主なり。主よ、注意してわが願の声を聴き給え。
八　主よ、天主よ、わが力強き援助よ、汝は戦闘の日にわが頭を蔽い給う。
九　主よ、不義なる者の熱望を容し給わず、その謀計を成就せしめ給うなかれ。
一〇　我を囲む者等頭を抬ぐ。その唇の悪意彼等を覆えかし。
一一　願わくは主彼等の上に燃炭を雨と降らし給わんことを、願わくは主彼等を穴に投げ入れて、再起つを得ざらしめ給わんことを。
一二　悪しき舌の人は地上に永存うることなからん。暴ぶる人は俄に禍害の襲

一三　う所とならん。一三我は知る、主が乏しき者の為に法を司り、貧しき者の為に義を行い給
二四　うを。一四実に義しき者は汝の御名を頌え、直き者は汝の御眼前に住わん。

第百四十篇

（第百四十一篇）

悪人の陰謀に対する義人の祈願

一　ダヴィドの詩。
主よ、我汝に呼わり奉る、我を助けに疾く来り給え。わが汝に呼わり奉る時、注意して
二　わが声を聴き給え。二わが祈祷は香の如く汝の御許に上れ、わが手を挙ぐるは夕の犠祭
三四　の如くなれ。三主よ、わが口に守衛を、わが唇の戸口に見張を、置き給え。四汝　わが
五　心を悪しき事に、不敬なる業を遂ぐることに、傾かしめ給うなかれ。また我が不義を行
六　う人々と共に、彼等の美食を口にすること、絶えてなからしめ給え。五義しき者、我を打
七　たば打て、そは厚情なり。我を懲らさば懲らせ、そは頭の油なり、わが頭之を辞まじ、
却つて我は彼等の悪しき仕打を受くる時にも絶えず祈らん。六その諸侯は巌の辺に落さ
れたり、彼等はわが言の如何に柔しきかを聞けり。七人が土を耕し、切り開く時の如く、

八 彼等の骨は黄泉の口に散らされたり。八 実に主なる天主よ、わが眼汝にこそ向え。我は
九 汝の御許に逃避る。わが霊魂を亡ぼし給うなかれ。九 彼等が我にかけたる罠より、また
一〇 不義を行う者の陥穽より、我を守り給え。一〇 わが恙なく遁るる間に、不敬なる輩をして
己が網に陥らしめ給え。

第百四十一篇

（第百四十二篇）

死のもだえのうちの祈り

一 ダヴィドが洞におりし時の教訓詩なり、祈祷なり。
二 声を大にして我主に呼わり奉る、声を大にして我主に願い奉る。三 我はその御前にわ
四 が憂慮を披瀝け、その御前にわが懊悩を陳ぶ。四 わが心わが衷にて思い煩う時にも、汝
五 わが道を知り給う。わが歩む道に、人々我にと罠を伏せたり。五 我右を顧み、見渡した
れど、わがことを憂うる者なし、わが逃避るる所なく、わが生命の為に配慮る者なし。
六 主よ、我汝に呼わり奉る。我申す、汝はわが避難所なり、生けるものの国にてわが受
七 くべき分なりと。七 わが叫声に御意を留め給え、我甚だ悲惨になりたればなり。我を、

八　迫害む者等より救い出し給え、彼等は我より強ければなり。八我をして汝の御名に感謝せしめんために、我を牢獄より連れ出し給え。汝我を懇切にもてなし給いたれば、義しき者等我を囲まん。

第百四十二篇

（第百四十三篇）

患難に逢いて御憐みを乞う

一　ダヴィドの詩。

一　主よ、わが祈祷を聴き給え、汝の信実によりてわが懇願を御耳に留め給え、汝の正義によりて我に応え給え。二汝の下僕を御審判に召し出し給うなかれ、そは生ける者は誰も汝の御前に義しからざればなり。三実に敵はわが霊魂を責苦しむ。彼わが生命を地に打伏せ、死して久しき者の如くに我を暗黒の中に置きたり。四かくてわが霊わが衷に衰え、わが心わが衷に凍え竦めり。五我は往古の日々を偲び、汝の諸々の御業を思い廻らし、汝の御手のなし給える所を具に考え量る。六我は汝に向かいてわが手を差し伸べ奉る。わが魂は燥げる地の如く、汝を渇望む。七主よ、速かに我に応え給え。蓋はわが霊衰う

れば なり。我に御面を隠し給うなかれ、然らずば我穴に下る者の如くなるべし。八 我汝に依頼み奉れば、疾く汝の御恩寵を感ぜしめ給え。我汝に向かいてわが魂を挙げ奉れば、九 わが歩むべき道を我に知らしめ給え。主よ、我をわが敵より救い出し給え、我は汝に一〇 希望を置き奉る。一一 汝はわが天主にて在せば、我に御旨を行うことを教え給え、汝の御一二 霊は慈愛深し。願わくはその我を平坦なる地に導き給わんことを。一三 主よ、汝の御名の為に、我を生存えしめ、汝の寛仁によりてわが魂を患難より引き出し給え。一四 また汝の御仁慈によりてわが敵を撃破り、わが魂を悩ます者を悉く亡ぼし給え。蓋は我汝の下僕なればなり。

第百四十三篇

（第百四十四篇）

主を王といただく民は幸いなるかな

一 ダヴィドの作。

二 わが巌なる主は讃むべきかな、彼はわが手に闘いを、わが指に戦を、教え給い、三 わが憐憫わが城、わが砦わが救済者、わが楯わが避難所にして、民を我に服わせ給えばなり。

三　主よ、人そも何者なれば、汝之を御心にかけ給い、人の子また何者なれば、汝之が上を思い給うや。四　人は一呼気の如く、その存うる日は移ろう影の如し。五　主よ、汝の天を傾けて下り、山々に触れ給え、さらばそは煙を吐かん。六　電光を閃かしてそを打散らし、御矢を放ちてそを壊り給え。七　高処より汝の御手を差伸べて、大水より、異邦人の手より、我を助け出し、我を救い給え、八　その口は虚言を語り、その右の手は偽り誓うなり。九　天主よ、我汝に向かいて新しき歌を歌い、汝に向かいて十絃の琴を奏でん。一〇　汝は王等に勝利を与え給う、汝はその下僕ダヴィドを救い出し給えり。邪悪の剣より、一一　我を助け出し、異邦人の手より我を救い給え、その口は虚言を語り、その右の手は偽り誓うなり。一二　我等の男子は若き時に育つ緑の苗の如く、我等の女子は殿柱の状に刻める隅柱の如くなれかし。一三　我等の倉は諸々の産物に充ち溢れ、我等の羊は幾千度仔を生み、我等の野にて幾萬に殖え、一四　我等の荷を負う畜は能く重きに耐えよかし。石垣には破れ目あらざれ、また裂罅あらざれ、我等の衢には嘆きの声あらざれ。一五　かくの如きを有てる民は幸福なるかな、主を己が天主と戴く民は幸福なるかな。

第百四十四篇　（第百四十五篇）

天主の偉大と仁慈との讃美

一　ダヴィドの讃美。

二　わが天主よ、王よ、我汝を宣べ伝え、世々の世々まで汝の御名を頌えん。

三　我毎の日にも汝を頌え、世々の世々まで汝の御名を讃めん。

四　主は偉大に在して大いに讃むべきかな、その偉大さはよく窺い知るを得ず。

五　代は代に汝の御業を語り伝え、汝の大能を告げ知らす。

六　彼等は汝の御稜威の大いなる栄光を語り、汝の奇しき御業を云い拡む。

七　また汝の恐るべき御働きの勢を説き、汝の偉大さを談る。

八　彼等は汝の大いなる御仁慈の讃美を宣べ伝え、汝の正義に喜び躍る。

九　主は寛仁にして憐憫に満ち、気長にして恵豊かに在す。

一〇　主は一切のものに仁慈深く、そのあらゆる御作に対して憐憫に満ち給う。

一一　主よ、汝のあらゆる御作をして汝を頌えしめ、汝の聖者等をして汝を誉めしめ給え。

一二　彼等をして汝の御国の栄光を説き、汝の大能を語らしめ給え。

一三　汝の御国の大いなる栄光と人の子等に知らしむるを得んためなり。

一三　汝の御国は萬世

に及ぶ御国なり、汝の支配は代々に亘る。一四 主はその御言悉く信実にして、その御業すべて聖なり。一五 主は倒るる者を悉く支え、屈める者をすべて引起し給う。一六 萬人の眼は汝を仰ぎ望む、汝は彼等に食物を、その宜き期に与え給う。一七 汝は御手を開きて、あらゆる生けるものを御恩恵に飽かしめ給う。一八 主は凡て之を呼び奉る者、凡て誠意もて之を呼び奉る者に近く在す。一九 主は彼を畏るる者の志望を果し、その叫声を聴きて之を救い給わん。二〇 主は凡て彼を愛し奉る者を守り給う、されど不義なる者を悉く滅し給わん。二一 わが口は主の讃美を語れ、また肉は挙りてその聖なる御名を、世々の世々まで誉め奉れかし。

第百四十五篇

（第百四十六篇）

真の助力者はただ主のみ

一 アレルヤ。

二 わが魂よ、主を讃めよ。二 我はわが生ける間主を讃め奉らん。わが在らん限りわが天主に奏で歌い奉らん。三 諸侯に依頼むことなかれ、人にも然することなかれ、彼に依りて

は救拯なければなり。四その気息出で去るや、彼旧の土に帰るべく、然る時はその企画
悉く滅びん。五幸福なるかな、ヤコブの天主を己が祐助者とする者、己が希望をその
天主たる主に置く者、六彼こそは天地及び海とその中なるすべてを造り給いし者、永久
に信実を守り、七虐げられたる者の為に法を司り、飢えたる者にパンを与え給う者なれ。
主は捕虜を解き、八主は盲人の眼を開き給う。主は屈める者を引起し、主は義しき者
を愛し給う。九主は外国の者を守り、孤兒寡婦を支え給う、されど罪人等の道は之を破
壊り給うなり。一〇主は永久に、シオンよ、汝の天主は千代萬代に、統治し給わん。

第百四十六篇

（第百四十七篇）

大能の天主への讃美

一アレルヤ。
主を讃めよ、彼慈しみ深く在せば。我等の天主に奏で歌え、彼いと妙に在せば。讃め奉
るは彼に相応わしきかな。二主はイェルサレムを建て、イスラエルの散れる者等を集め
給う。三彼は心の砕けたる者を癒し、彼等の傷に繃帯し給う。四彼は星の数を定め、こ

五 れを各々その名もて呼び給う。 五 我等の主は偉人にして能力また偉大なるかな、その御
六 智慧は無量なり。 六 主は謙遜なる者を引挙げ、不敬なる者を地に圧伏せ給う。 七 主に感
七 謝して歌え、我等の天主に小琴を奏でよ。 八 彼は雲もて天を蔽い、雨もて地に備え、山
八 々に草を、人の用に蔬菜を、生ぜしめ、 九 家畜に、また彼に向かいて啼く鴉の仔に、そ
九 の食物を与え給う。 一〇 馬の力は彼を喜ばしめず、人の脚は彼に嘉せられず。 二 主に嘉せ
一〇 らるるは、之を畏るる者、その御仁慈に依頼む者なり。

第百四十七篇

シオンよ、汝の天主を讃め称えよ

一(一二) イェルサレムよ、主を讃め称えよ、シオンよ、汝の天主を讃め称えよ。 二(一三) そ
二 は彼、汝の門の閂を堅うし、汝の内なる汝の子等を祝し給いければなり。 三(一四) 彼は汝
三 の四境を安穏ならしめ、汝を麦の膏味に飽かしめ給う。 四(一五) 彼御勅を地に下し給う、
四 御言は速かに馳せ行く。 五(一六) 彼雪を羊の毛の如く降らし、霜を灰の如く撒き散らし給
五 う。 六(一七) 彼その氷をパン屑の如く投げ給う、その寒冷に逢いては水も凝固まる。
六

七(一八)彼御言を出して之を融かし、その風に命じて吹かしめ給えば、水流る。 八(一九)彼
はヤコブに御言を、イスラエルに律法と誡命とを、告げ給えり。 九(二〇)彼はいずれの国
民にもかくなし給わざりき、彼等にはその誡命を明示し給わざりき。
アレルヤ。

第百四十八篇

天地の讃美

一 アレルヤ。
二 諸天より主を讃めよ、高き処にて彼を讃めよ。 三 その諸天使よ、彼を讃めよ、その万軍
よ、彼を讃めよ。 四 日と月よ、彼を讃めよ、諸々の燦く星よ、彼を讃めよ。 五 諸天の天
よ、彼を讃めよ、天の上なる水よ、亦然せよ。 六 是等のもの主の御名を讃めよ、蓋は彼
命じて是等のものを創造り、之を立てて限りなく代々に及ぼし、過ぎ去ることなき法の
則を与え給いたればなり。 七 地より主を讃めよ、龍よ、また海のすべて深き所よ、 八 火
と霰よ、雪と霧よ、御言を行う暴風よ、 九 山々と諸々の丘よ、実を結ぶ樹木とあらゆる

一〇 杉よ、一〇野獣とすべての家畜、爬うものと翼ありて飛ぶものよ、二地の王等と諸々の民よ、諸侯と地のすべての裁き人よ、一二若者等も処女等も、老いたるも幼きも、諸共に、一三主の御名を讃めよかし、其はただその御名独り高ければなり。その御稜威は天地を凌ぎ、一四彼その民の為に角を高く上げ給えり。彼はその諸々の聖者等、彼に近き民なるイスラエルの裔等の称うる者にて在す。アレルヤ。

第百四十九篇

選民の讃美

一 アレルヤ。
二 汝等主に新らしき歌を歌え。その讃美は聖者等の集会の中に響き渡れ。
三 イスラエルはその作者を思いて楽しめ、シオンの子等はその王を思いて喜び躍れ。
四 彼等は円舞してその御名を讃めよ、彼に向かいて鼓と小琴とを鳴らせかし。
五 そは主その御民を愛し、謙遜なる者を勝利もて飾り給えばなり。
五 聖者等は、栄光を思いて喜び躍れ、その臥床

六七にて楽しめよかし。六その咽喉には天主の讃称、その手には両双の剣あれ。七是は異邦人等に復讐を、諸民に懲罰を加えん為、八彼等の王等を足械にて、彼等の貴族等を鉄の手械にて、縛めん為、九彼等に予定の審判を行わん為なり。そのすべての聖者等の栄光は是の如し。

アレルヤ。

第百五十篇

大なる讃美

一アレルヤ。

一主を讃めよ、その聖所にて。彼を讃めよ、その厳かなる蒼穹にて。二その御業の大いなるによりて彼を讃めよ、その御稜威のいと尊きによりて彼を讃めよ。三喇叭の音もて彼を讃めよ、琴と小琴ともて彼を讃めよ。四皷と円舞ともて彼を讃めよ、管絃もて彼を讃めよ。五音佳き鐃鈸もて彼を讃めよ、鳴り響く鐃鈸もて彼を讃めよ、気息あるもの皆主を讃めよかし。

アレルヤ。